

# 英雄育成の為に周回で狩られる腕の裏話

夢見 双月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黎明の腕。それは英霊の糧。

強化用素材を落とすアレに不幸にも転生した人の胸中の慟哭。

誰もその言葉を知る者はなく。

されどその生涯の尽くにこそ、意味がある。

この身体は、無限に出来ていた。

「ある意味、無限地獄だぞ」

## 目次

英雄育成の為に周回で狩られる腕の裏話	1
『特異点F』 絶対周回悪夢 名も無き平野』	
死亡回数が世界人口を超えた頃（適当）	7
目覚める波動、金リング咀嚼で「あつ（察し）」	13
欺瞞が分かるならきつと肉体言語も分かる	18
超エキサイティング・パーティ	24
初めてのせーはいたんさく	28
星の紋章、文明壊化。	32
役者は揃った……？	36
聖杯は誰の手にあるか	40
朽ちるからこそ、輝く	44
役者は揃ったツ!!	48
過去の栄光を切り札に	51
今までのこと。これからのこと。	56
グランド・アナザー・オーダー、開始	61
神と袂を別つ、天の楔と呼ばれた男	65
施しと対を成す、授かりの英雄	70
影の国の神殺し	74
諸事情につき、回想をお送り致します。	78
友ではない、親しき夢。	84
友ではない、親しき夢の跡。	90
最優の敵に、結末を望む夢。	95
最優の敵に、結末を望む夢の先	99

	最上の弟子に、殺されたい夢	105
	最上の弟子に、殺されたい夢の果て。	109
	幕間「オルガ、死す」	117
	セイバー、ひどくない？	126
	セイバー？……何故こつちを見ない？	129
	みんなを救うだけの夢	134
	みんなを救うだけの夢の残滓	137
	黎明の腕を持つ男 その一	142
	黎明の腕を持つ男 その二	146
	黎明の腕を持つ男 その三	150
	夜が更ける。悪夢は呪う。	154
	光の勇者、来光のしるべ その1	159
	光の勇者、来光のしるべ その2	165
	光の勇者、来光のしるべ その3	168
	黎明の時きたれり、其は世界を照らす者	174
	旅の果てと、物語の始まり。その1	179
	旅の果てと、物語の始まり。その2	181
	旅の果てと、物語の始まり。その3	185
	英雄である為に腕を狩る男の夢のような話	190
	Epilogue その後の話。	
	サルバドールが遺したモノ	199
	終わりは突然に。前編	204
	終わりは突然に。後編	208
Another Order	そして旅は続く	212

## 英雄育成の為に周回で狩られる腕の裏話

君達は私達の事を知っている筈だ。

我々は幾度となくカルデアの軍勢に襲いかかり、時には辛酸を舐めさせ、時には圧倒的なまでに蹂躪される。

それでも尚、輝き続ける我らの腕の名前は……

……。

……な、名前は……。

……すいません、だれか漢字を教えてください。

『英雄育成の為に周回で狩られる腕の裏話』

転生なのか。これは。

最初に思い至った疑問がこれだった。

よおく、考えて欲しい。なんらかの原因で転生した先が、あのFGOの雑魚敵で有名なあの腕である。あのー、やられたら種火落とす奴。

名前は、黎明の手。又は腕。又は剛腕。又は神腕。

まず、『黎明』の読み方が分からない。何だこれは。だれだ、こんなまともに読む事すら難しそうな名前は!? わざわざ調べたよ! 『れいめい』だってな! シラネエヨ!

しかも、知覚できるのは地上に飛び出てる腕のみ。地面にあるであろう肩やら胴などの部位は全くもって分からない。

視覚や聴覚はなく、ただ訳の分からない感覚によって漠然と周りの分かる恐怖。怖すぎる。

ついでに喋ることも出来ない。知ってた。

こんな状況だからこそ周りを見る事なんて出来なくて。いつその事、それに気付かなかった方がよかったとさえ思えた。しかし、その雄叫びはF G Oのマスターならよく聞き慣れた……。

『流星<sup>ステラ</sup>一条』アアアアアッ!!!』

ザコとなった俺にとって、死の宣告だったのだ。

視界(?)の辺り一面は爆散し、俺は跡形もなく消え去った。

それが俺が最初に撃墜された時の思い出。あの時は焦った。「転生した意味nee e e!!」とか考えながら吹っ飛んだ。死ぬかと思っ

た。  
その後の事を端的に言えば、蘇生した。

「腕は滅びぬ!何度でも蘇るさあ!」とか言うやつだ。

しかも、周りの状況とか分かるくせに、触覚とかもあるくせに痛覚がなかった。これのおかげか、死んだ事が拷問じみた何かになる事もなかった。

この、蘇生と痛覚遮断が出来る。この二つが一度消滅してから分かった事だった。

それから時は流れて、今ではすっかり……

「フレ頼光さん!宝具いっちゃって!!」

「行きますよ!『牛王招雷・天網恢々』ツ!!」

快適ハンドオンリーライフを満喫しております。ぎゃー。

この世界を説明するにあたってまず聞いて貰いたいのは、この世界は決してループする世界ではないと言うことだ。

ループとは、もし死んでしまうと死ぬ前の状況にまで時間を遡っていくことを指すが、これは蘇生した後による2回目の転生の状況に

よって大幅に可能性が激減した。

それは俺が黎明の手であった事と、敵がステラさんでは無かった事だ。

そもそも一番最初に死んだ時、俺は黎明の中でもどの敵だったか。それは、黎明の神腕である。理由は後で説明するが、さらにカルデアから来たであろうサーヴァント達はマッシュ、カエサル、フレンドジャンヌのパーティだったのだ。

この後ジャンヌの旗に刺さって死んだのだが、これによってループではなく、消滅と蘇生を繰り返しながらも時が進んでいる事が分かった。

これによって何が分かるか。つまり、今は人理焼却を防ぐため、サーヴァントを強化するために俺たちをフルボッコにしている。ならば定礎復元だの何だのさえ終わってしまったえばお払い箱行き、転生するにしてももつとまともなトコに行けると踏んだのだ。

時間が全てを解決してくれると分かった今、余裕を持って死んでは生き返りをしていると言う訳だ。

と、なればポジティブシンキングである。よく考えれば、痛覚遮断こそされているものの、死ぬ機会なんて滅多にない。好きだけ種火を持っていけばいいのだ。

ある時はステラされ、ある時はランスロさんにガトリングをぶち込まれ、ある時は頼光が五人に増え、ある時はバニヤンに踏んづけられる。ある時は茶々に燃やされながら突かれる。

……あれ？ロクな死に方くない？

偶に他のサーヴァントの全体宝具であべしッ！するが、ほとんどがステラさんに「アーラシユー！」されるか、全体宝具のバーサーカー（カレイドスコープ付き）で一扫されるかのどれかである。紙耐久エ……。あ、あとニトクリスに即死喰らうことも多いかな？

そんな中でも面白いのが、マスターの立ち姿を観察する事だ。

ほとんどのマスターは全体宝具ぶっぱによる高速周回をする事だろう。だが、マスターがいつでも元気とは限らない。ちよつと疲れた顔をしながらヘンテコに輝くリングをモツシヤモツシヤ食べてるの

は当たり前、目にクマを付けながら頭を時折カツクンカツクンいわせながら見守るマスターもいれば、完全に目線の照準が合っていないままゾンビのように佇んでいるマスターも数多く存在している。

何人か見た事あるのが、どこを見ているか分からない虚ろな目で1箇所を見つめ続け、サーヴァントに指令も送らず、翌朝になった辺りで「はっ!?寝てた!?!」と急に正気に戻るマスターである。これには流石のサーヴァント達もズッコケていた。

しかし、それらよりもっと面白いのが、発展途上のマスター。つまり、育ち盛りのマスターが背伸びをして、超級の種火クエストに来る時である。(ちなみに2回目のマシユカエサルジャンヌパーティがコレにあたる)

フレンドさんにおんぶに抱っこをしながらも自分のカルデアを強くするために頑張るマスター達に、ボコボコにされながらもホッコリ。

まあ、ちゃんとファイアボール的なのは撃つんですけどね。これはアレですよ。スパルタ教育みたいなもんですって。

あ、ついでに言わせて貰うけど、サーヴァントを倒しちゃった時にあからさまに不機嫌になるのやめてくれませんか？一部のマスターとか「チツ!!」って完全な舌打ちをしてるの知ってるからな!?!アレやめろ!マジで傷つくんだからな!!

次に黎明のホニヤララの違いとかについてなんだけど。いわゆる、手とか剛腕とかの違いね。これは単純なスペックの違いだけではない。縦の繋がりというものがある。カンタンに言うと、時間経過に応じて進化。最終形態の神腕になっていくのだ。

ん？何故、不機嫌かって？

当たり前だろ！神腕が一番消し飛ばされやすいんだからな!?!

主に周回で消し飛んでは手から進化して神腕になり、死んではすぐ手に戻って今度は神腕になってないのにサーヴァントが来てひでぶっ！する。

やっぱり、痛みがなくてもタイミングを選べないのはツライ。カル



デアの方々クエストを選んだら何が何でも応戦しないといけませんし。神腕になった途端にカルデアの高速周回組にマッチングするし。

何故か時々、神腕のまま蘇生する時あるんだけど。突然変異か何か？

……え？神腕が足りない？どんどん狩られる？どこの電波だこれ。知るか。

遂に、遂に来た。待ちわびた終局特異点。マスター達が人理修復に躍起になってくれている。

これで「ぎゃー」最後の敵を「うわー」倒す事が出来たら遂に「やめてー」俺たちの仕事が「イタイ」終わる。今まで「しぬー」長かった。あと少しだ「ギャフン」みんな！頑張つて倒せ「ぶるああ」……つて痛いなさつきから!?!どんだけ死にやあいなんだ!?!何!?!なんなの!?!……え？ラスボス倒せないから他のサーヴァント強くしたい?……ソツスカ。

詳しくは分からなかったが、魔神柱とか言う奴らは幾万のマスター達によって手当たり次第に折られていったらしい。

敵だから悪い奴としか言えないが、「殺したかっただけで、死んで欲しかったわけではなかった」と言うマスター達の言葉を聞くと、何故か親近感というか仲間意識が芽生えた。案外、魔神柱と俺たち黎明の腕は似た者同士かも知れない。

最後の敵、ゲートイアもマスター達とその仲間の英雄達が倒し、それぞれの世界の人理修復を成し遂げたようだ。

ともかくこれで、俺たちはお払い箱になる。……はずだった。

ねえ、1・5部って何？

まだ人理修復終わってないマスターがいる!?

2部ってなにさ!?!まだ終わらないの!?!?

なんでさああああ  
!!!!

今日も黎明の腕は種火を吐き出す。

だがそれが決して、恨みを持つことはない。  
だが、覚えていて欲しい。

人間や英雄が平和を望むように。

戦いの終焉を望む者は他にもいることを。

『また来たか』

『蹂躪は構わんが、さっさと人理を守ってこいよ』

その名の通り、夜明けを願って。

英雄育成の為に周回で狩られる腕の裏話。完

『特異点F， 絶対周回悪夢 名も無き平野』  
死亡回数が世界人口を超えた頃（適当）

君たち……覚えてるだろうか。

そうだ。我が名（？）は、『黎明』の腕だ。

覚えているか？

……本当に？忘れてない？

じゃあ、『黎明』なんて読むか覚えてる？

……分らん奴は10回は前のヤツを読み直して来いや。  
じゃないとブチギレるぞ。

あ、答えられた奴は1000回読んでくれな。頑張れよ。

まあ冗談はさておき、今の状況を説明せねばなるまいて。

いつものように俺はまずステラで死に、生き返っては死に、生き返っては死にを毎度のごとく繰り返していた訳だが。

いつもの。

ツライネ!!

泣きたくなってくるよ！腕だけだから泣けねえけど!!いつまでやらせんだよ!!

それなのに。

今はいつもの森で転生したワケではなかった。

マジで何処だよ。ここ。

全体的に暗いなあ。暗雲が立ち込めているっていうか、周りの景色は見える(?) んだけど……なんかどこか重苦しい雰囲気がある。少し寂しい。

そもそも草むらとか初めて転生したわ。今まで森の中だったから、それだけでも嬉しいもんだよ。

この周りには目が血走ってるマスターとかいないし、るんると探索しよつ。

……なんて考えてしばらく。人っ子一人居ませんわ。誰にも会わなすぎて逆に怖い。

歩いてても歩いても景色が変わらないんだなコレが。

……えっ? 腕だけなのに歩けるのか? 歩けるわ、たわけ!

見た目がホバー移動みたいになってるだけだし。歩いてるから。

あーあ。

誰か来ねえかな!!

寂しすぎる。会話出来る人がほすい。

いつそ、殺されても文句言わないから誰か来て。(長年の経験による慣れ)

不意に、上空が光る。

流星のように落ちてくるそれは、俺の近くの草原に衝突した。

いやあ……ええ……。

フラグ回収早くないです？

そんなチカラはわたしにはございませんよ？

まあ、ヒマなので向かうけど。

墜落した爆心地に腕だけの存在が向かうという奇妙な構図になりながらも

、何が落ちて来たのかを知るために近づいた。

あらら……。

なるほどねえ……。

コレは、そういう事になるかな。

精々、楽しませてくれよ？

その世界は、炎に包まれていた。

奇妙な骸骨が蔓延り、シャドウサーヴァントと呼ばれるものが暴威を振るう。

レイシフトの事故として冬木という都市に飛ばされた俺こと、藤丸立香は盾を持った……えっと、シールドのサーヴァントだっけ？に変身したマシユという少女に助けられた。

デミ・サーヴァントという、英霊にチカラを借りた状態である事をマシユは俺に伝えてくれたのはいいんだけど。イマイチ何のことが分かってない。

とりあえず、周りの敵をやっつけられるぐらいには強く、事故で負った怪我が完治している事はありがたかった。

そして今は、カルデアの所長であるオルガマリー所長と、キャスターを名乗る英雄と合流し、カルデアからの通信に出て来たロマニさんとダヴィンチちゃんを加えて、これからの事を話し合っていたころだ。

話し合いのひと段落はついて、キャスターが言う。

「坊主。体力が残ってるかは知らんが、今のうちに寝ておけ。この後のセイバーとの戦い、アーチャーのヤツも残っている事から一筋縄ではいかねえだろう。休める時に休んでおくんだな」

俺は見張りをしてくるからよ、と言い残して去っていくキャスター。

オルガマリー所長やロマニも同じ意見のようで、休息を勧められた。

仮の拠点とした建物の中にベンチを見つけ、言われた通りに横になる。

すると、寝る前にマシユが寄ってきた。

「先輩」

『どうしたの？』

「あ……いえ……。特に言わなければならない事はないのですが……先輩は私を守りますので、安心して休息してください」

『ありがとう。マシユ』

『い、いえ。それでは私は所長の所に戻ってますね』

なぜ俺を先輩と言ってくれるのかは分からないけれど、これから彼女の事は知っていけばいい、のかな？

彼女なりの励ましに救われながらも、やがて意識を手放していく。

色々あった。起きた後も同じように波乱が起きるだろう。  
今だけはゆっくりと。

そう。ゆっくりさせて欲しい……。

……。

……。

「起きろ！坊主ッ」

『痛ア……!?!』

「……たかがデコピンしただけだろうが。そんなことより。お前、ここで何をしてる?」

『えっ?……キヤスター?』

「ああ?何言ってやがる。オメエには俺がドルイドにでも見えるのか?」

はっ、と起き上がる。

景色が違う。

今までいた場所が赤の世界なら、ここは黒の世界。

『マシユは!?!オルガマリー所長とか、ロマンはどこにいるの!?!』

「落ち着け。あー、坊主も呼び出されたクチか?」

『呼び出された?』

「とりあえず、そこらの辺りから説明するとするかねえ」

「言っておくが、俺はキャスターじゃなくランサーだ。まっ、気楽にやろうや」



目覚める波動、金リングゴ咀嚼で「あつ（察し）」

「……という事だ。分かったか」

『……』

「……」

その二人は、茂みの少ない林の中で座っていた。一人の少年は真剣に青タイツと向き合い、青タイツは苛立ちを隠さずに腕を組んでいる。

『……？』

「分かった。これで俺の説明不足じゃなくて、お前がバカなだけって事がよおく分かった」

『なんでさ』

「なんでって……これで5回目だぞ!?!どんだけ説明すりや分かってくれんだオメエは!!」

『ええ……』

「全く、呆れさせやがる。いいか?」

「一つ、ここがどこか。それは俺にも分からねえ。少なくとも以前の聖杯戦争に参加したことのある場所でもねえし、辺りには文明はおろか人すらいないのが現状だ」

「二つ、俺は何者か。俺の真名に関しては言うわけにはいかねえ。適当にランサーとでも呼んでくれや。そんで俺はここに召喚に応じて呼び出されたはずなんだが、野良サーヴァントになっちまってる」

「三つ、テメエはなにもんだ。今の状況じゃあ坊主が敵なのか味方なのか、それすら分かりやしねえ。仮に敵だとしても、坊主一人に遅れは取らねえがな」

『やっと理解出来た。初めからそう説明してくればいいのに』

「ちゃんと言ってるわ！テメエが途中から目を半開きにして寝てなけりや、確実に1回目で分かったただろうがな!!」

『とにかく情報収集をしよう』

「テメエの名前すら聞く気しねえから、坊主で通すぞ。だが、先にお前の素性を言え、さもねえと流石に刺すぜ」

『あつ、そうだった。俺はカルデアという機関から来ました』

「へえ、カルデア……ねえ」

『以上です』

「おいちよつと待て」

『?』

「いや、そこで傾げられても困るんだがよ。結局、何者なんだよ。今ので分かったら流石にそいつがおかしいぐらいには何も分からなかったぜ?」

『だから、カルデアから来ました』

「そのカルデアってのがなんなのか知りてえんだけど」

『ランサーは会話について行けてますか?』

「テメエにだけは言われたくねえわ!!」

『……俺にカルデアの事が分かるわけないでしょうが!!』

「自分の入った組織の目的ぐらい把握しとけやあ!!」

こんな感じの問答が小一時間ぐらい続いた。

その後、なんとか要領を得たらしいランサーが大きくため息を吐いた。

「まったく。新入りだとは言え、こんな奴がメンバーでいいのかな？  
その……人理ナンタラ保障機関とか言う組織は」

『俺がここに連れて来られた理由を知りたい』

「さあな。おそらくだが、サーヴァントの中には夢の中に入ってくる  
ことのできるヤツもいるはずだ。可能性としてはそいつが黒幕とい  
うのは十分ありえるが……事がそう単純ならいいけどよお……」

『とにかく情報を集めに行きましょう。ランサーはこれまでに気に  
なつた事はありますか？』

「……確かにあるっちゃあ、ある。だがなあ……」

『何かあつたんですか？』

「おかしな奴らしいしかなかった。お前よりも下手するとやばい、と思  
えるぐらい」

「もう一人のランサーのところに行ってみるか？坊主」

ランサーの案内により、林を出る。

藤丸立香が尋ねる。

「もう一人のランサーって、別のサーヴァントがいるって事？」

「ああ、俺が知ってる限りならセイバーもいた。まあその話は後でも  
いいさね。そろそろお出ましたぜ」

『お出まし？……これは!』

平野の草むらの間から生えるかのように現れるモノ。

それは。

『……手?』

「ここらでよく見る雑魚に過ぎん。ただ数は厄介だな。もう一人のラ  
ンサーに会うためにはコイツらを倒さなきゃいけないわけだが、お前  
はどうする?」

聞かれた時。藤丸立香は既に前を見ていた。

これから進む行き先を見据えていたのだ。

『もちろん！戦う！』

「けっ、未熟な魔術師風情に何ができんだ。サーヴァントを使うことマスターつつーなら、俺を使ってみな！」

『行くよ、ランサー』

「任せなあ!!」

『まずはAQQでNPゲージを溜めるんだ!』

「お……おう!?お前何言って……ぎゃあああ!!!?」

『何をやっているんだランサー、一人しかいないんだからブレイブチェインをしないと。それに、宝具は基本的にWave3でぶっぱが安定って先駆者達が言ってたんだけど』

「すまねえ。テメエが何言ってるかさっぱりわからん。俺が悪いのか?」

『さて、何か落ちてるかな。腕は確か、種火を落とすんだよね』

「いや、そんなのあるわけねえだろ」

『えっ』

「え」

『だって、腕なら種火落とさないと……』

「だから、そんなもん落とさねえって」

『えっ』

「え」

『……』

「……」

この事からしばらくして、付近の腕を薙ぎ払いながら暴走するマスタアの姿があつたとか。

終始、『種火をココセエエエエエ!!』といいながら発狂する姿は、まるであらゆる先駆者を取り込んだ亡霊のようであつたという。

まあ、確かに一部の界限で種火を落とさない腕に意味は無いわけだが。

この光景を見たランサーは、本当に藤丸立香と共にいいのかを本気で考えたという。

欺瞞が分かるならきつと肉体言語も分かる

『ごめん、見苦しいところを見せてしまったようだ』

「見苦しいどころの騒ぎじゃなかったぜ？」

藤丸立香の謝罪は切り捨てながら、ランサーは思索する。

妙な引っかけかりを少し感じた程度ではあるが、そこが気になる。

「アイツら弱くなつてるとはいえ、マスター程度にやられるぐらい弱いはずじゃねえんだけどな」

『えっ、弱いつてどういう事？』

「本来、コイツらは既に弱体化している。さっき種火が出ないと言つたろ？その原因でもある。簡単に言やあ、光つてねえだろ？」

『確かに……？そうですかね？』

「元々は腕のあらゆる所に伸びている線の部分が光っていて、かつ手の上にある結晶もこんなガラスみたいな状態じゃねえ」

『そうなんですか』

「それでも、この結晶の中から火の玉が襲ってくるヤツがほとんどだったんだがなあ。今じゃ、それすら出なくなっちゃまって、相手するまでもなくなっちゃってる。これなら槍を使わない方が速えぐらいさ」

『だから、あんな変なノリだった俺でも倒せたと？』

「そうだろ。見たところ、お前さんは戦士じゃねえのは分かりきってる。……あらよつと」

そう言いながら、ランサーは握り拳で突進してくる腕をサッカーボールキックで吹き飛ばした。

「一応、つまらねえ義理を通すために案内するだけだ」

ランサーはそう言った。

『えっ？』

「なあに、言つたろう？俺は召喚されたってな。その上で自由を与えられるだけって事だ。俺の主人だと言い張るヤツは新しく来た人間なら喜んで食いつくだろ」

「よお、ランサー」

「気配がしたから来てみたが、やはりお前かランサー。少しやつれて見えるが、不運でも起きたか？」

『ええ!?!空から人!?!』

空から飛んできたのは、炎に包まれながらも金色の鎧、金色の槍を携えた男。

着地したもう一人のランサーと呼ばれた男たちは、ただ真つ直ぐに藤丸立香を見据える。

「この人間は何処にいた？」

「後ろの林に倒れてたぜ。どう来たのかは知らねえ」

「そうか」

「アイツに会わせりや喜ぶだろ」

「お前のマスターでもあるが」

「平和ボケしたヤツは俺とは合わねえよ。じゃあな」

ランサーは手をひらひらと振り、そのまま帰っていった。

『……あの、あなたはなんて呼べばいいですか』

「ランサーでいい。……が、そうだな。区別するのなら、赤のランサーと呼べばいいだろう」

『なら、きつきの人は青のランサーって呼びますね。青のランサーは何をしているんですか?』

「何もしていない。正確に言えば、既に役目を果たしたサーヴァントと言えるだろう」

『役目って……?』

「自分の武勇伝を語り、それが済んで用無しとなった」

『マスターの人酷いな!?!』

「マスターが青のランサーを喚んだ理由がそれだけらしい。実際の英霊に歴史上での活躍を聴くのがマスターの目的だった」

『サーヴァントって、聖杯戦争って言う争いに召喚されるものって聞いたんですが……』

「ああ、本来はそういうものだろう。だが、今回はイレギュラーな状況に近いだろう」

「我がマスターが言うには、この世界は『夢』だ、という。であれば、一時の夢幻であろうと俺はマスターに従うのみだ」

赤のランサーは気を使つて、空を飛ばずに歩いて先導をする。それに藤丸立香が追従する形である。

「む」

『あーさっきの、腕「真の英雄は目で殺す……!!」』

そう言った途端、赤のランサーの目からビームが出た。目から、ビーム。

『……ええ?』

「行くぞ」

『ええ……?』

赤のランサーが止めた足を戻し、そのまま歩いて行く。

サーヴァントって、目からビーム出すんだ。

そう思った藤丸立香は悪くない。

それからしばらく歩くと、草が生えていない開けた場所に出てきた。

その中央には形が歪な木造の建物が一つ、ポツンと建っている。

赤のランサーが止まる事なく入り口に入っていったので、藤丸立香



もそれに続いた。

「マスター、客人を案内した」

『えっと……あの……』

「どうかしたか？」

『何処にいるんですか？マスターって……』

『いるだろう。そのテーブルの上だ』

「て、テーブルの上って……」

右からテーブルの上に置いてあるモニュメントを見やる。

モアイ像。

男装金髪騎士のフィギュア。

さつき見た腕の輝いているバージョン。

メジエド。

ちびノツブ。

リヨぐだ子。

……どれ？

『あの……ランサーさん？』

「どうかしたか」

『ヒント、くれませんか？』

「……なるほど、承知した」

「『生きている』ものだ」

『自分のマスター死んでたらそりやヤバいでしょうよ』

だとしても、半分以上残ってるし。

『ええ……。全然分からない。なんかメジエド様とオレンジ色の髪の人がかっこいいんでくるんですけど』

「問題ない。基本的には無害だ」

『基本的について何!?!』

「……了解した。マスターから念話が飛んできた。『俺はここだ』と」

赤のランサーがそう告げた途端、テーブルにいた腕が動き出し、下に着地した。後ろで見えなかった手の甲には、赤い令呪が刻まれている。

「ウネウネ」

「……『よくぞ来た』」

「クネクネ」

「……『もてなすぞ、客人よ』」

「クルリンパツ」

「……『まずは名前を聞かせてくれ』」

『ちよつと待って貰っていいですか?』

「どうかしたか?」

『いや、ちよつと何言ってるかわからなくて……』

『ランサーはこの腕の言っていることが分かるんですか?』

「そうだが?」

「……」(親指立ててる)

『なんで分かるんですか?』

「念話で分かる」

「……アレ?」

『……ちなみにさっきのマスターさんのジェスチャーの様な動きは……』

「ああ、まったく関係はない」

「……!？」

「……マスターが『しばらくそっとしておいてくれ』と言って、小屋から出てこなくなってしまうた」

『今まで努力してたコミュニケーションが無駄だと切り捨てられれば、誰でもそうなると思います』

## 超エキサイティング・パーティー

メジエド様とちびノツブが帰ってから、しばらく。

(リヨぐだ子は虹色の粒で清めて消滅させた)

改めて、腕の話がカルナからの念話を通じて藤丸立香の耳に届いた。

「少なくとも、君を呼び出したのは紛れもなく俺だ。ちよつと話でも、と思つてね」

『はあ……』

「大それた理由なんかは無くて。本当にそれだけなんだ。カルデアのマスターなんだろう?」

『あれ……?俺はまだ自己紹介は言っていないですよ?』

「そうだな。……俺も同じような世界にいた事があつてね。かなりの時間をカルデアで過ごしていた事もある。今となつては遠い昔だが。これでも元々人間なんだぜ?」

『なんか、ランサーの口調と合わない……』

「気に障ったか?……『気にすんなランサー、しゃあない事だ。念話そのまま続けて喋ってくれ。……それで、その制服には覚えがある。忘れもしないカルデア制服だ。なつかしーねー!』」

『つまりは……先輩?』

「近からずも遠からず、だ。俺の世界にお前はいない。だが、先輩と慕ってくれる不思議な女の子がいただろう?」

『マシユの事……!』

「俺という存在はいわば、お前がこれから歩む旅路の先輩だ。一つの道の果て。結末を迎えた後の残骸に過ぎない」

『俺……腕になるんですか……?』

「あつ、ごめん。その道だけは辿らない。これマジでたまたま俺だけに降りかかったヤツ。保証する。確かにマスターの末路がコレって嫌だもんな!」

「『簡単に言えば、黒幕倒して大団円になった世界にいた、お前の代わりにマスターになった人間ってこと。俺にとって今の姿は、長過ぎる余生の様なものなのさ』」

『聞きたいことが！貴方の世界ではどんな事が……』

「『そろそろ、君の話を聞きたい。君の冒険譚の一部でいい。聞かせてくれないか？』」

『え、でも……』

「……『流石に、俺にばかり話をさせるのは不公平というものだ。魔術師は等価交換なのだから、それに見合う話を頼みたい』」

『……分かりました』

『えっと、なんかカルデア爆発したら燃える街の中心にいて、エツチな服になっていたマシユに萌えました』

「『そっかあ……。お前さんは駆け出しだったかあ……。ああ、マシユのそれには同意する。へそ出てるのいいよな。アレ』」

『分かりますか』

「『分かるとも!!ハイタッチしよう！俺たちは仲間だ!!』」

『はい!!!』

パアン、と二人は大きな音を鳴らした。

「『おい、そっちカル……。ランサーやぞー。おい!』」

『あ、すいません。さつきからランサーと話してるからうっかり』

「問題ない。むしろこれがノリ、というだと分かって感動している。

……む、『俺ともヤレエー!』だそうだ」

『もちろん!』

『まあ、始まったばかりなのは分かったよ。これから辛いこともあるだろうけど頑張って!』

『ありがとうございます。………ん?』

『どうした? 長居も悪いし、そろそろ……あつ』………ん?』

『……』

『……』

『……マスター、それにリツカ。急に静かになったが。何か気付いたのか』

『あの……えっと』

『世界に招いたのは貴方達なんですよね』

『『そうだな……』』

『帰り方って分かります?』

『……本当に申し訳ないと思ってる』……なるほど、帰り道について考えていたのか』

『……』

『……』

『どうすればいいんですかあー!!??』

『大丈夫だ。安心してくれ。よく分からんが、俺の身体は——  
まあ、腕だけなんだが——実は聖杯に接続されているみたいで  
な。俺が願えば楽に帰れる』

『なら、早速——!』

『まあ、待て。このまま帰って何になる? 話を少々ただけでお聞き  
か? それはどうだろうと思うぜ。手土産の二つや三つ、あってもいい

「だろう？」

『手土産？』

「『幸いにも、この場所には敵らしき敵もない。そんな場所に聖杯があるならば、カルデアに持ち帰ってお気に入り鯖に突っ込む……何か利用するのがカルデアのマスターというものだ』」

「『さあ、聖杯探索の準備をしよう。なあに、これからの予習の様なものさ』」

初めてののせーはいたんさく

いかにも「準備は出来たか!」と言わんばかりの片手の手話を使っている様な気がする腕に、藤丸立香は親指を立てて返事を返す。

今更だが、マスターと呼ばれる腕は目が見えるのだろうか。

だが、その直後。

「よし、なら行こうか!ランサーもついてきてくれるよな!」……無  
論だ」

と、ランサーが口を開いたので、腕は見る事が出来るのが分かった。

「青タイトのランサーのギンギラギンな目は見たか?あのいかにも俺より強い奴はいねえのか、的な好戦的な目をさあ。アイツには呼び出して悪いが、ここには血生臭い場所じゃなかった。だから、パスこそ繋がってはいるが、俺とは別行動で自由に彷徨ってる。後は、セイバーがもう一人のサーヴァントの監視をしてる感じかな」

『セイバー?』

「俺とこの世界で初めて会ったサーヴァント。間隔は狭いが、赤のランサーよりも古株と言える。次にアイツ、そんで青のランサーだ」

『アイツって?』

「真名を知ってたら、わざわざ濁したりしないさ。クラスすら教えてくれなかったヤツをなんて言えばいいか俺には分からん。セイバーが監視してるのも、その胡散臭さが妙に気になるかららしい。俺はどっちでもいいと言ったんだがなあ」

『その人と呼んだのも貴方なんですよね?』

「結構アバウトな感じで呼んじやったからなあ。……そんなことよ  
り、聖杯だ聖杯。チャチャッと見つけちまおう」

ホバー移動する腕が時々草むらに消えて見えないので、ランサーの後を歩いていく藤丸立香。

元々お喋りな性格の持ち主だったのか、腕は念話を通して喋り続け



るが途切れる気配がない。自分で会話を打ち切ったとしても、さらにそこから別の話題を切り出していくため、ただただ聞く身としては若干ながらグロッキーになっていた。

そんな彼が、不意に会話を止める。それに合わせた様にランサーが足を止め、ランサーの右手が光ったと思うと金色の槍が握られている。

藤丸立香もランサーの隣に立ち前方を見る。さりげなく、草むらで見えなかった腕を蹴ってしまい、『痛って!?!』とカルナが発した。

『あれは……!?!』

青のランサーといた時に出会った、光を失った腕が幾千もの軍勢となっていた。

『こんなにないたのか……!?!』

『それだけじゃない。コイツら全員が懐柔出来てないヤツらだな』  
『懐柔?』

『簡単に言えば、俺たちと関わりがないヤツらだ。この世界に来て初めて出来たことなんだが、他の腕のヤツらとコミュニケーションが取れた事があったな。そいつらに限っては、手の上の結晶から火の玉を出さずに近づいてじやれてくる』

『火の玉を出さずに……?』

『そいつらに会ったら遊んであげてくれ』

『……』

『青のランサーと一緒にいた時に遊びましたよ』

……嘘は言っていない。

「マスター、どうする。……」お前の全力を以って、一掃せよっ!」か。

……了解した」

『そう言えば、マスターさんに会う前、敵に遭遇した時にランサーさんの目からビームが出たんですけど……』

『インドとはそういうものだ（天下無双）』

その言葉を最後に、ランサーは空を飛んだ。足下から火を噴き、それがランサーを上空に留まらせる。

瞬間、再びランサーの右眼が光を発した。

「《梵<sup>ブラ</sup>天<sup>フ</sup>よ、地を覆え》ツ!!」

極太の光線が、地表を覆った。

本来、インド出身の英霊二人が戦うとアメリカの大部分が焼け野原になる程度の惨状は簡単に引き起こせるぐらい、インドの英霊というのはスケールが違う。

それほどの英霊に「本気」や「全力」なんて言葉を使うと遠慮なくぶっ放してしまうので。

注意が必要である。

マスター二人は、『あれ？これ巻き込まれるんじゃないやね？』と悟った。

『ぬわあああああ?!?!?』

「悪く思え。全力を尽くしたまでだからな。……む、マスターにリツカは避難していたのか。先程の場所に居なくて少々驚いたが……」

『おメエの所為だ馬鹿アアアアア!!』

## 星の紋章、文明壊化。

『ランサー。正座』……承知した」

ランサーが地面に座り、腕がその正面に立つ。

それでも身長の関係から腕が小さく、威厳も何もあつたものではないのだが、それでも説教という雰囲気な何となく通じた。

「……」ビシッ！

「ああ」

「……」ビシッ！

「そうか」

「……」ビシッ！

「すまない」

腕が何かを言い終わるたび、ランサーに指を指し直すのは分かるのだが、ランサーが通訳をしないので何を言っているか藤丸立香には全然分からない。

というか、完全にランサーの相槌以外無音で行われている事で、一人芝居なんじゃないかと思う。

しばらく待つ事数分。

終わったらしいランサーが口を開く。

『待たせたな。こつぴどく叱つといたから大丈夫だ。そんで、聖杯の場所なんだが、多分ここら辺をウロウロしても拉致があかん』

『じゃあ、どうするんですか？』

『行きたくはないが、如何にも、つて感じの建造物には心当たりがある。行ってみるか？』

そこは重厚な雰囲気醸し出し、それでいて何処か普遍的に感じる

建物であった。

『あれは……城?』

『そうだ。行きたくねえんだけどなあ、あそこ』

『何故です……?』

『なんか……雰囲気』

『雰囲気?』

『うーん、俺には王様気分は似合わないから、かな。……なんだろうな。この城を見ると……責任のような、そんな何かから逃げているような気がするんだ。ほら、王様って責任がつきまとうだろ?俺は背負える程、立派な人間じゃないからさ。英雄のようにには最後までなれなかった普通の人だったもんで、な』

『……』

『じゃあなんで、今こんな事になってんだ、って話にはなるけどな!』

『……一つ、いいですか?』

『なんだ?』

『この城、どう見ても夢の国のシンデレレ』『それ以上はダメだ』

『だって!?「あ、あの形なんか見た事ある」って思っちゃったんですもん!!』

『俺のいい感じの話を見無視してそんな事考えてたのかお前は!?!』

『もうそうとしか見れなくなってきた!!やばい、消されるかも知れない……!!』

『安心しろ!この城の全体像を映す時はモザイクがかかるはずだ!!あと、あれはきつと……そうだ、チェイテ城とでも名付ければ何とかなる!!』

『何回も出てきて恥ずかしくないんですか!?!』

『お前の頭の中でチェイテ城はどれだけ出て来てんだ!?!』

急な罵倒には、かのドラゴン娘をビツクリ。

一切関係のなさそう造型はともかく。

三人（内一人腕部のみ）は城に向かって進んで行った。

『なんていうか、本当に城だけなんです。街並みや道路さえも整備されてない。ただ草が生えるだけの地面になってる』

『当たり前だ。何よりここには人がいない。管理者すらいないのであればこれは当然と言える。だからこそ、仲が良くなれたヤツもいるがな』

『どういう事ですか？』

『セイバーさ。そういうのに妙な拘りがあるヤツでな。そういうのに縁がない世界の方がコミュニケーションが取れる時もある。ほら、よくあるだろ？「にわか乙!!」とか言って相手を遠ざけようとする奴とか』

『なるほど』

『まあ、セイバーはそこまで酷くはなかったが。……おつ、正門に着いたな』

正面には、よく見る縦と横に交差している大きい鉄の扉。

早速ランサーが軽く目を光らせたのと同時に、人型の何かが空から飛んできた。

『何……!?敵か!?!』

褐色肌の体には文様が刻まれており、ヴェールのようなもの被っている。

その女性は片手に持っていた三色の剣を構える事なく、真つ先に向かい腕の方に向かい。

「マスターー!」

といって、腕を思いつきり抱き上げた。

「マスター、何故ここに居る……!?退屈なのは分かるが、よりによって

何故ここに来たんだ……!？」

『待て。話すから……!頼むから地面に戻して……!か、枯れる……!』

「……!？す、すまない。マスター」

そう言つて、彼女は腕を地面に置いた。

何故か、しわっしわになつていた腕が徐々に元に戻つていく。

『なんでシワシワになるんですか……!？』

それについて、カルナが説明する。

「本来なら、腕以外は地面に入つてもおかしくないという考察が出来るが、本人曰く『色んな人から投げられる時は大体腕だけだった』らしい。つまり、腕だけなのにもかかわらず地面に接触していないと我がマスターがエネルギーが保てない身体になっているようだ」

例えば、「高さがタリマセーン」とか言う善神とか、ゲーマー御前とか、空中にわざわざ固定してくれる神殺し師匠とか。

『でも最初に会った時は、テーブルの上だったような……』

『細かい事は気にすんな!』

役者は揃った……？

褐色肌の露出が高めなセイバーは、腰に手を当てて口を開いた。

「マスター達の来た目的は分かった。……しかし、何故ここになる？」  
「聖杯が如何にもありそうな場所って、ここぐらいなんだよ。そんな事より、セイバーなんでこんな所に……」

「ランサー、うるさいぞ。二重になって聞きづらい。……新手的イタズラか？」

「気にするな。リツカに対しての通訳だ」

「……なら、私とマスターだけの会話の時はやめてくれ。……わざわざみんなが聞かなくていい事を言い直されるのは……少々気恥ずかしい」

「承知した。善処しよう」

「私はアイツの監視をしていたが、他にもないアイツがいるのがこの城の中だ。罠がある可能性もあるために中には入らず、外で見張っていた。……そうしたら、マスター達が向かうのが見えたから止めた」  
「なるほど、わかった。アイツここに居たのか。なら納得。……とりあえず、中に入ろうと思う。セイバーは監視を中断、俺たちについて来い。駆け出しマスター君はランサーの後ろに。ランサー、守れよ」  
……承知した」

「マスター……!?!話を聞いていたのか!?!」

『だからこそだ。聖杯が存在する可能性がある場所を正体不明のサーヴァントが偶然見つけたら、何が起こるか分からん。それに、罠が本当にあるとしたらそこには隠し通したい何かがあるという事。どっちみち怪しいなら、事が大きくなる前に潰すが吉だぜ?』

「……マスター」

『お前は心配し過ぎだ。俺の昔の彼女よりも過保護じゃんか』

「……っ!!ランサー……!」

「すまない」



『照れ隠しですね分かります』

「そのマスターもやめてくれ……！」

すすすつ、と腕が藤丸立香に近づく。

『駆け出し君』

『……？』

『真面目な話になるがよく聞け。今回の聖杯、なんの因果か分からんが既に聖杯は溜まつている。簡単に言えば、願いさえ通じてしまえばすぐにでも叶えられてしまう程に危険な状態になっている』

『……!?!』

『原因は分からない。ただ分かっているのは、今でも溜まり続けている事だ。……恐らく、聖杯に収まらない程に魔力が溢れている。現に、サーヴァントや君を喚び出した時に使用した魔力は既に補填されている』

『それって……つまり？』

『こちらとしても、お前に確保してもらった方が格段に良い、って事さ。頼んだぜ？カルデアのマスターさんよ』

城の中は薄暗かったが、ランサーがランタン程度の火を灯しながら進むおかげで比較的安全に進む事が出来た。

『なんか……変な置物が多いですね』

『置き時計みたいなモニュメントばかりだな。色んな像をくっ付けた鎖がモニュメントを縛ってやがる。……でも、なんか見た事あるんだけどなあ……なんだったか？』

「まるで倉庫のようだな……だが、通り道にまで所狭しと置いているのは流石に気味が悪い……」

「随分と空間を有効利用したいようだな。正門は無駄だと感じているのだろう……『いや、それ出入り出来なくね？』」

『まるで、たくさんあるのが当たり前のように……』

『何にせよ、上を目指そう。ホラーはイマイチ苦手だから早く行こう』

『……よく考えたら、腕だけつてのもホラーでは……』

『そこ！五月蠅いぞ！』

いくつかの螺旋階段を登り、玉座の間に出る。

唯一、玉座の間だけは照明が点いていた。

それは明らかに誰かがいるという事。

そして。

「ああ、お久しぶりですね。皆さん。君は……はじめまして。ようこそ、大してお持て成しも出来ませんが、ゆっくりして行って下さい」

『丁寧な胡散臭さは相変わらずだなあ。底が見えねえとおちおち休む事も出来ねえんだが』

『……赤のランサー、随分と雰囲気が変わりましたね……？』

『マスターの念話を聞かない者がいるからな。俺が通訳している』

『聞かないんじゃないか？』

『そうですか。中々面倒な事をしてますね、ランサー』

「それで、私は懺悔でもお聞きすればいいでしょうか？我がマスター」  
『神父にでもなったつもりかよ？不完全な召喚で喚び出された分際だよお』

『いくら凄んでも、マスターさんに迫力がなさ過ぎる』

「……我がマスターながら、私もそう思う」  
「それもまた一つの長所だろう」  
『おいソコオ!!』言はずつ余計だぞツ!!』

## 聖杯は誰の手にあるか

「……つまりは、どういう事ですか？」

「『お前みたいな素性も願っても分からねえヤツの手に渡る前に、さっさと聖杯を回収してもらうんだよ』」

「それはそれは、大変そうですね」

「『お前みたいな奴がいるせいだな!!』」

白髪の丁寧な言葉を使うサーヴァントと、マスターである腕との間に火花が飛んでいる。

サーヴァントの方も物腰の柔らかい態度ではいるが、それがさらに表面でしかそのサーヴァントを見ることのできないような感覚。

藤丸立香は先程の腕が言った「底の見えない」という言葉を体で理解した。

二人に聞こえないように、後ろのセイバーに話しかける。

『なぜ、あんな気さくに話しかけるマスターさんが、あのサーヴァントに対してここまで嫌うんですか……？ なんか嫌な感じがするのは分かりますが、ここまで分かりやすくするって事は何か因縁でも……』

「……そうだ。奴とは邂逅した時に因縁が出来たらしい」

『らしいって……？』

「私は奴が召喚された時、たまたま離れていた。……色々あってな。その時にランサーを挟んでイザコザが起きたらしい」

『一体どんな……？』

「本人曰く、海よりも高く山よりも深い因縁らしい」

『いやそれめっちゃ浅いじゃないですか。マイナスに振り切れてるまでありませうよ』

「なんでも、奴の話が全然聞けなかった事に対しての八つ当たりとランサーは言っていた」

『うつわ、めんどくさいなあマスターさんって』

話さないとあそこまで根に持つタイプなのか、と藤丸立香は若干引いた。

「……ならば、一つ願いを叶えてみてはどうでしょうか」

『「あん？」』

「なぜそんなに喧嘩腰にされるのかは理解には苦しみますが。確か、願いというのは聖杯に直接アクセスする事で願いが叶えられると貴方から聞きました」

『「お前の意見は聞いてないんだが？」』

「それなら聖杯とのラインを感じることも出来ると浅慮しますが。どうでしょうか？」

『「ウルセエジャガーマンぶつけんぞ」』

『「マスターさん!?!ここはダメでもやってみた方が……」』

『「まあ、分かってはいるが……」』

しばらく考え込むような仕草を見せた後、腕はサーヴァントに告げる。

『「本当に、お前は聖杯を持ってないんだな？」』

「ええ。私は持っていません」

『「じゃあねえ。……願いを考える、待ってろ」』

「俺は持ってないですが、ね」

「!?!」

ランサーが気づき、セイバーがそれよりもさらに速く動いた。

が。

「《令呪を二画もって命ずる。セイバー、ランサー。動くな》」

「ぐがあっ!?!」

「……………くっ、『神明裁決』のスキルか……………!?!」

『えっ……………何が起きて……………!?!』

藤丸立香は理解が追いつかない。

何故、みんなが動けない？

あの人は一体何をした？

それに、今しがた抜いた日本刀で何をする気なのか——!?!

「疑問には思っていました。何故、マスターの願いのみが叶えられるのか。それも、一握りにも満たない小さな願いばかりを」

『……………そうだ！マスターさんっ！令呪を使えば……………!?!』

「『ごめん、無理。クラスすら分からないんじやあ命令しようもない。やばいね、もうちよつと敵として見ておくべきだったみたいだ。……………駆け出し君は来るなよ』」

「答えは明白でしょう。貴方の身体の中に聖杯が入っている。いつ取り込んだのかは知りませんが」

「『戦うしかないかねえ……………!?!』」

掌が上を向く。小さな光が灯り、やがて優しく大きくなっていく。

そして、暖かな光が形成していったのは。

「俺が、使わせてもらうぞ。マスター」

杯の形となった結晶が、マスターである腕の上に浮かんでいた。

『『ええええええええええ??  
!!?!?!?』』

『いや、なんでアンタも驚いてんだ?!』

『『いや、その、え、えええ?! ナンデエ?! ……まじい?! ……うつそおんな  
ニコレエ』』

『変なことを喋るないで! さつきからランサーが超真面目に通訳してくれてるからあ!!』

『…ちよつと、待ってくれ…! 流石にこれは、シユールというヤツが…!!』

『…? 分かりやすいに越したことはないはずだが』

「…自分で言うのもなんですが、裏切った人間の前で茶番を始めないでくれませんか?」

朽ちるからこそ、輝く

『ダメだ……。足がすくんで動けない……。！』

『耐えろ駆け出しマスター！お前のこれから行く道、こんなのは序の口だ！』

恐怖に染まった藤丸立香を、腕の言葉を通してランサーが叱咤する。

恐怖の原因は、凄味を発する目の前のサーヴァントの所為に他ならない。

『貴様の願いはなんなんだ、この野郎！』

「知れたこと……。！」

「詳しくは外典を見ることだ……。！」

『ダイレクトマーケティングだと……。！?くつ、ここは財布と相談を……。！』

『買ってる場合かーっ!!』

「せいー!」

黒鍵を複数投げ、隙を作るように動くサーヴァントに対して、腕はホバー移動で回避する。

しかし、一向に腕が反撃をする気配はない。

『なんで反撃しないんですか!?やられちゃいますよ!?』

『聖杯持つてるのに気付かなかった俺も馬鹿らしいが、そもそも気付かなかったのは聖杯を宿したこの身で戦闘をした覚えがないからだ。それで今分かった。……。攻撃のリソースを割いて聖杯を取り込んでるもんだから、あの火の玉も出せねえんだよ!クソツタレ!』



黒鍵を受け流すように弾いたところで、黒鍵に仕込まれた術式が発動した。

もう一度、対象に向きを修正し発射された一本の黒鍵が腕の下部を貫く。

ほんの数瞬の間のみ、足を取られたかのように動けなくなる。

「これで……!」

日本刀を抜いたサーヴァントが一瞬で近づき。

腕の手首から上を横薙ぎで切り飛ばした。

「終わりだ」

黒い掌が。重力に従うようにポトリと落ちた。

「……マスターア!!」

セイバーが叫んだ。

先程の静かな性格とは程遠い、喉を潰すような声だった。

「聖杯は私がいただきます。亡骸はその後で好きに……!?!」

目の前のサーヴァントが言い終わらないうちに、黒い掌に収まっていた聖杯が輝きを増した。

——それは、命の咆哮。

本来は金属として光を反射するだけで本体自身が輝くはずのない聖杯は、結晶という形で取り入れられた事によって暖かな光が放出され全員を照らす。

——聖杯は七色の光に包まれていた。

その時、初めて藤丸立香は。

彼の本来の声を聞いた。

『令呪をもって命ずる。《セイバー、今すぐに撤退せよ》。重ねて命ずる。《ランサー、立香を連れて逃げろ》』

「……承知した」

「マスター!? 待て私は……!!」

言い終わらないうちに、セイバーが消滅した。

おそらく転移したのだろうと、藤丸立香は呆然と考える。

そんな事よりも、藤丸立香の中では今の彼の声が反芻して聴こえていた。

「くっ……! 貴方、まだ生きて……!」

『ごちとら痛覚なんてもんはハナから無くてな。いつもと同じような世界から離れるような感覚が来るだけさ。……だが、ただでは死んでやらねえ。……いつだってそうさ。ただただ殺されるなんてつまらねえもんさ』

ランサーに服を掴まれ、そのまま飛び出して行く。

彼が、小さくなっていった。

『これは大きな博打さ。これからどうなるかなんて誰にも分からない』

城の窓から、ランサーと共に外へ抜け出す。

城からの光が外に漏れ、灯台のように辺りを明るく染めていた。

『聖杯よ。消えゆく炬火が最期に願う——!』

『光を。世界に灯せ』

その時、世界が変わった。

空が青い。雲は爽やかな風と共に優雅に流れている。

山の緑は青々と繁っている。鮮やかな小鳥が飛んでいたのを見た。

彼やランサーと会った時にいた草原にも鮮やかな色に変わり、以前の鈍い雰囲気は何処かへ行ってしまった。

『これは一体……？』

「マスターの願いによるものだろう。だが、なんとなくではあるがマスターの言っていた事と合致する」

『言っていた事？』

「かつての話だが、この世界に光がない、とマスターが言っていた事がある。マスター自身も弱体化していた……という話ではあったが、成る程。この世界は本来の機能を取り戻したように思える」

「リツカ、気を付けるがいい。……黎明の腕。その本来の力を取り戻した奴らが動き出すぞ」

役者は揃ったツ!!

「おらよおー!」

朱槍の抉るような突きによって、人と変わらない大きさとなった腕の一つが沈んだ。

他の一集団による火炎の砲撃を谷間を駆ける風のようにすり抜け、集団の中央に踏み込むや否や槍を力任せに振り回して黎明の腕を薙ぎ払った。

「逃がさねえよ!」

槍を地面に突き刺し、棒高跳びのように空へ舞い上がり。

「そおらあ!!」

青のランサーは朱い槍を離れにいた一つの黎明の腕に向けて投擲。風穴を空けて沈黙させた。

「よっと」

槍を呼び戻し、肩に掛ける。

その目は完全に獣と同じ目をしていた。

「景色がガラリと変わっちゃまったのには驚いたが、楽しくなってきた。……しかし、マスターとのパスが消えちゃったな」

「場合によっちゃ、あいつらと合流するのも悪くはねえな」

そう結論づけると、青のランサーは次を獲物を探しに森を後にした。

「セイバー、いるか」

赤のランサーと共に藤丸立香は、拠点として機能していたらしい木造のあばら家に戻ってきていた。

上空でランサーに抱えられていた時に見た、下の様子。

明らかに凶体も大きくなり、茶色や橙色に見えた複数の筋は黄色を含んで輝いていた。

マスターだった彼も鮮やかな黄色の光が漏れていたが、光量が圧倒的に違う。

というか、大きくなりすぎである。

『あの人が小さ過ぎなのかな。頑張っても俺の脛ぐらいしか体長が無かったし』

「いや、アレが聖杯を使う前の全盛期の姿なのかもしれない。そうすれば、あの大きさも納得がいくだろう」

『でも、その時から他の腕よりも小さくなかったじゃないですか？』

「……」

『……』

「敵と比較出来る要素があるのは、一つの利点だろうか」

『あの人がそれを聞いたら、涙を流して喜びますよ』

きつと、その涙は嬉しいというか感情から来るものではないだろう。

『セイバーがいない件』

「出来ることならば、助力を頼みたかったが……。仕方あるまい」

そう言つて、ランサーは槍を発現させて外に出ようとし、すかさず藤丸立香が止めた。

『え、助力つて……。！何をやる気ですか!?!』

「奴……。ルーラーの元へ行き、願いを阻止する」

『えっ、ルーラーつて……。！そもそも、なんでっ!?!』

「マスターがそう願ったからだ。マスターがさせたくないと思うならば、俺はそれに応えるのみだ。そもそも、俺はルーラーとは面識がある。クラスを知っているのは当たり前だろう」

『……。なんで言わなかったんです?』

「……。問われなかったからだが?」

『一言、少ないって言われた事ありません?』

「むっ。……言われたのはお前で二人目だ」

『とにかく、セイバーを待とう。何があるか分からないのにランサーを死なせたくない』

「呼んだか」

『えっ、セイバー!?!』

『……と? 誰、ですか……?』

「……コイツの事か?」

セイバーが肩を貸して立っている人物に、藤丸立香は目が離せないでいた。

外見は至って普通の好青年である。

右腕が黒く、それでいて金色に光る線が、縦に伸びたり模様を描いている事。そして。

全裸である事を除いて。

「……待たせたな」

『誰だあ——!?!』

## 過去の栄光を切り札に

『お前は誰なんだ、って顔してるもんで自己紹介させてもらおうがよお！俺の名前は『その前に服を着ろよ！せつかくタイトルとか挟んで話を区切って貰ったのになんで裸のままなんだよ！』……うるさい！なりたくてこんな姿になってるんとちゃうわあ！』

全裸の男といがみ合う藤丸立香。

それを静観するランサーと、完全に真顔でやや下を見るセイバー。

セイバーから、生唾を飲み込む音がした。

「……これが、神秘か」

『すまん、口喧嘩は後だ。早く服を貸してくれ。このままじゃ大事な何かを失いそうだ』

『あ、ランサー。ここに服ってないんですね』

「そうだな。そんなものはない」

『キサマアアアアアア!!!』

結局何も無かったので、藤丸立香に似た青年がそこらの植物の葉を束ねたパンツを即席で作り上げ穿いていた。

『これが本当のぶリーフって奴だな！』とかいう戯言もついでにのたまっていたが、全員がスルーした。

『……とりあえず経緯な。気付いたら埋まっていた。ついでに全裸だな。そこに誰かと勘違いしただろうセイバーに引っ張られて抜ける事が出来たんだ』

「……右手だけは地面から出ていたから、てつきりマスターが戻って来たと思っただ。それがこんな奴とは……」

『こんな奴って何だよ。……そもそも、右手がこんな黒い事すら人間としてあり得ねえだろ』

『そもそも、貴方は誰なんですか？』

『俺は藤丸立香。カルデア所属、人類最後のマスターって奴だが？』  
『…………え？』

『…………あつ、お前も同じ名前か？オーケー、どういふことかは納得してるから問題ない。…………そうだな。なら、サルとでも呼べ。昔から友人に呼ばせてるアダ名だ』

「…………何!?サルだと!？」

「…………これも因果か…………？」

その言葉に反応したのは、腕のサーヴァントだった二人。

『えっ…………二人とも、どうしたんですか？』

「俺から説明しよう。リツカ。…………俺たちがマスターと呼んでいた黎明の腕という存在。彼には名前が存在する。彼曰く、自分は『藤丸立香』と呼ばれるあらゆる可能性の一人である、と」

『可能性…………？』

「いつか、俺とセイバーに話してくれた事。それは『藤丸立香』という名の存在は複数いる、という事だ。当初は世界線の話かと訝しんだが、アカウントだのなんだのとよく分からない話に繋がってな。最終的に、『星5が出ないのおおお!!』と発狂していたが」

『本当に何言ってるか分からん』

「その上で、同じ名前のマスターに出会う事があるかもしれないと、彼はもう一つの名前を教えてくれた。それが、『サル』という名前だ」  
『サルってのは、あくまでアダ名だ。本当はもうちよつと長いんだが…………。なんでお前らがそれを知ってる…………それに、アカウントや星5って…………おいおい』

右手が黎明の腕となつている藤丸立香、サルと呼ばれた青年は少し頭を抱えた後、合点がいったのか大きくため息を吐いた。

『もしかしてさあ…………元々俺って、腕だけだったりする？』

『おそらく…………同一人物なら、そういう事になりますね』

少なくとも、セイバーが以前の腕を引っこ抜いていた時は『サル』の



ような『人間』の部位は存在していなかった。

『なら、納得。多分、俺は過去の状態で複製された存在だ』

『どういう事だ』

ランサーが珍しく聞き返していた。

『多分、本来の記憶も俺にはあるが、今は優先度が遠い場所に保管されていて一切記憶を使えない。……ははっ、そりゃ無茶な複製体なら当然だ。蛇足どころか、腕以外のパーツがくっついて来たんだから』

『……??』

『あー、簡単に説明するとな？よく分からん事ではあるが、俺は腕だけで行動が成り立っていたんだろう？例えば、それこそ腕だけで記憶とか移動とか出来ていたわけだ。だが、そこに新たに脳みそだったり足がくっついたらなら、腕自体にその働きは必要ない』

「……そういう事か！」

セイバーが思わず叫んだ。

『今使われているのは腕に蓄えられた記憶のある場所ではなく、あくまで複製したと同時に刻まれた記憶を保持している頭部の脳だ。だから、お前達の事は忘れたワケじゃない。この右腕のどこかの部位が覚えているはずだ』

「つまり、今右腕を切り落とせば問題ないんだな？」

『違う、そうじゃない。……てか、落ち着けセイバーそんなものを俺に向けるな！』

『でも、何故そんな事を……?』

『決まってるだろ。魔術師としての俺のチカラが必要だと感じたからだろ。でなけりゃ、わざわざ自分に過去の身体を生やすなんて事はない』

『えーつと？腕の名前は藤丸立香で、でも俺も藤丸立香で、まだまだた  
くさん藤丸立香はいて、だからサルって名乗ってて、ついでに元魔術  
師で……うくん』

『あ、ダメだこりゃ。混乱してるな』

「マスター」

『どうした、ランサー。てか、今マスターって言うのやめてくれね？令  
呪もねえし』

「ルーラーがお前を殺し、聖杯を奪った。すんでのところでマスター  
はこの世界を変える程の願いを使った後、息絶えてここに生き返っ  
た。……それが分かった今。この後、お前はどうするつもりだ？」

『ルーラー……聖女か？』

「違う」

『じゃあ島原の神の子か。なら、聖杯を渡すわけにはいかないな。奴  
の救済はこの世界に留まらん。ただでさえよく分からんこの場所が  
マジの特異点になるぞ』

「承知した。ならば、俺もそれに従おう」

『……俺を疑わねえのか？ランサー』

「お前がマスターだったという事は分かっている。ならば従うまで  
だ」

『……そっか』

世界が晴れて、初めての夜が来た。

星空は見えない。

明日の明朝にルーラーの元に突撃する事を全員で決め、今は各々休  
息を取っていた。

藤丸立香は寝る前に、木で出来たベンチに横たわっていたサルに近  
づいた。

『サル……』

『せめて「さん」を付けろ。一応これでも先輩だぜ？』

『おサルさん……』

『おいやめろ。そこから来たアダ名じゃねえ！』

『ちよつと……話が……』

『……チャチャつと済むか？』

『……』

『表に出よう。二人つきりの方が話しやすい事もあるぜ？』

今までのこと。これからのこと。

二人は草原の中にある、地面に何も生えていない場所に来た。

以前、赤のランサーが目から放った光線で辺り一帯を焼け野原にした場所である。

炭や灰は風が持って行ったのか。

今では開けたちようどいい空間となっていた。

『さっ、何を聞きたい?』

そこであぐらを組み、足首に手を置いて彼は言った。

『あなたは……何者なんですか?』

『言ったでしょ、さつき。君と同じ、人類最後のマスターって奴だ』

『そうじゃなくて。……先輩なら、俺がこれから辿る道も知ってるんですよね』

『まあ……そうだね』

『駆け出しマスター、って俺を呼んだあなたなら、これからどんな結末を迎えるのか、分かっているんですよ?』

『……君は何処まで行ったんだ?』

『……最初の場所。特異点Fと呼ばれた、冬木ってところですよ』

『そうか。所長は元気か? ロマンは? えつと……カルデアの召喚サーヴァント第三号は確かカルデアに戻ってから合流だったから除外かな』

『……二人とも元気です。そのカルデアの……なんたらサーヴァントは知りませんが』

『そうか……よかった。別の世界とはいえ、友の無事を聞けるというのは素晴らしい事だ。最も、裏切った形になって悲しませたのは他でもない俺なんだが』

『……えっ?』

『俺が人間じゃなくなっていた時点で気付いけ。どう考えても、自ら進んであの姿になる訳がないだろう』

『それは……確かに……』

『仕方ねえ。ほんの少しだけ、昔話をしよう』

危機が起きた。

人類滅亡カウントダウン。なんてちやちなモンじゃない。

むしろ、滅びた後の話さ。

『滅びた……?』

『話は黙って聞け』

だが、そのためのレイシフトなんていうタイムマシンさ。まあ、原理は色々違うが、馬鹿にはこれで説明がつく。

マシユも巻き込まれたあの爆発により、使えるマスターは藤丸立香と呼ばれる存在ただ一人となった。

だが、そこで想定外の事態が起きた。

本来、そこで死ぬはずだった人間を彼は命を賭して守った。

『死ぬはずだった人間?』

『気の迷いさ。ゲームでもよくあるだろ。ムービー中にアツサリ死んでしまうキャラクターとか。あの人はそんな感じに死ぬはずだったはずなのに、たまたま死ぬと知ってた馬鹿が助けちゃったのさ』

昔、聞いた事があった。

誰かが死ぬ運命を変えた時、代わりに他の誰かが死ぬ事になる。そうしないと釣り合いが取れない。とか、なんとか。

そんな事が実際に起きる事も知らず、俺たちは能天気になんと冒険の旅に出てはハッピーエンドを迎えた。

正に順風満帆だったろうよ。

それで最後の決戦。

黒幕と戦う時。

俺は知っていたんだ。黒幕の倒し方すらも。

それは仲間の犠牲を払う事で起こる、最後の切り札である事も。だから、思っただらうな。

代わりに犠牲になれば、そいつも救われるんじゃないかって。

『どういう事ですか？』

『俺には元々、封印指定も真つ青なチート魔術があつてな。魔術ですらないのかも知れないが、とにかく、そいつの代わりになる事が出来たんだ。すげえだろ』

今思えば、俺の命は軽いものだとは達観していた。

今までがそういう生き方だったから、間違いとも思つてなかった。

消える直前。

それを見たよ。

泣かれた。……それはもう、思いつきり。なぜ貴方なの、って叫んでくれた。

怒られた。……それはもう、思いつきり。なぜ君なんだ、って大声を出された。

ごめん、としか返せなかった。

だから、生きたいと願った。  
いくら死んでも、生き返ってみせると。

『それが今や？ヘンテコな腕だけになって？こんな所に居るわけですが？……我ながらひでえ人間だねえ！はっはっは！』

『聖杯を使つて、会いに行きたいとは考えないんですか？』

『……それはない。裏切った時点で俺はあそこにいらねえ。それに、もう目的がない。俺の物語は既に終わってるのさ』

『マスターさん』

『……俺がサーヴァントにでもなれば話は別だがな！残念だが、奇跡でも起こらないと無理だね！所詮、俺はただのマスターさ！』

『俺も、あなたのようになるんでしょうか』

『いや、それは知らん。俺はむしろ、本来の道を踏み外した側だ。だが、俺の話を聞いて、どう思った？』

『貴方の進んだ道は嫌だ、と思いました』

『……そうか。それでいい。……答えなんてない。自分が納得すりゃ、それが答えだ』

『フウ……俺の答えで満足してくれたかねえ。ま、アイツ自身の事はアイツがやるべきだし、途中で諦めない事を後は祈るだけだな』

『……ん？そーういやあ、泣いてくれたヤツつて……。アイツだけか。他のみんなは齒を食いしばって耐えてたのに……。今更ながら、相変

わらずカッコ悪かったよなあ』

『止まるんじやねえぞ、なんてな』

『あー、寒っ!!とにかく着るもの欲しいよなあ……』

へっぎしっ。



グラウンド・アナザー・オーダー、開始

『ランサー、えっと……いつから屋根の上に?』

『夜の間、見張っていたが』

『セイバー……なぜ今入り口から入って来た?』

『……偵察をしていた。情報は多くしておくべきだ』

『おいガキ……なんで目にクマが付いてんだ』

『不安で……魔術のコードがちゃんと起動できるか確認してたら朝日が……』

『まともなのは俺だけか!』

『俺、間違つてないよな!?ちゃんと昨日みんな休もうぜって提案したよねえ!?なんで誰も寝てないん!?俺ちゃんと寝たぜ!』

『不安だった……』

『なんか俺だけサボったみたいになつてんじやあん!それが一番気に食わねえわ!……ちくしょう!さっさと出るぞ!』

『「おー」』

『元気を出せよお、せめてえー!!』

予め、話しあって決めた作戦はこうだ。

まず、別働隊のサルと正面突破隊のその他三人に分かれる。これは、敵のルーラーから決死の覚悟で腕の時に残したアドバンテージを利用するためだ。

ルーラーには、彼が聖杯で転生した事は把握出来ていない。そこを突く作戦。

『聖杯に履歴があるわけないし、魔力の残量を確認しなければそもそも

も使われたかどうか分からない。だが、それ以前に俺は世界を変えられるほどの魔力を消費している。同じタイミングに規模の小さいものが紛れ込めば、それは自然と目が行かなくなるものだ』  
それに、とサルは続ける。

『別に俺がいる事自体はバレてもいい。俺はルーラーにとっては十分未知の存在であるし、ランサーが話した通りならルーラーの特性はサーヴァントじゃない俺には当てはまらない。俺に気をかけてくれるなら正面突破隊も動きやすくなる。実際に対峙するのは俺の可能性もあるし、お前達の可能性もある。覚悟しておいてくれ』

そして、最大の懸念事項を最後に述べた。

『俺たちの最大の問題。それは、ルーラーの願いが叶えられるほどの魔力が聖杯にあとどれほどで溜まるのか。前も言った通り、この聖杯はどういうわけか魔力が溜まり続けるという謎仕様だ。サーヴァントの召喚とはわけが違うレベルの願いは叶えて時間稼ぎはしたが、それでも一日かかるかどうかだ』

全員で駆ける。藤丸立香も必死に付いていく。

サルは城周辺から裏手に回り込むため、一丸となって進んでいく。

『来たぞー！』

『……っ！』

目の前に現れたのは無数の腕。

曰く、黎明の神腕と呼ばれるもの。

各々の手のひらが空に向けられて開き、手のすぐ上に結晶を発現させた。

刹那、あらゆる方向から火炎弾が放出される。

『ランサーー！』

「分かっている……！」

槍や自分の身を挺してランサーが火の玉を弾く。

ランサーには、生まれつきの黄金の鎧を持っている。不死身に近い性質を持つそれは、黎明の神腕とは言えたかが矮小な火の玉では傷一つつかない。

この程度でやられてしまうなら、日輪の英霊としての名が廃る。  
「生憎、それ以上の太陽の輝きを俺は知っている。悪く思え」

「セイバーー！」

「了解した……！」

セイバーの剣は、赤、青、緑と三条の輝きを持つ剣でありながら変幻自在であり、剣としてはもちろんの事ながら鞭としても使用することが出来る。

この程度を切り裂けずして、何がセイバーのサーヴァントか。

前衛にセイバー、後衛にランサーを置いた行軍は瞬く間に腕を蹂躪していく。

『油断するな、セイバー！耐久こそ低いけど、攻撃に当たればサーヴァントでも中々キツイぞ！』

『回避優先で！この程度で支障が出るほどの怪我をしたら多分、城に入った時に対応出来なくなるよ！』

「分かっている……！……！……！リツカ、お前もマスターらしくなって来たな。面白い。成長が楽しみだと言う人間の言うことが分かるな」

『ありがとう！』

「下がれ、セイバー。真の英雄は眼で殺す！」

ランサーの目からビーム。

今回は一掃のために薙ぎ払う様に放たれ、辺りが植物だらけなのもあって火の海と化した。

『ランサー！加減ツ!!』

『この後、みんな通るんですからね!?!』

「すまない。……以前とは勝手が違う様だ」

『俺とのパスがない上に、聖杯の魔力を供給してたからな……。魔力の節約は第一に考えてくれ。こちらでは調整は出来ないからな』

「承知した」

「リツカ。私達のパスの調子はどうだ」

『疲労感はないか？無理はするなよ』

『無理するなって言うなら一人はサルさんが背負って下さいよ！』  
『それは無理。俺の魔力はそこまで多くねえの。ゴメンね』  
「マスター。新手の腕だ」

『突っ込むぞお！』

『応ッ！』

「……動きましたか。それでは皆さん。迎撃をお願いしますね」  
「……」

「ふん。下らんが、たまには我自ら出てやるのも一興よ」

「よかろう。……たまには勇士を見つけねばな。退屈も過ぎる」

「……」

「おや？アーチャー。何処へ？」

「あなたには関係ない事です」

「……」

「カルナ……！」

## 神と袂を別つ、天の楔と呼ばれた男

かつて見たもの。

金髪の偉そうな男と俺が、ソイツらしくもなく2人で話してる風景。

『まあたダメだったよ。……ゴメンな。ここの召喚システムはランダム過ぎて笑えん』

「何、また例の石とやらを掻き集めればいいだろう。それとも貴様、あの言葉が偽りであったとでもこの我に言うつもりか？」

『いんや、それはねえ。嘘にしたくねえに決まってるだろ』

「はんっ、尽く縁のない男よな。貴様の一生の運は犬にでも食わせたのではないか？」

「冗談キツイぜ、おい……。まあ確かに、アーチャーが来てくれた所為で俺の運が消し飛んだのかも知れんけど』

「当然だ！本来なら、我を召喚したとて泣いて喜ぶほどの奇跡よ。その上で我が友を呼ぼうとおもいあがるのだから始末が悪い」

『あーあ。早く来てくれねえかな……。歓迎の準備だけ出来てるってのもおかしい話だからなあ……。』

『アーチャーに俺が名付けた鎖を預けて、願掛けまでしたつてのに』

誰との記憶かは、思い出せない。

『基本は魔力節約のために物理で殴れ！……オラア!!リツカ、お前はただ走れ！お前の魔術で下らん魔力消費をするぐらいならセイバーとランサーに送れ！』

『……分かってる！』

『……ふんっ。お前は弱いが、無力じゃねえ。それでいい。……よつと!!少なくともふたりは今のお前のサーヴァントなのだから、そいつ

らを信じるのがマスターの一番の仕事だと理解出来ているな』

『リツカ！マスター……上だ！』

セイバーが声を上げると共に、ランサーが己の身を盾とする為に飛翔する。

城の上空、その一帯が黄金に輝く。

『あれは……』

『……金色の……波紋か？』

上空に現れた波紋から一瞬。

光が反射する。

それが幾多の波紋から、幾度となく見えた。

その輝きは、掃射を意味する。

『ランサーアアアアア!!炎で焼き尽くせえ!!』

「了解した！おおお!!」

ランサーは魔力放出のスキルを保持し、さらに炎に変換する事が出来る。

太陽神の子であるランサーの炎はありとあらゆるものを焼き尽くす。まさに日輪の煌めきを体現した火力となる——！

『うわぁ——！』

藤丸立香やサルは炎熱の壁によって、腕で顔を覆う事しか出来ない。

飛んでくる熱風が全身を襲い、全身から汗が噴き出しているのが分かる。

ただ、耐える事しか出来ない。

やがて、ランサーが炎の放出を止める。炎で身を守ったのは数秒の間だけであったのだが、藤丸立香にはそれより長い時間を熱風にさらされたと感じた。

不意に、身体のエネルギーが吸い取られる感覚が押し寄せた。  
力が抜けたように足が動かなくなる。

「……リツカ。無理をするな」

『……うう』

藤丸立花はランサーに魔力を供給した。

結果的にはランサーが今消費した魔力の半分も補えてはいない。  
さらには、マスターとして契約した藤丸立香の方が魔力不足で動けなくなってしまう。

「これは……宝具なのか？……くっ、こんな出鱈目なサーヴァントが敵にいるのか」

「セイバー。リツカが回復次第、動くぞ」

「分かった。マスターもそのつもりで……」

「……マスター？」

「……行ったか。セイバー、お前は俺達と共に役割を果たせ」

「……まさか、行ったのか……!? 一人で……!」

「来たか。愚かしくも手に余るものを望む薄汚い雑種如きが」

『……あの絨毯爆撃を仕向けたのはテメエか。随分な挨拶してくれりんじゃねえかよ』

「ふん。身の程を弁えん輩には、この我を拝謁する事すら万死に値する愚行よ。疾く死ぬがいい」

そう言い、黄金の鎧を身につけているサーヴァントは背後に波紋を2門浮かび上がらせ、宝剣を二本発射させた。

『いつちも、それは出来るぜ』

サルの左右から波紋が浮かぶ。

飛び出るように波紋から発射された二本の鎖は、二振りの宝剣を瞬く間に弾いた。

「何？」

目の前のサーヴァントが顔を顰める。

当たり前だ。似たような事をされて反応を示さない奴はいない。

『どうよ。なんでかは覚えてねえけどよ。この鎖は誰かから貰った事はなんとなく覚えてんのよ。……俺の持つてるチカラをパクってんじやあねえよ、このウストラトンカチ！』

このサーヴァントは傍若無人という言葉が似合うほど、先程のほざいた台詞は理不尽極まりないものだった。

もしかすると、先の鎖を見た事で激怒する事かもしれない。

そう思ったサルだったが。

敵サーヴァントの様子がおかしい事に気付いた。

些細な変化だとは思うが。

まるで、誰かがいなくなったかのような。

虚しい表情をしている気がした。

「貴様……名はなんだ？」

『……藤丸立香だ』

「……」

「もう一度聞く。貴様の名はなんだ？」

『ああ？』

なんだ？コイツは？

何を聞こうとしてる？



少し考えて。答えを変えた。

『俺の同姓同名は沢山いるらしいからな。サル……とでも名付けてつからよお、それで区別はつくかよ、金ピカ野郎』

「……そうか」

『……あーもう!!なんなんだよ、テメエはさつきからあ!言いてえ事があるならハッキリ言え!』

「ふん、興に乗った。少し遊んでやろう。この我手ずから引導を渡してやる」

「ん?インド王?え?ドユコト?……そんなもん貰っても困るだけだわ!バーカ!」

## 施しと対を成す、授かりの英雄

「マスター？ここにいたのですか？」

『なんだよ？俺がカルデアにいるのが不服か？』

「いえ、そのような大きな話ではなく。何故、私の部屋へ？」

『……ダメ？』

「構いませんが。何か用事でも？」

『ない』

「……そうですか」

『……』

「……」

『あのさ』

「はい」

『まだ……気にしてるか？俺に対して本気で殺しに来た事』

「……っ」

『うーん。あれは謝っただろう？お前が嫌うところまで踏み入った俺が悪い』

「……違います、あれは……！」

『違わないだろ。あれはお前の本心だった。だからこそ、俺はお前に対してふざけた気持ちで話すつもりはない。……まあ聞け。俺はさあ、断ち切りたいんだよ。こんな二人で謝りあって距離を作る関係をさ。どうせなら、笑いあってた方が気分もいい』

「……」

『繊細な部分なんて誰にでもある。俺だってみんなに話せてない事がある。同じさ。それでいて決して、負の感情が悪というわけではない。うんざりな気持ちの結果的に自分の助ける事だってある』

「……マスター」

『笑おうぜ、アルジュナ。このカルデアには似合わないのさ、そんな顰めっ面はよ。嫌なもん全部抱えても笑えるようにこれから生きる』

のさ。……あ、そうだ！これからちよつと俺の部屋に遊びに行こうぜ！面白いゲームがあるんだ！一緒にやろうぜ！」

「マスター。……ふつ、分かりました。たまには付き合いましよう。どんな内容のものですか？」

『お互いが社長になって、総資産を競うスゴロクゲームで……』

彼は、マスターに過ぎない。

全てが自分より劣っていた。だが同時に、全てが正反対のマスターを羨ましく感じた。

彼はこの時、自分に何かを授けたのだ。そう思えてならない。

『あー……思ったより負けず嫌いだったか。颯めつ面倍増で帰っちゃった。……どうしよ』

『ごめん。ここまでとは思わなくて……』

藤丸立香がランサーの手助けで起き上がる。

「お前の魔力は少ない。その程度でサーヴァントの負担の全てを補おうとするのは正しく愚行だ」

「……ランサー、相変わらず言葉が少ないな。……やれる事をやるんだ、リツカ。それが最善だ、と信じて。……それだけでいい」

『……ありがとう、二人とも』

先程の、あらゆる宝具を飛ばしたサーヴァントにサルさんは向かっていったのが、黄金の波紋による2回目の迎撃が来ない時点で察している。

しかし、サルさんがあんな芸当が出来るサーヴァントに敵うとは思えない。

そもそもサーヴァントとは英霊であり、歴史に名を残した英雄が殆どのサーヴァントシステムの中でただの魔術師が勝てるサーヴァントがいるはずがない。

右手に宿した黎明の腕としての能力も、ルーラーにやられていたことを考えれば期待は出来ない。心配したくなるのも無理はないだろう。

それでも。

それでも前を向くしかない。勝敗はともかく、こちらに攻撃が向かないように戦ってくれているのだ。

『行こう、セイバー！ランサー！』

力強く号令をかけ、自身にも気合を入れる。

後戻りは出来ない。このまま突っ込むだけだ……！

城周辺部。絶大な石の壁が道を阻むため、正面から進むことを余儀なくされる。壁を伝うようにランサーに飛んで運んでもらう事も考えたが、先程のようにアーチャーで狙撃でもされたら対応が難しい。そして、もう一つ。

「お前達とはここまでだ」

そう、ランサーが言い放ったからだ。

『……ランサー!?!』

「どういう事だランサー……!」

「ルーラーは俺の事を理解しているらしい。この戦場に我が宿敵がいる。ならば、俺が立ちはだかるべきだろう」

『宿敵……?』

「気にするな、単なる腐れ縁だ。しかし、向こうも俺も決闘を望んでいるのは明らかだ。俺が行く。手出しは無用だ」

戦いの場所を遠い所に定めるためか、ランサーは城から離れるように飛び去って行った。

ランサーは城から遠く離れた丘に降りていく。その間、狙撃のチャ

ンスはいくらでもあったにもかかわらず、相手からの攻撃は一切来なかった。

「久しぶり、と言うべきか。アルジュナ」

「カルナ。やはりお前だったか」

アルジュナと呼ばれたサーヴァントはそこに佇んだまま、静かにカルナを見据えていた。

「これも宿命か」

「カルナ、お前がここにいるなら、我らのする事は二つと無い。今ここで殺しあうまで」

「……かつて、我がマスターが言った事がある」

「……？」

「ここは『夢』のような世界だと。その言葉が胸にスツと入って来たのを覚えていたが。本当に夢のようだ。また、お前のような戦士と戦えるのだから」

「……そうか。お前もまた、望んでいたか！」

「行くぞ、アルジュナ。これ以上の語りは不要だ」

「決着をつけるぞ！カルナ！」

## 影の国の神殺し

とあるカルデアの、過去の出来事。

「…………… お主……………」

『あ、姐さんじゃないですか。おっすおっす』

『相変わらずのタイツですね。姐さん綺麗なんですからお洒落しないんですか?』

「なんだ、口説いているのか? それなら丁度いい。付き合え。今の儂は退屈故、一瞬で葬ってやるが」

『アレ? なんで急に血生臭くなるん?』

「それとも、手ほどこきでもしてやろうか。なあに、すぐ終わる」

『すぐ終わるトレーニングって……。あなたの場合、嫌な予感しかないだが?』

「むう、つれない奴め」

『こつちだつて色々あつて忙しいんですよ。この前だつて、やっと15372回目の作戦によって、清姫による「貴方こそ安珍様なのではない?」 ムーブ」を解くのに成功したばかりなんですから』

「…………… 頑張るがよい」

『姐さんのそういう空気読めるところ大好き』

『そういえば、トレーニング場で闘志が滾ってる人が何人かいたんですが、なんか知ってます? 主にケルトの皆さんが鍛錬してるだけなんですが……………』

「何、いつものように言ったままでさ」

「儂を殺してみよ、とな」

『……ランサー』

「……行くぞ。奴も役目を果たそうと動いただけだ。……私達はルーラーを止めるぞ！」

城内に進入した藤丸立香とセイバーが一直線にルーラーのいた玉座の間に向かう。

城の中の道は、腕と共に来た時の道をなぞるだけだ。

しかし、だからこそその違和感に気付く。

『……この辺りって……？』

「広く……なっているな」

見回すと、壁には見たことのない飾りや模様が浮き出ている。

建築物に興味がないとは言っても警戒して入ったために、壁に見覚えがないというのはおかしな話である。

『何かの罠に引っかかった……!?!』

「いや、違う。……ここは……、……っ!? 避けるリツカ!!」

セイバーが藤丸立香を押し飛ばす。

藤丸立香は大きく体制を崩す事になるが、その瞬間に赤槍が頬を掠める。

セイバーが手を出さなければ、確実に眉間に刺さっただろう事実が悟れる程の精度を持っていた。それ程の技量の持ち主が目の前にいた。

「ほう……。避けられても当たるように投げたつもりだったが……、

なかなか運の良い男のようだな」

目の前にいるのは、二槍を携えた麗人。

茶色がベースの一張羅に身を纏ったその女性は、実に美しかった。

『……っ!』

おそらく、この人は敵ではあるだろう。

しかし、何故だろう。何かが薄く思える。

簡単に言うなら……必死さ、だろうか。

殺気、というか。生存意欲というか。  
覇気を感じない。

この一言に尽きた。

「リツカ」

同じような違和感が解消したのか、セイバーも藤丸立香に言葉を投げかける。

「奴の声……私に似ているぞ……!?!」

……どうでもよかった。

「なんだ？　かかってこんのか？　儂としては、そのぐらい血気盛んな方が愉しみだというものだが」

「奴は……おそらく強い。ルーラーなどとは戦いの毛色が違う。……全力で行けばどう転ぶかは分からないが、マスターを守りながらとなれば敗走は目に見えているぞ」

『……でも、やるしかない』

いつ戦いの火蓋が切られるか分からない緊張感が張り詰める。

セイバーは軍神の剣を、敵サーヴァントは朱槍を構える。

そしてその空気をしばませるかの様に、猛犬が乱入した。

「なんだよ、やっぱおもしれえ事になってるじゃねえか」

セイバーが振り向くと同時に、敵の麗人は目を見開いて呟いた。

「……セタンタか」

「よう、師匠。……おいセイバー、そして坊主。コイツは貰っていくぜ」

「……マスター」

セイバーが藤丸立香の方を向く。

正直、答えは決まりきっている。



戦力が少ない自分たちからしてみれば渡りに船だ。

それに、敵サーヴァントの実力的に苦戦は必至。即撃破が目標のこちら陣営に対して敵サーヴァントは時間稼ぎ、又は焦りを利用してこちらが敗北するまで見えていた相手である。

ここでの増援に、なんの不満があるか。

『任せる。青のランサー』

「青、ねえ。変に呼ばれるよりかはマシさね。おら、さっさと行きな」  
「……頼むぞー！」

二人が上に向かう階段に消えたところを見送り、青のランサーは首に掛けていた槍を器用に回し、姿勢を低くして構える。

「久しいな。セタンタ。あれからも立派に成長したように思える。だが、よもやそれだけではないだろう？」

「はっ、言ってる。こちとらアンタと戦いたくてうずうずしてたんだ。念願叶って万々歳ってな。今度こそ殺してやるよ」

「良いだろう。どれ、殺してみるがいい。期待してるぞ？　セタンタよ」

「いくぜ！」

「力を示せ！　このスカサハに！」

諸事情につき、回想をお送り致します。

「……なるほど。さっきの場所に見覚えがないのも当然か。マスターの叶えた世界にはお前達も含まれていた。だから、物置き場となっていたさっきの部屋が現れ、お前達がここにいるのか……！」

セイバーが立ち止まり、暗い廊下の先を見る。同時に自身の片腕を使って藤丸立香を進ませないように遮る。

藤丸立香は目が慣れないのか、目を細めて正面を見る。

目が次第に慣れるにつれ、藤丸立香の目の色が変わった。

『……いつらって……!?!』

以前来た時に見た、無数の置物。モニュメント。像が扉に鎖で繋がれている奇妙な彫刻である。

その名を言うならば。

亡者。

勇者。

聖者。

覇者。

それぞれの名を冠する扉。

それだけであつたならば、ただの像に過ぎなかった。

しかし、先程黎明の腕が願った願いが。

その全ての扉の形をした彫刻を。

宝物庫へと変貌させたのだ。

『うわあ……!?! なんか撃ってきた!?!』

「魔弾だ、マスター……!?! 伏せていろ、一掃する!?!」

セイバーの剣がしなり、流れる様に魔弾を弾く。

そのまま数えきれない扉を前にして突貫していった。

やあ、みんな。俺を覚えているか。黎明の腕だよ。漢字読めるか？  
現状、名乗れる名前としてはサルっていう名前だよ。

今ね、黄金のサーヴァントと対峙してるナウ。

あいつやばいんだけど。相手にしたら軽く十二回は死ぬそうなん  
だけど。

なんて言うんだろうね。凄味？ 気迫つてのが英霊つてすごい

んだけど、あいつは別格。

正直、勝てる気はしない！

……今のままだと、ね。

でも、これから俺が使う魔術つてのはこう言う時には役に立つモノ  
なんだけど、それを使うには俺自身の過去を振り返る必要がある。

つまり、俺の起源を説明する。それがどれほど歪んでいるものかを  
知っておいて欲しいしな。

戦いの最中に回想に潜ってたなら、走馬灯になりかねないし。

そんなわけで。

俺が黎明の腕になる前の話だ。

かつて、俺は裕福な家庭の長男として生まれた。

そして、死んだ。

これで終わりだ。

……え？ どういう事だ……って？

まあ、気持ちはわかる。俺だってこうなるなんて思わなかった。

でも、俺も全てが分かっているわけじゃない。そこら辺は端折って説明する。

次に、俺を生んだ家族が今度は次男を産んだ。

次男は俺とは違い、スクスク育ったらしい。

ある日、次男は父親に連れられて俺の墓に向かった。

今思えば、これが転機だったのかもしれない。

次男は墓石を見て大変驚いたそうだ。

当たり前だ。自分の名前が載っていたんだから。

親曰く、「兄が早くに死んでしまったために、兄と同じ名前を付けた」とかなんとか。詳しい理由までは調べられてないけど。

そしたら、そいつがこの事に関してなんて思ったか分かるか!?

「キリストと同じように、二度目の生をこの名前は受けたのなら……

俺は神なんじゃね？」だぞ!?

いや俺、死んでるんだが!?

しばらくして、その次男は芸術に目覚めたらしく、芸術家になった。

まあ、後から調べたところによると大成したらしい。

それは良かったと思う。うん、誇らしい。

それで、次男も天寿を全うした。

はずだったんだ。

そいつが英霊にさえならなければ、俺は存在しなかった。

あいつはきつと、聖杯戦争に召喚されたとしても変わらなかつただろう。

面白いことを探して、聖杯そつちのけで創作活動してただろうさ。

でも、生前と英霊とでは状況が違う。

自身がしてきた事が逸話となって、宝具になるんだ。

……あいつの宝具なんて、詳しく知らない。だが、あいつの作品を見て、あり得ない組み合わせを作って描き切る事は得意という事は知った。

きつと、聖杯戦争中に下らない事に宝具を使ったんだろう。

「自分が神だと自覚した、兄の死」と「聖杯に願えば生き返る」なんて、考えを組み合わせて。

どうあれ、結果的に俺が転生を果たしたのには変わりがなかった。

ここから、一回目の転生した人生の始まりだ。

よく分からない？ 安心しろ。俺もだ。

転生したばかりは、何も覚えてなくてな。かつての名前ぐらいしか覚えてなかつた。

それもそのはず。覚える前に死んでるんだもん。覚えとけ、って言う方が無茶だ。むしろ名前を覚えてるだけすごいと思つて。

まあ、普通の人間としての生活をしていたよ。転生だからと言つても、ちゃんと母親の胎内から生まれたから家族もいた。

事故が起こつたのはその人生で高校生ぐらいになつた時。

比較的現代の日本にいたから、アニメ文化というものは既に存在していて、俺もアニメにハマつた。特に、とあるゲームアプリなんかは古参勢だつたぐらいに。

そのゲームアプリばかりやるもんだから、課金は少々しただけでも

かなり充実したものになってたぜ。攻略組の一人にもなった筈だ。対戦モードの無いゲームだったからランキングなんてものはなく、あまり知られてはなかったけど。

そのゲームの終章まで行って、エンディングを見て。

ああ、いいなあ。って思ってる。

このゲームの主人公になりたい、なんて興奮して強く願ってた。

そう、願ったんだ。

二回目の転生。それは知らず知らずの内に自分自身で行ってしまった事だった。

そりゃ、びつくりだよな。

気づいたら施設の通路で突っ伏してて、自分の名前が藤丸立香になってたんだから。

ええー。

思わず、そんな声を漏らすしかなかった。

これはあくまで予想でしかないし、俺の頭がおかしいだけの虚言なのかも知れない。

でも。

もしかすると、次男に二つのモノを組み合わせるチカラがあったとして。

次男の『作品』となった俺に。

似たような魔術があるとしたら？

あの強く願った時、それが発動したとしたら、だ。

俺の起源は『融合』だとカルデアで身体を調べて分かった。  
確実に分かる事はこれだけ。

それから、マスターとなって人理修復頑張って、気付いたら腕になつてたりするんだけど……。

その話は生き残ってからでもいい。

とにかく、俺が使う魔術について。

俺はサーヴァントに作られたからか、俺の起源はサーヴァントの霊基と非常に相性がいい。なんせ、サーヴァントというのは所詮コピー体に過ぎないからだ。

もし、そのサーヴァントの知識があれば。その知識からサーヴァントとその神秘を投影魔術で投影。

起源の『融合』によって。

一時的に、サーヴァントになる事が出来る。

『フルトレース・オン  
霊装投影、開始』

友ではない、親しき夢。

両手を前に出し、一小節の詠唱を唱える。

それはかつての友、正義の味方から譲り受けた言葉を組み込んだもの。

『フルトトレース・オン  
霊装投影、開始』――

「はんつ、マスター風情が正面に立つなど本来ならあり得ぬ事よ。殊更に目の前のサーヴァントの霊基を使つて戦うなぞ……なあ？」

黄金のサーヴァントは腕を組みながら静観している。

俺というマスターの在り方に思うところがあるらしいが、そんな事はどうでもいい。

コレが俺のやり方だ。お前が誰であろうと口出しされる謂れはない。

イメージするは、世界そのもの。

その中の一部を掬い取り。

自分の身体に刻みつける。

――『ギルガメッシュ』

唱えると同時に、身体が歪曲する。

身体の基本骨子から新たなものに変換され。

異物が混ざり込み。

『融合』していく。

側から見れば、ただ光に包まれた様にしか思えない行為に過ぎない。

しかし、内側から感じる変容は黄金のサーヴァントも感じる程に強



烈に響く。

「投影魔術というものは必ずしも性能が同じ贋作を作れる訳ではない。解析や想定によって再現率が大幅に変わり、完璧と言われるものですら劣化品であるらしいが……この我自らを真似るならば、どこまで模倣出来たか採点してやろう！」

『……あー。そういう事ね』

向こうが先程と同じ黄金の波紋を表したのすら無視して、俺は納得をしていた。

先程からの違和感。

それがやつと理解出来た。

こいつは……いや、ギルガメツシユは俺の事を知っている。

サーヴァントの解析、および想定範囲は広く、あらゆる場所で召喚された過去をも観測さえ出来るのなら投影には欠かせない要素となる。

向こうが魔術による解析を許してる今、あらゆる時空のギルガメツシユを観測出来るのだが。

偶然にも、見つけた。

俺の名前を呼び、まだ見ぬ彼の友に会いたいと嘆く俺を大きく口を開けて笑う奴が。

『そうか……俺達、もう会ってたのか……』

「ふん、不敬者が……。今更自身の愚かさに気付いたか」

『悪いなあ。これでも記憶力はいい方なんだが、昔に無茶をしてから曖昧だよ』

「……知っているとも。……はっ、貴様はそもそも頭蓋の中が腐りきっていたろう。現実を見よ」

『んだとテメエ!!』

「フハハハハッハッハ!! 良い。良いぞ! 貴様の様な脳無しな輩を相手にするのは気が進まんが、我の力と同等であれば是非もない。――  
――宝物庫の鍵を開けてやろう」

投影完了。

頭から徐々に全身の光が解けていき、今しがた足先まで完了した。というか、こいつどんだけ聖杯戦争出てんだ。情報処理だけでこんなに時間食ったのは初めてだわ。

融合のためか体格こそ以前と変わらないものの、髪は同じ金髪となり、身体には赤いギルガメッシュと同じ模様が浮き出ている。しかし、鎧は下半身しか身につけていない。

鎧に関しては先程奴が言った、投影品によるの劣化が関係しているが鎧ならばさしたる問題ではない。

これは、サーヴァントを投影するなんて無茶をしている自分に対する、当然の事象だ。

『全身全霊痛み入るぜ、ギルガメッシュ。戦士なら最上の誉れ、だのなんだの言つて碎け散るんだろうが、俺はそんなのはお断りでね。……通せよ、金ピカ』

お互いに最高峰の剣、槍などの武具が交差する。

そしてほとんどの武器が互いに弾かれ、時には碎けていく。

宝具《ゲイト・オブ・バビロン王の財宝》

ギルガメッシュの宝物庫にアクセスし、中の財宝であるものを取り出す、または発射する宝具だ。

今現在においてのお互いの主力ではあるが、性能だけで言えばギルガメッシュに軍配は上がる。

こちらは投影による劣化の所為で、限りなく近い性能を引き出せて

はいても、性能頼りの戦術では勝てない。

具体的な性能としては、一齐に展開出来るゲートの数が俺の方が少なく、一部の財宝は取り出す事が出来ない。

取り出す事の出来ないもの。それは分かっているだけでも《乖離剣エア》と《天の鎖》の二つ。そのどちらもがギルガメツシユの思い入れのあるものであり、乖離剣エアに至っては奴のもう一つの宝具《天地乖離す開闢の星に使用される剣(?)》だ。

というか、エアもう出してるの？

さっきの宝物庫がどうたらしく、って言ったのってそういう事!?

嘘やん、勝てるわけないって!

うわ、右手に持って、スタンバってるし。何がそこまでお前を本気にさせるんや。

それはもう隙を突くしかないとして。

《天の鎖》の方に聞いて言えば、対処法はある。

挨拶がわりに飛んできた剣を弾かせた、あの鎖だ。

アレは《天の鎖》と似たような性質を持っている上に、俺だけが唯一使える宝具でもある。さっき弾いた時、霊装投影せずとも鎖を出したのがその証拠。

……あれ？ ルーラーとやり合ってた時、この鎖使えばよかったのでは？

もしかすると、腕の時でも出せたかも知んない。

とにかく、《天の鎖》に対してはそれをぶつければいい。

それさえ出来れば、後はゲートの数の差を埋めるための技量勝負だ！

ギルガメツシユが射出する武器の着弾点を見極め、危険なものを優先的に相殺させながら距離を近づける。

恐らく俺が唯一勝てるのは、今までの模倣してきた英雄達による俺の体に残った経験。

ギルガメツシユは戦士ではない。

近距離の命の取り合いならこちらに分がある。

逆に、ギルガメツシュが近距離が苦手であれば詰む。

しかも奴はエア持ってるし、倒すには必殺の一撃である必要がある。

倒し損ねてしまえば最後、すぐさまエアを使用されてその風圧でボロ雑巾みたいになって、べちゃつ、つといてしまうのが目に見える。

それでもギルガメツシュの弾幕は容赦がない。宝具の一つ一つが爆撃のように着弾と同時に爆発する。

そんな状況に対して、宝具を射出したり手に持った剣で死なないうちに立ち回って行くしかない。

ちなみに、手に持っているのはゲオルギウスが持っているアスカロンと呼ばれる剣の原典。

あの、『アスカロンの真実！ お前竜な！』と冤罪吹っかけてくるあの剣。実はその本質は冤罪ではなく、守護に特化した聖剣だ。

身を守る事においては絶大な力を発揮するため、この状況にはもってこいな宝具。

ただ、射出する武器のほとんどは相手の武器に合わせて適当な武器をぶん投げています。

しかし、それだけではギルガメツシュに勝てない。

そこで考えたのは、如何にもギルガメツシュの言う雑種らしい作戦。

簡単に言うと、妨害。

《ゲート・オブ・バビロン王の財宝》は人類の知恵の原典を保有しているため、価値ある財宝から、下らないアイテムまで勢揃いしている。

さらにこれらは《ゲート・オブ・バビロン王の財宝》によって神秘を帯びている筈だから、当然サーヴァントにも効く。

『喰らえやアアア!!』

「ぬう!!」

そう叫び、手当たり次第に取り出した物をぶん投げる。

火炎瓶や手榴弾の投擲武器から、異臭を放つシユールストレミングやコンビニなどに配置されているペイントボールなど。

これらも人類の知恵の一つである。流石に庶民じみているからかギルガメツシユが使う事は滅多にないだろうが、遠慮なく使わせてもらう……！

「ぐつ、貴様ア!!」

『隙を見せたなあーその首、貰い受けるぜえ!!』

「うっ……うぐっ……おえ」

『“ごめ”ん”……！シユールストレミングはやり過ぎた……！』

「おのれえ……！この我に臭いが残ってしまったら、斬首だけでは済まさんぞ……！」

『そーいやお前の蔵って、全ての臭いを消し去るレベルの消臭剤はあるか……？』

「……ある」

『あるのかよ』

友ではない、親しき夢の跡。

「……貴様、誰に許しを得て私の前にいる？ 拝謁する栄誉を与えた覚えはないぞ……？」

『……ん？ お前何言ってる？ そんなんだから某青セイバーに嫌われるんだぜ？ もーちよいフランクにほら、笑って笑って』  
「なんだと？」

『お初にお目にかかる、アーチャー。俺がマスターの藤丸立香です。見ての通り敬意は払うが、お前が勝手に俺を見定めるように、俺はお前を王としては見ない。人として見させてもらう』

「ほう……？ 雑種如きが吠えるではないか」

『噛みつく犬がいるからこそ、従順な犬の価値が分かるもんさ。楽しく気楽に世界を救おうぜ！……所で、アーチャーはなんか偉い人だったりする？』

「偉いか、だと？ そんな物はこの我を差し置いて他におらん」

『なら、さ。俺の状況を説明したら、笑わずに理解してくれる？』

「何を言っている、貴様」

『俺、実は転生者って奴なんだけど、わざわざ俺をこんな目に遭わせた奴の正体と動機が知りたい。転生前の名前は——』

「……ほう、なかなか愉快な事になっているな、道化。面白い、雑種が足掻きながら真実を解き明かす様を見るのも一興か」

『協力してくれるという認識でいいのかよ。よろしく、アーチャー』

召喚して初めての邂逅。

ギルガメッシュ  
裁定者はやがて、<sup>マ</sup>人ならざる人<sup>ス</sup>に<sup>ター</sup>天の鎖<sup>エルキドゥ</sup>を重ねる事になる。

「天の鎖よッ!!」

俺の周りを囲むかの様に、天の鎖を展開させるギルガメツシュ。  
俺自身に、いや、ギルガメツシュの霊装投影ではこれを切り抜ける  
事は出来ない。

ギルガメツシュの最大の特性は保有している財宝の全てであり、身  
体的特徴のみで言うならばあらゆる英霊に劣る。

さらに言えば、ギルガメツシュの霊装投影によつて少なからず神性  
を取得している今では、天の鎖の性質である『神性が高いほど抜け出  
せられない』能力とはとことん相性が悪い。

しかし、鎖を持っているのは目の前のアイツだけじゃない……！

『行け、友の名を刻んだ鎖——！』

「ぬう……!?!? 貴様ア……!」

神が造つたワケでもない、ギルガメツシュが俺に渡してくれた鎖。  
その思い出はさつきまで忘れてしまっていたけれど。

エルキドゥが神として、神と人を繋ぎ止めるなら。

エンキドゥは人として、人と神を繋ぎ止める鎖だ。

結局、互いが互いを縛るために、決着がつく事はない。

投影解除。

神性をかなぐり捨てて、ただの鎖同然となった天の鎖を引きちぎ  
る。友の名を刻んだ鎖は身体を物理的に縛る事しか出来ない為に、ギ  
ルガメツシュは王の財宝体勢そのまま放つ事が出来るだろうと  
予測し、気を引いている内に鎖の結界から脱出する。

無理やり天の鎖を引きちぎった反動で、体の節々が悲鳴をあげる。

当たり前だ。所詮は人間のやる事。だが、こんな無茶は今までに何  
度もやってきた。この程度は偶然というくりにすら入らん。

「チツ……!」

接近している俺に気付いて、王ゲート・オブ・バビロンの財宝を自分に向けて射出。強引に友の名エンを刻キんだ鎖トウを破壊した。そのまま俺に照準を向けて財宝を発射するが、その程度の弾幕でやられる俺ではない。

最初に向かつてきた宝剣を素早く掴み取り、反動で体勢を崩しながらも次弾を弾く。そのまま走り抜け、最後に飛んできた矛に宝剣をぶん投げて軌道を逸らす。

そのままギルガメツシュに肉薄した。

「一掃しろ、エア……！」

乖離剣エアの回転を始動させ、剣先を空に仰がせた。

エアの回転パーツが徐々に速くなっていき、紅い風が吹き荒ぶ。

そして、

『遅えよ……!!』

ギルガメツシュの右手が爆発と共に吹き飛び、エアは地面を跳ねた。

一方、俺の右手には黎明の腕が火炎弾を放つ際に発現する、焰の結晶が輝いていた。

「……サ、……!!」

『この距離なら、外すワケねえだろオ!!』

「キサマアアア!!」

『ここからは楽しいケンカの時間だ……！ 覚悟しろよ、ギルガメツシュ……!!』



ギルガメツシュの顔面に、ありつたけの力を込めた俺の拳が振り下ろす。

しかしそれは、奴の焦げた右手に止められる。  
互いの目が合う。

紅蓮の目と、翡翠の目が交差した。

「……気付けば、同じ事の繰り返しよ。貴様はあの時もこうして無謀に突っ込んで来たものよな」

『テメエもガラにもなく、色んなモン飛ばさねえって慢心してたからだろうが。……今撃てば俺は呆気なく死ぬぜ？ やるか？』

「ふん。貴様がただの人間として戦うというならば、私の財宝など使うに値せぬ。統治している民をわざわざ宝剣で斬り捨てる王などおらぬわ、たわけ」

『王様なら殴り合いだってしないだろうが。ばーか』

「なあに、偶には悪くないぞ？ 特にこの様に気兼ねの要らぬ世界であればな」

『じゃあねえ、付き合ってやるよ！』

拳を握り込む。

最早、言葉は要らない。

昔のように語り、笑い、本音をぶつけ合うのみ。

その方法が拳というだけであるだけだ。

ただ、英雄王を知る者からすればあり得ない光景であるのは間違いない。

『来いよ。ギルガメツシュ』

「覚悟せよサルバドール。私の拳は今までよりも重いぞ?」  
『はっ、当たててから言えよ』

彼にとっては友ではない、親しき者に過ぎない。  
少なくとも、二人はいい笑顔でひたすら殴り合ってたという。

## 最優の敵に、結末を望む夢。

時は、ギルガメツシユと黎明の腕改め、サルバドールが殴り合いに発展した頃から遡る。

マスターとセイバーが入った城が、薄く見える程の僻地。

そこでは、ギルガメツシユの爆撃に劣らぬ程の戦いの激化が起きていた。

赤のランサー。

そして、赤のランサーと闘う宿命を背負った異母兄弟。

名をカルナ。

名をアルジユナ。

アルジユナはルーラーに召喚こそされたものの、ルーラーとの契約を拒否した為に野良のサーヴァントとして現界し、ルーラーもそれを受け入れていた。

対してカルナは、黎明の腕とのパスは切れているものの藤丸立香と契約を結んでいる。しかし、藤丸立香に魔力を供給してもらった分は微々たるもので、それ以上の魔力はカルナ自身も受け取る事を拒否している。マスターの身を案じての行動だったが、多少の魔力ならば支障はないとカルナは切り捨てた。

今思えば、これ程条件が一致した上でここまで公平に行える決着はこれまでなかった気もする。

互いにそう思い、その数瞬に言葉を交わすこともなく激突した。

今思えば、彼が「夢」のようだ、といった意味が分かる。

「サーヴァントランサー、召喚に応じ参上した」

(マジで来た!? まあ、今念話わかる!? ネンワ!! ちょっと助けてくれねえかなあ!!)

「パスは……お前か。承知した」

「……何ツ!? このタイミングで……!?!」

「退いてくれないか。そこに埋まっているのは俺のマスターのようだ。危害を加えるなら討たせてもらうぞ。セイバー」

「貴様は……ランサーか……!」

「如何にも。だがその様子なら、俺の真名も知っていると見える」  
(あつぶな、死ぬかと思つたわ……)

「……マスター。後で話したい。少し頭を冷やしてくる」

(へいへい。門限なんざねえが……早めに帰って来いよ)

「ん? セイバーもマスターのサーヴァント? どういう事だ?」

(些細な喧嘩さ。死にたくねえからたすけて、なんて願つたらお前が来てビックリだわ。……なあ、えつとランサー?)

「どうした」

(……少し話さねえか? 俺には戦士の在り方つてのがイマイチ分かんらんらしい。お前がもし戦士なら、足りない俺に教えて欲しい)

「命令なら従おう」

(……サンキュー。ランサー)

「——やはり、宿敵と言えるアルジュナと再び出会つたならば、あの時のように戦いたいと思うだろう。それが俺にとっての戦<sup>クシャトリヤ</sup>士の形だ」

(ふむ……ランサーにも色々あんだね。……どうする? なんか俺、何故か聖杯に接続してるみたいだし、アルジュナ喚んでみる?)

「……いや、いい」

(え、いいの?)

「願うものではない。所詮は殺し合いだ。他に有益な願いを優先させるべきだろう」

(……なあランサー。願いつてなんだろうな)

「願、い、か。死を賭しても叶えたいもの、だろうか」

(多分そうだと思う。けど、人間ってのは誰しも強い願いを持つてる訳じゃない。死にたくないから諦める人もいるし、中にはそもそもそんな大きなものを背負わない人もいる。でもさ、小さな願いならみんなきつと持つてるんだ)

「……」

(俺はさ、それを「夢」って呼んだ。将来の夢みたいな重い意味じゃあなくてな？　ここに来てから結構叶ったぜ？　そろそろ死にたく……いや、こっちは別にいいか、あなた方のようなあまり知らない英雄と一度会って喋ってみたいなー、とかはセイバーとかランサーに会えて叶ったし。セイバーは戦士としての道を歩んでみたいって思ってたから、俺と一緒に戦うことのない世界で過ごしてる)

「そうか」

(ランサーの「夢」もさ、アルジュナと戦える事がきつと出来るさ。そう思ってたもん、きつと出来る……多分。ここは「夢」のような世界なんだから)

「そうだな……『夢』……か」

「ところで、いつまで埋まっているんだ？　マスター？」

(埋まってねえの!!　腕しかねえの!!　ほっとけ!!)

「アルジュナよ」

英霊カルナとして、自分は宿敵に語りかける。

「一度、考えた事がある。小競り合いもなく、本気の全力を互いにぶつけたならどちらが勝利するかを」

「カルナ……」

「折角の好機だ。この世界に呵責なし、むしろこのぐらいの無謀さは

あつて然るべきだろう。どうだ、アルジュナ」

「いいだろう。今度こそ、全身全霊を以つて貴様を打ち砕くツ!!」

「神々の業の慈悲を知れ。インドラよ、刮目しろ」

「神性領域拡大。空間固定」

カルナの鎧が消え去り、その手に神槍が顕現する。

「絶滅とは是、この一刺し」

「神罰執行期限設定——全承認」

アルジュナの右手に光球が顕れ、凝縮されていく。

「灼き尽くせ——」

「シヴァの怒りを以て、汝らの命をここで絶つ——」

「《日輪よ、死ヴァアサヴァイ・シヤクテイに随テえ》——」

「《破壊神の手翳パーシユパタ》——!」

その時、この世界は二つに割れたかのようにだつたと、サルバドールは言った。

最優の敵に、結末を望む夢の先

「ヴァアサヴィ・シヤクテイ  
《日輪よ、死に随え》

――！――

「《破壊神の手翳》

――！――

神をも殺す一射と。

強制解脱の光線が。

互いに喰らい合うように絡みつき、その中心はブラックホールのように圧縮されていった。

周りの木々は紙のようにひしやげ、近くにいた野生の黎明の腕は一瞬で溶けるように消し飛ぶ。

「くっ、うおアアアアアア!!」

「はああああ!!」

拮抗すればするほどに、全てを飲み込む暗黒物質は肥大化していく。

ついに。それはいとも簡単に破裂し。

二人をも巻き込んだ大爆発を引き起こした。

(やはりこれも因果か)

カルナは光の中でそう呟いた。

否、その言葉は外界に漏れる事はない。

(しかし、悪くはなかった)

一人きりの世界でそう独りごちた。

『なあ、アルジュナ』

「何ですかマスター。もうあの遊戯は絶対金輪際するつもりはありません

せんが」

『そうじゃねえつての。つてか根に持ちすぎじゃね？……俺さ、やってみたい事があるんだよね!』

何か、聞こえる。

かつてのマスターだろうか。念話の声と違い、幼くもハツラツとした声でアルジュナと会話していた。

「……ふう、何ですか?」

ため息を吐いて、聞くアルジュナ。

『カルナとアルジュナが一緒に戦つてるところ!』

「あり得ませんね」

あまりにも早い即答が、マスターに届く。

そうだろうな、と思つた。

仮に俺に言われても肯定は出来ないだろう。

奴とはそういう宿命だ。

今回は全力の宝具を互いが展開し、満足のいく決闘にはなった。それだけでいい。今回はここで潔く散るとしよう。

『何、言つてんだ』

それは、アルジュナに言つた言葉だったのか。

それとも。

『それが出来るのがサーヴァントだろ。第二の人生だろうが! 「夢」持つて生きろや!! 馬鹿ども!!』

彼は、笑いながらそれを言いきつた。

目を開く。



荒れ果てた荒野が目広がる。

激しい宝具を衝突によつて、無残な光景を目の当たりにする。

あらゆるものは燃え尽き、焦げ付いた。

向こうには、天使の輪つかを付けた黎明の腕が空へ昇るといふある意味解脱してゐる光景も目にした。

そして、それらの情報を知つてから、自身の置かれている状況が分かつた。

自分よりも背丈の低い青年に引かれていた。腕が青年の首にかけられ、足が引きずられるままに運ばれている。

「……マスター」

『喋んな。マジに消滅するぜ』

そうやって、引きずられ続ける。

足を動かす余裕すらも宝具に魔力として注ぎ込んだ。そうでもしなければ勝てない相手であつたからだ。それを知つてか、体の力をほとんど抜いている自分をマスターは一切茶化す事は無かつた。

そうまでされて、行き着いた場所。

「……あ、アルジュナ……！」

宿敵アルジュナが木に持たれながら、深い呼吸とともに眠っている場所だつた。

「はっ、インドの英雄が揃いも揃つて無様よな！」

黄金のサーヴァント、ギルガメッシュが高らかに笑う。

「ランサー、月以來か。あの鎧はどうした？ まさか捨てたか？ 良い、此度は機嫌がいい。その首だけ置いていけ」

「………英雄王か」

「待て、なんだその間は」

「お前が負傷していながらもここでこうして生きている事が疑問で

な。少なくとも、そこまで顔面を強打しておきながら人前に入る性格ではないと踏んでいたが」

「ふん、人としての益もない決闘に現を抜かしていたまですよ。一心不乱に拳を振り上げる雑魚を見るのもまた一興だぞ?」

『その拳を見事! 顔面でキャッチしてくれるのは流石英雄王!』

「貴様、表に出ろ。すぐさま塵芥にしてくれる」

『もうここ表だろうが。今度こそ、その鼻を陥没させてやろうか』

「うつ、ぐつ……」

「む」

アルジュナが少し呻いた後、ゆっくりと目を開く。

「わ、私は——」

「アルジュナ。……俺たちは一杯食わされたようだぞ」

「……何?」

「俺たちの宝具による余波。それが俺たちに与える被害を最小限に食い止めるために、あの二人に動かれてしまったようだ。結果的に、俺たちの決着はついたが、互いに生き残ってしまったな」

「な、何……!? 今すぐにも続けるぞ、カルナ……!」

「それは不可能だ。俺たちは全力を尽くし、この結果だ。もう魔力は多くない。それにこれ以上はあの二人が黙っていないだろう」

『おい、さっさと城行くぞ負け犬! 俺が勝ったんだから言うこと聞けや!』

「もう無理、もう我動けない。王様休む」

『クソガキのような事やってんじゃねえ!! それでも英霊かテメエ!!』

「人類最古の英霊だが?」

『このやろつ……! 死んじやえ、バーカ!』

「なんだと、貴様アアア!!」

『ええ!? 今キレる!? お前の堪忍袋はどうなってるの!?!』

「……やる気が失せるな」

「ああ、微笑ましい光景だ」

「は？」

「ん？」

「……もういい」

「……違うのか？」

『あ、そうだ！』

おもむろに、マスターが声を上げる。

『あのさ、お前らライバル同士でいいの？』

「……」

「そうだな」

『一緒に来てくくんない？ 頼みたい事が有るんだけど』

「一緒に……？」

「アルジュナもか」

『うん、そう。俺が助けた命だし、少しは手伝ってくんね？』

二人は互いの目を見合う。

「たまには、いいか」

「たまには、いいだろう」

「ん」

「む」

『……仲良いな』

「それはなん」

## 最上の弟子に、殺されたい夢

互いの槍の剣戟が、重なり合うたびに火花を散らす。

青きランサーは、華麗な目の前のランサーと同じ得物を用いていない、払い、突き刺す。

しかし、その尽くは通じない。

それは決して、目の前のランサーが二本の朱槍を持っているからという理由ではなく。かといって、女性だからと言う理由も戦士には当てはまらない。

「どうした、セタンタ。よもやその程度では有るまいな？」

セタンタと幼名で呼ばれる、クー・フリーンにとっては目の前の女性——スカサハは師であるため。

少なくとも、生前においてクー・フリーンが自分の師を打ち倒す事があつたという記述はなく。

彼女はクー・フリーンにとって未だに超えられることのない技量の持ち主である。

「当たり前よオ!! そら!!」

それがどうした。とクー・フリーンは当然の事実を吐き捨てる。

「師匠が強い？ 当たり前だ。なら、今、超えればいい。」

強敵と出会うのは、悲劇ではなく幸運。そう思えるのは単に戦士であるからだろう。

それが、生前殺せなかった師であるならば尚の事。

死の機会を失ったスカサハという女。

自分は間に合わなかったのだ。その結果、彼女を殺せるものはいなくなつた。

そんな存在となつた女が今。

サーヴァントとしてここにいます。

神霊に近い存在となった師匠がなぜ召喚出来るのかはこの際どうでもいい。

彼女が敵として立ち上がるのなら。

———こんな機会、逃す訳ねえだろ———！

『おい青タイト』

「よし、シミュレーションルームに行こうぜ。ぶっ飛ばしてやる」

『なんでだよ!? これが褒め言葉だとなぜ分からない!?』

「分からねえよ!? よしんばそうだったとしても皮肉にしか聞こえねーよ!!」

『あのさ、伝記をさらっと見てたらさ。クー・フリーンのページがあつてさ。どうせだから生の声を聞きたいな、と』

「へえ。オメエみてえな後先考えねえような馬鹿が伝記をねえ……」

『お? ケンカか? 買うぜ?』

「やるか?」

『まあいいや。そんでさ、このクー・フリーンの師匠ってどんな人だったんだ?』

「師匠?……スカサハの事か?」

『そう。単純な興味。話したくないなら後日でもいいし、やめてほしいなら二度とこの話はしないが』

「急にまじめになんなよ。……スカサハは……そうだな。俺にとつて」

越えるべきだった壁だ。

「おおおおおおお!!」

声を張り上げ、全ての挙動に全身全霊を注ぎ込む。それでなければ。いや、そうであっても勝てるかどうかはわからない。

絶対に殺す。今度こそ。

「《刺し穿つ死棘の槍》——↓！」

より鮮烈な赤を纏い、呪いの槍がスカサハに向く。

しかし、その後立っていたのは。

他ならぬ彼女であった。

発動してしまえば、必ず当たる因果逆転の槍。

ならば、発動させなければいい。

早い話、発動前に封殺された。

「……衰えたか。修行を怠ったか？ 馬鹿者」

スカサハの目にあるのは明らかな侮蔑。

壁まで吹き飛ばされて満足に顔も見れない状態の中、クー・フリーンは自嘲した。

（確かにな。ここに召喚されてから、身になることなんざ一つもしてねえ。ここで強敵と戦ったのも師匠が初めてだし、光を取り戻した程度の雑魚相手じゃ運動にもならなかった。そして、何より——

「……あん野郎。忘れてんじゃねえよ……くそつたれ」

「去ね。弱くなったお主など見たくなかった」

『お姉さんも弱くなってない？ 背後取られた時点で負けでしょうよ』

「!?」

肩を叩かれ、瞬時にスカサハが後退する。

かつてのマスターがそこにいた。

『スカサハの姉さんの様な存在をちゃんとした召喚でサーヴァントにする

から、弱くなったのかな? 後、お前は俺から魔力を持って行かなくていい。消える寸前じゃねえの。魔力喰いもせずによくここまで生きられたもんだ』

「何をしに来た。テメエ」

『決まってるだろ』

『いつも通りさ。行くぜランサー。お前が合わせろ。……後、俺と契約しとけ。必要な魔力ぐらい、補ってやる』

「お前っ……!」

『さて、久方ぶりのケルト魂を見せてやんよ。覚悟はいいかい? ご令嬢』

「そんな歳でもない。。来い、勇士ども」



最上の弟子に、殺されたい夢の果て。

無手で構えるサルバドールに、クー・フリーンはその隣に立つ事で意思を示した。

共闘戦線。

以前の関係だった彼らにとっては大したこともない、かつてよく見た光景だった。

それは、サルバドールがマスターとしてカルデアにいた頃まで遡る。

『スカサハ……あんた、死にたいんだってな?』

「……その前に、そのベルトはなんだ? 玩具にしか見えないが」

『これもクー・フリーンって奴の仕業なんだ……。とまあ、冗談はさておき。ちよつくら久々に体動かしたいんだよね。トレーニングつけてくれない?』

黄色いラインが特徴的なベルトギア（おもちゃ）を適当なところへ投げ捨てて、サルバドールはそう提案した。

「いいぞ。私も退屈しのぎになるものを探していたところだ。……ついでにセタンタも呼ぶか?」

『え……。あの青タイツもおく?』

「いいではないか。喧嘩するほど仲がいいのだろう? お主らは」

『それはあなたの視点の話で、これは犬猿の仲つて言うんですけど?』  
「ぴつたりな言葉だ。的を射ている。何よりお前はサルで、セタンタは猛犬だ。……この言葉を作った者はお主達を見て思いついたのではないか?」

『笑いたくもありませんね、そんな冗談。……性格は似たもの同士のはずなのにどうしてこうも馬が合わないかなあ?』

「馬の英霊を持ってこないと改善は難しいじゃないか？」

『おっぱいタイツ師匠、冗談キツイつすね』

「ふっ、そうか。……悪かったな、流せ」

「そうだ、サルよ」

『……なんですか？』

「セタンタと共に儂を殺してみよ。どうだ、トレーニングとしては面白からう？」

「あー嫌だ嫌だ。テメエの魔力なんざ受け取りたくなかったつてのによ」

『ウツセエな！ 瀕死だった奴に言われても負け惜しみにしか聞こえねーな！……いいからチャチャッと倒すぜ』

「指図すんじゃないぞ」

『やるか？ 犬っころ』

「いいぜ？ 猿が」

「余所見とは感心せんぞ？ お主ら」

的確に急所を突き刺そうと槍を振るうスカサハ。

二人に同時に突き出された矛先は。

片や、掌でいなされ。

片や、槍の先端部で受け止められた。

『さあやるか……！』

「ほう……退屈せずに済みそうだ」

「抜かせえ！」

『くたばれ！』

クー・フリーンが蹴りを、サルバドールが掌底を打ち出す。

しかし、スカサハは片膝で受け止めながら跳躍し、勢いそのままに後退した。

サルバドールが迂回し、クー・フリーンが正面から突貫する。

先程とは違い、クー・フリーンの俊敏性は魔力補給の為か本来の素早さを取り戻している。スカサハの眼前に一瞬で肉薄する。

槍の特性として、一番隙の少ない攻撃方法は突きとされている。

この攻撃方法は速く対象に届くうえに、槍を引くことで元の体勢に戻る時間も速い為、槍の基本と言える。

しかしそれは常人が振るった場合のこと。英霊ともなればそれを行く速さは桁違いである。

クー・フリーンは自身の朱槍、ゲイ・ボルグで無数の刃を突きという形で撃ち出す。

もちろん、物理的に増えているわけではない。クー・フリーンの突きの速さが成せる業である。

無論、クー・フリーンが出来るという事は。その師であるスカサハが見切れることは容易であるのと同義ではあるが。

右手に携えている槍だけを用いて、避けるスカサハ。左手のもう片方の槍を使わないのには、当然のごとく訳があり。

サルバドールの存在である。

サルバドールはクー・フリーンに劣らない脚力でスカサハの死角に回り込む。

少なくとも、そういう行動をする人間に限って警戒を怠ることは、次に待っているのは奇襲による敗北である。

故に、何が起きても対応出来るようにする為の左手である。

しかし、サルバドールを注視しながら戦える程、スカサハにとって

クー・フリーンは弱い相手ではない。

現に今、突く、薙ぐ、払うなどの多彩な技を用いながらクー・フリーンはスカサハを追い詰めていた。

反撃しようにも、スカサハがクー・フリーンに反撃をしてみれば、すぐさまサルバドールはその一瞬の隙を逃さず突いてくる。

それでも、挟み撃ちの形になってしまえば強襲され、スカサハは急激に不利になる。だからこそ攻撃をいなしつつ、サルバドールから離れるように動く事でサルバドールとクー・フリーンを同じ視界に収めようとするスカサハ。

すると、走り続けるサルバドールが追いつけないと悟ったのか、自身の手を鉄砲の形にしてスカサハに向けた。

——なるほど、ガンドか。

そう思ったスカサハはクー・フリーンに意識を向ける。

ガンドは中距離に放つことができる呪いの一射。確かに当たれば自分の動きが止まる程の威力はあるはずだ。

だが、それだけだ。当たらなければどうという事はない。さらに言えば、その程度の飛び道具が儼に当たると思っているのが甚だ疑問だ。

飛び道具の一つや二つ、見ずに避けなくて何が英雄か。

そう思うスカサハであったが、サルバドールは指の銃口をスカサハから外し。

スカサハの真上。その天井に狙いを定めた。

(天井……？ まさかこの部屋の照明を儼に落とす気が……！)  
思わずスカサハは天井に視線を向ける。

否、向けてしまった。

今、スカサハのいる真上にはその類は一切ない。

(視線誘導か……！ やつてくれる!!)

クー・フリーリンを今の一瞬で見逃した。

サルバドールは銃の手を作り天井を指差した。それだけの小細工でスカサハを欺いたのだ。

「そおらよ!!」

クー・フリーリンが回り込んだ事に気づくのは、騙された事を知ってから一瞬の事である。下から袈裟に振るわれた朱槍をスカサハは槍の太刀打ちの部分で受け止めるが僅かに弾かれた。

「くっ……！ やるようになった……」

そして。

完全に視界から、サルバドールが消える。

『……縮地』

何がともあれ、彼女は彼を背を向けた。

そのチャンスは無駄にするほど、サルバドールは鈍くない。

『無手版《無明三段突き》い!!』

かつて沖田総司が使うと言われた、相手に一瞬で近づく技能の一つである『縮地』。そして、三つの斬撃を全く同じタイミングで打ち出す『無明三段突き』という事象飽和の絶技が存在する。

だが縮地はともかく、サルバドールの無手版無明三段突きの方は三つの拳を全く同じタイミングで出している訳ではない。ただの力を込めた打撃というだけで、実際は名前だけである。

ただ、無明三段突きと同じ威力を誇るだけの名称に過ぎない。

スカサハは槍を地面に突き刺し、その槍の上部を持つことで一時的な盾の役割を担わせる。

その槍の中心よりやや高めの位置に当たった拳によって、スカサハは衝撃のみを食らって壁まで吹き飛ばされた。

(相変わらずの馬鹿力は健在か……！)

そう心の内に零すスカサハにも、欠点が存在する。

元々この世界での不安定な召喚だった所為か、スカサハは本来の力をほとんど出せていない。一種のシャドウサーヴァントと同じようなスペックになっている。それは、彼女が本来なら神霊という扱いで召喚することが出来ないという事に起因する。

尚、その状態でも魔力不足のクー・フリーリンに遅れは取らなかったが。

クー・フリーリンが追い打ちとばかりに、スカサハに迫る。

それに対してスカサハはいくつものゲイ・ボルグを顕現させ、クー・フリーリンに向かって射出させた。

どれも必中の呪いが付いているために、クー・フリーリンは自身のゲイ・ボルグで全ての槍を弾きながらスカサハに差し迫る。

スカサハはクー・フリーリンに応戦する為にスカサハはカウンターを行動に選択した。

今現在、吹き飛ばされた際に得物は手放さざるを得なかったために、もう一本の槍しか手元にはない。だが、スカサハにとっては十分である。

クー・フリーリンの攻撃に合わせて刺し違い、撃破、或いは蹴りなどを用いて吹き飛ばす事で距離を取る。

何せ、クー・フリーリンの後ろに控えているのはサルバドールだ。

何をしてくるか分からない為に、早急にクー・フリーリンは対処しなければならぬ。

そう思い、クー・フリーリンの背後にちらりと見えたサルバドールを

見るスカサハ。

当のサルバドールは、カルデアにいる時にギルガメツシュから使い方を学んだ黄金の波紋を出し、その中から何かを取り出した。

曰く、本人は言う。

基本はギルガメツシュからくれた鎖しか取り出せないよ。

俺があそこに入れる所有物なんて、そのぐらいだし。

ただ。

貸してくれる、と。ギルガメツシュから許しが出れば話は別。

サルバドールが取り出したのは原初の地獄。その体現。

「はっ？」

スカサハは、この時初めて人生で驚愕したのかも知れない。

「はっ？」

クー・フリーンはやっと、自分の今から迎える運命に気付いた。

『クー・フリーン、ごめん。戦いに犠牲は付き物だっ』

まるで、悪戯を仕掛けた子供のようにサルバドールは。

乖離剣、エアを引き抜いた。

その紅き暴風は部屋一帯を破壊し、蹂躪し尽くし。

少なくとも、後に分かったのは。

高貴な城の下段部に大きな風穴がぽっかりと空いたという事実だろう。



## 幕間「オルガ、死す」

話をしよう。

……え？ やだ？ うるさい、聞け。

俺、サルバドールの人理修復の話はまるで物語のように奇怪、そして華々しいものであったかも知れないが。

生憎、それをこんな所で話すにはちよつと……恥ずかしいんだ。

だから、所々端折りながら話すが別にいいだろう？

本筋の変わらないところは別の機会に知ればいい。

俺はここで起きた事と、事実起きるはずだった事実との差異についてを重点的に話すつもりだ。

……ん？ 本筋がそもそも何か、つて？……結構前に話しただろうが。

お前だけに話すんだから。ちゃんと聞いててくれ。

いわゆるカルデアという場所に転生した後、俺はとある廊下で倒れていた。何かの訓練シミュレーションで脳が疲れていたらしい。簡単に言うとなら寝てた。でも、シミュレーションなんてしていた記憶はない。

もちろん、藤丸立香としての今までの記憶もなかった。

当たり前だ。既に気を失ったその時から、俺は藤丸立香ではなく、藤丸立香という皮を被ったサルバドールの名を持つ別人だったのだから。

あるとするなら、俺自身が転生前に普通の学生として過ごしていた思い出だけ。

目の前に来たフォウと呼ばれる小動物を可愛がった後に来た、ピンク色の髪で俺を先輩と呼ぶ少女が来た時。

俺はマジに焦った。

そりやそうだ。知り合いだったら、一発でバレるぐらいには拳動不審だったからな。

だが、お互いが初対面だとわかったときは目に見えてほっ、としてたかな。

その後は、杉田の声の……そうだ、レフさんが来て、その後は成り行きそのままにカルデアは爆発して強制レイシフトが暴発した。

この時の事は事前に知ってはいた。だが、俺は動けなかった。

打算もなく二回目の転生に混乱していたから、自分がどこに飛ばされたのかすらもイマイチ把握出来てなかったのが原因だ。

俺はこの悲劇がおきた時に、やっと事態を掴んだんだ。

この後の特異点に関しては順調に進んだ。

マシユ・キリエライトがシールドラーとしてデミ・サーヴァント化し、俺はこの特異点を知っていたから速やかに敵襲に対応出来た。

どれだけスムーズだったのかは、所長がザコに襲われる前に合流出来たと言えは分かるだろうか。

「マスターがあなたしかいない……？ それにマシユがデミ・サーヴァントに……。どういう事よ！」

「落ち着いてください、所長。幸い、カルデアとは連絡が取れています。まずは霊脈を目指してサークルを作りに行きましょう」

『所長。混乱しているようなら、全裸になればあらゆるしがらみから解き放たれるらしいですよ』

「先輩、それは嘘だと流石に私でも分かります」

「……ホントに？」

「落ち着いて下さい！ 所長！」

『所で、オルガマリーさん。長いんでオルガって呼んでいいですか？』

「やめなさい。私は上司、あなたは部下よ。その軽い口を慎みなさい」  
『じゃあ、オツさんでいい？』

「口を慎みなさいよ!!」

『……ん、来るか。マシユ、敵だから前方に立って構えろ』

「え?……っ!? はい!」

「え!?! 何!?!」

『安心してください。ただの敵です』

「安心出来ないじゃない!?!」

そうして、聖杯探索は続いていった。そのまま知っている通りに、シヤドウサーヴァントと対峙した際にキャスターが現れ、協力体制を整えて大聖杯の元に全員で向かった。

中にいたセイバーも命からがらで勝利し、キャスターが帰っていった後に、俺の人生最大の愚行にして全てが変わる事態が起こる。

大聖杯の前に現れたのは、レフだった。

何が起こるかは把握していた。そしてその邪悪さも。

マシユがレフに近づくオルガを止めるが、俺はこの時、自分の魔術の可能性が頭に引つかかって仕方がなかった。

思い浮かぶのは、先程のセイバー戦。

俺はあの時、見よう見まねで文字をなぞった。マスターなのにも関わらず、セイバーに肉弾戦を仕掛けている途中でだ。まあ、ともに戦った事のない素人丸出しだったが。無意識にそこで書いたルーン文字によって発火が起き、セイバーが大きな隙を見せた事。

まるで、その現象がこれから起きる事態から救済出来るかの様に感じた。

セイバー戦の次に思い浮かぶは、今回の転生。

中の主人公に憧れたゲームがあった。こうなりたいと強く願ってから、同じような場所に来た。

もしかして、この転生は自分が引き起こした奇跡なのではないか。  
馬鹿馬鹿しい話を俺は自然と受け止めていた。

我に帰れば、既にカルデアスに取り込まれようとしているオルガマ  
リーがいる。

危険だと頭が信号を発したが、無理やり振り伏せる。  
知るか。

俺を止める理由にはならない。

無我夢中に駆け出した。オルガマリーの下へ。

『オルガアアア!!』

「貴様。何をする気だ……う？」

レフが疑問の目を俺に向ける。

これから何をするか、コイツは分かっているらしい。

決まってる。

「助けて!!」

助けるに決まってるだろうが……!!

『手を伸ばせえ!!』

しかし、届かない。

オルガマリーはカルデアスに触れた。

情報に耐えきれず、幽霊同然であるオルガマリーでさえも分解され

ていく。

その眼には、絶望が映っていた。

『まだだ！ 諦めるかあ!!』

右手を伸ばすが物理的に届かない。

ならば、右手の光る刻印を使うまで。

『令呪で命ずる、来いシールダー!!』

『重ねて命ずる。……俺を、カルデアスにぶん投げろオ!!』

転移した為に状況が急変し、混乱に陥った後輩は身体の動きそのままに身を任せる。

つまり、命令通りにマッシュは動き。

俺自身を手にかけて事に気づくのは、手が俺から離れてからだつた。

「……先輩!!」

そして、その最悪なタイミングでマッシュはカルデアに帰還した。

この時、俺には何か策があったか。と言われれば、否だ。

直感に近いものが「行ける」と踏んだだけで、具体的なものは一切ない。

ただ、死にゆくオルガマリーの手を取り。

勢い余って、二人ともカルデアスの中心に突っ込んだだけだった。

そして情報過多による弊害で、俺自身にも分化が始まった。

それだけで何も起きなければ、人理は終わっていたのかもしれない。

い。

だが、いつか俺は言ったな？

俺の起源は『融合』であると。

何を思ったか消滅しつつあるオルガマリーごと、カルデアスを俺は取り込み始めた。

もちろん、意図はあった。

分化の性質を利用さえすれば、コントロール次第ではもとはには戻れるはず。

だったら、コントロール出来るようにしてしまえばいい。

どうせ死ぬのならやってみるべきだ。

自分の推測が全て正しければ、確実にこの『分化』と『融合』の二つの性質は対立する——↓

オルガマリーの思念体を最初に取り込み、一体化した後に徐々に分化の原因を解いていく。

原因とはつまり、単純に莫大な情報量による肉体の飽和。

『融合』によるカルデアス内での自身の存在を明確化させる作業と並行させながら、少しずつ情報を『融合』して取り込んでいく。

その後、カルデアに落胆の様子で帰還したマシユに告げられたのは、カルデアスが計測が曖昧となる神代から、人理焼却で観測できなくなる現代までの地球の姿を無作為に変化させているという、一種の故障状態に陥っているという事だった。

ダヴィンチちゃんはこれを見て、「地球がシステムアップデートのように更新されているかのようだ」と評した。

もちろん、この奇跡はいくつもの幸運無くしては出来ない芸当であつた。

まず、彼の推測は予測通りで、彼はカルデアスが起こした現象とは真反対の起源であつたこと。

次に、同じ『融合』を使用する事で、カルデアスの原因である情報の処理が可能であつた事。

そして。

オルガマリーの「助けて」という思念があつた為に、自分自身がサルバドールという存在を認識し、カルデアスの中で自分の存在を証明し続ける事が出来た事。

他にも小さな奇跡は起こっていただろう。

されど、大きな要因はこの三つであつた。

結果的にカルデアスとサルバドール、そしてオルガマリーは一体化し。

カルデアス観測スタッフがその時見たのは、オルガマリーを抱えてカルデアスから分離を完了したサルバドールの姿だつた。

『驚いてるところ悪いが、バイタル……チエックでいいかな？ やらせてくれないか？』

そう言つてスタッフにオルガマリーを渡した後、彼は意識を手放した。

それが、マシユにトラウマを植え付けながらも彼女を救つた、彼の愚行の始まりである。

同時にカルデアスと合体したことにより、サルバドールは投影魔術に必須な基本骨子や構造理解を全てカルデアスに一任する事で、飛躍的精度の投影を可能にした。

カルデアスとはそもそも擬似地球環境モデルであり、それこそ英雄の逸話や過去さえも正確に観測可能な装置の役割を果たすものである。

これは、後に人理修復においてサルバドールの重要な主力の一部となる。

オルガマリーはサルバドールによって、カルデアスの中で思念体を通して直接肉体情報を組み込まれた。これはカルデアスから出ることによってオルガマリーの死が確定し、そのまま消失する恐れがあるためである。

サルバドールはカルデアスに検索をかけ、およそ優秀な魔術師——  
——さらに聖杯戦争にてサーヴァントを召喚出来た事例を持つ少女——をオルガマリーに分化と融合を組み合わせて慎重に肉体情報を形成していった。

その少女の影響か、魔術回路に変化が生じ、《<sup>アベレージ・ワン</sup>五大元素使い》となり、ついでに彼の目論見通りにサーヴァントを扱えるようになる。しかし、後天的なものの為に扱いが難しく、グランドオーダーの後半になってから活用される場面が多くなる。

それでも、これからのサルバドールの代わりにマスターの役目を担うのは彼女である。

まだ、彼らの物語は始まったばかり。

『語り部みたいな口調に変わっちゃってたが兎も角、こっから俺の華麗な人理修復が……っておい、セイバー？……コイツ、寝てやがる……』

ふと、腕だけの存在は焚き火の前から移動し、地平線を見る。

『……おっ、黎明だ』



夜明けが来た、となんとなく言いたくなくて。

そんな言葉を使う。念話でしか聞こえなからうと言いたいものは言いたいのだ。

そうだ。ゆっくりでいい。

時間はほぼ無限にある。ゆっくり、ちよつとずつ話して行こう。俺の物語を。

セイバーに会って、一週間経過した頃のサルバドールはそう思い、セイバーへ毛布がわりの木の葉かける為に探しに向かう。

それから一ヶ月後、赤のランサーことカルナを召喚する。

ルーラーのサーヴァントを召喚し、雲行きが怪しくなるまで、あと10年3ヶ月と14日。

長い夢は、まだ始まったばかり。

セイバー、ひどくない？

「はっ！」

『セイバー、後ろにいる！』

「分かったマスター！」

周りの扉からの魔力弾を回避して、扉にかけられた鎖を両断する。

この鎖を砕く事であらゆる種類の顔や上半身を模した錠が外れていき、そのまま動かなくなっていく。

攻略法が分かれば、まず自分は負ける事は無いとセイバーは決定付けた。

魔力弾に当たらないようにしつつ、鎖を破壊するのみであるからだ。

しかし、なにせ数が多い。セイバーのクラスがアーチャーであれば鎖を正確に撃ち抜き、無数の矢をばら撒く事で制圧する事が出来ただろう。だがこの身はセイバー。如何に英霊とは言え射程距離はそれほど長くなく、圧倒的な数によって大幅に時間を浪費していた。

ならば、セイバーの持つ対軍宝具を使って一掃すれば良い。

そう思うセイバーだが、先程から酷く気掛かりな事が存在する。

それは鎖を重点的に壊しているセイバーが、扉自体を直接攻撃しないようにしている原因でもあった。

あの扉達は必ず扉を開き、中に存在する魔力の塊を吐き出してから消滅するというプロセスを踏んで撃沈する。

逆を言えば、そのプロセスを踏まない限り消滅しない。

つまり、扉を先に破壊しようとしても倒す事が出来ないのである。

これには、セイバーも顔には出さないものの驚いた。

何故なら、彼女が持っているのは神の剣。

それも、地上のあらゆるものを破壊出来るという剣をして、砕く事が出来ないのだ。

セイバーのような鉄面皮でも混乱したくなる気持ちはある。

何故だ。何故壊れない？

地上のものではないのか？……ここ地上じゃないのか？

そう思っても無理はない。

広範囲の宝具を出しても、扉にかかる錠や鎖に直撃させなければ倒せないのでは……とセイバーは危惧していた。

まあ、実を言うと鎖自体が宝具に耐えられる程硬くないので、普通に撃つてしまえば蹴散らす事が出来るのだが。

軍神の剣を信頼しているからこそその勘違いである。

結局、藤丸立香がセイバーに宝具の提案をするまで無為な時間を割いてしまうことになった。

「我が名はアルテ……ニア？」

初めてこの世界に召喚された時。

目の前には大きな自然しか存在しなかった。

確かに喚ばれたはずなのに、いるはずのマスターがいない。

私は誰に喚ばれたのか。

それを知る為に周囲を散策し始めた。

この時、腕が接続された聖杯を無意識に使用し、『誰かいないかな』と呟いた願いがそのままの形で反映されたに過ぎない。

よって。

「ん？」

『……！』

二人の邂逅は、側から見るととても奇妙に映った。

腕がそれぞれの指をウネウネ動かし、震え、気でも触れたのか握手

を求める手の形でセイバーに突撃してきたのだ。

敵意がない事に気付くセイバー。だからといって、相手が何をしたいのか分からない。

「気持ち悪いな。刺しておくか」

軍神の剣でぶすりと刺され、腕は動かなくなった。

これが二人の最初の出会いである。

この後にギリギリながらも蘇生した腕が、めげずにコンタクトを行なっては瀕死に陥るをいくつか繰り返して、サーヴァントの契約をずるに至る。

文章にすると面白いだけの一文だが、何気にあらゆる奇跡の果てを三周ぐらいしてから成立するような主従であった。

セイバー？……何故こつちを見ない？

黎明の腕、サルバドールをマスターにした、セイバー陣営。

聖杯戦争なども無く、依り代が居ないセイバーが魔力切れで現界出来なくならないようにと、黎明の腕がセイバーに働きかけた結果であつた。

しかし、それだけで済めば事は簡単であり。

片や軍神の剣を持つ最優のクラス、セイバー。

片やまともに喋る事も出来ない雑魚、腕。

そんな中、思いつく出来る限りの穏便な手段を繰り出し、黎明の腕はセイバーとコミュニケーションを取ろうと努力した。

手始めに、握手を試みた。

剣で刺された。

しかしこの時、幸運にも既に魔力が無限に湧いてくる不思議な聖杯と接続していたため、彼の『ヤメロー、シニタクナイ』という、周りに一切聞こえない悲痛な叫びを聞き入れた。

回復した腕は、めげずにコンタクトを取りに行つた。

セイバーもこちらを振り向き、生き返つた事に怪訝な目を向け。

縦に思いつきり斬られた。

ザクツと、トンカツを切るような音がした。

回復。

毎回気絶してしまうため、セイバーの行方が分からなくなる。しかし、ガッツが付与されると勘違いするや否や、すぐに彼女を追いかける。

（これが俺の新しい力か……!? 名付けて《何度、落陽を迎えても》だ！）

そんなものはない。  
ただの聖杯のチカラである。

暫くは、この繰り返しだった。

そもそも戦闘ばかり行ってきたセイバーは腕を好戦的かつ復活可能なエネミーと見なし、出会い頭に腕をフルボッコにしていた。

サプライズパーティー風に腕がセイバーを待ち受ければ。

セイバーは罫と断じ、剣がムチのようになつたと思つたら黎明の腕は立体パズルとなつた。

ゴマをするかのように近づけば。

足場にするかのように思いつき踏み潰され。

ブチギレて黎明の腕が本気で襲いかかろうとすると。

本気を出す前に、宝具を出された。

ヤケクソになって自暴自棄になり、腕がそのままセイバーに突進を繰り返すと。

空からビームが降ってきて蒸発した。後で聞いたら、軍神の一撃を食らつたらしい。そこまで本気にすることあるう？ と、この時ばかりは腕も嘆いた。

「綺麗だ……」

静かな夜に一人で呟く。

ここには誰もいない。いや、見つかるかと近付いてくる可笑しな片腕はいるが。

文明。それがこの世界にはない。

誰もいない。

故に世界は美しく、穢れがない。

しかし、それ以上のものはない。

人間の智慧。火を操る事から始まった人類の文明の歴史。その全てがここには存在しなかった。

彼女は、悪い文明と判断すればその存在を否定し、破壊する。反対に良い文明だと判断すれば享受する。

だが、文明がなければ良し悪しを判断する事すら出来ない。

それがセイバーに一抹の虚しさを感じさせた。

「お前もこんな気持ちだったのか？」

背の高い草に紛れて姿を現したのは、ここにいる唯一の知的生命体。

黎明の腕だった。

「見ろ。ここには何も無い。建造物もなければ、森もない。何より文明がない。こんな所にお前はずっといたのか？」

黎明の腕は目がない。しかし、見えてはいた。

セイバーと同じく、ここに来たのは比較的早い方だろうが、腕も何処かでは願っていた。

誰か、いるんじゃないかと。探せば誰か見つかるのだろうと。

しかし、そんな淡い希望はセイバーに打ち砕かれた。

自分の視える範囲がただ狭いだけなんだと。そんな自嘲さえも許されない。

黎明の腕はセイバーの隣に立った。

腕しかない存在である。立つ、といつてもいつも立っているようなものに過ぎないが。

それでも、セイバーが夜空を見上げているのを隣で待ち続けた。

「やがて、私はこのままだと消えるだろう。随分魔力を使った。お前は壊しても近づいて来るのだから、退屈ではなかった」

『……』

「……もしかして、退屈させない為に私のところへ来たのか？……ありがとう」

『……』

「少し、いいか？」

『……』

腕がゆっくり回転し、セイバーに振り向いた手の平を見せる。

「しばらくしたら、私は消える。それまでならなんでもいい。私が詫びとして願いを叶えよう。どうしたい？」

もし、意思があるなら。

黎明の腕に意思があるなら、消えるまでに叶えるのもいいだろう。と、セイバーは考えた。

しばらく動かなくなった黎明の腕だが、怒りを示しているわけではないらしい。どちらかというと、真剣に悩んでいるような……。

暗い世界でゆっくりと腕が考え、やがて地面に指で書いていく。だ  
が書き慣れてないのか、書くだけでもかなりの時間がかかった。  
空が白み始めた。

腕は書き終わったのか、朝焼けを見ているセイバーに触れた。

セイバーが文字が書かれた場所を覗き込んだ。

『もうすこしだけ、いっしょにいてくれ』

セイバーと黎明の腕の契約。

それは黎明の名の通り、夜明けの時に結ばれた主従であった。



玉座の間で背中を向けていた青年が、口を開いた。

「随分と早いですね。こちらはまだ準備を終えてません。それで、何の用でしょうか？」

侵入者に青年こと、ルーラーは振り返った。

「無論、止めに来た。あの時、目の前でマスターを殺された屈辱。貴様の死で償わせる……！」

セイバーがルーラーに剣を向けた。

## みんなを救うだけの夢

ルーラーとセイバー。そして、セイバーの後ろから藤丸立香が遅れて城にある玉座の間へ入って来た。

藤丸立香は感じる。自分に向けられてはいないが、この場所にひしひしと殺気が張り詰めている。

英雄の睨み合いというのは、それだけで一般人の背筋を凍らせるものだ。藤丸立香は特異点Fで数回だけマッシュやキャスターと共に戦った事はあるが、所詮それは始まりの物語に過ぎない。

特異点で出会ったシャドウサーヴァントなどとは一線を画す光景。瞬間、セイバーが正面から斬り込み、ルーラーは黒鍵を投擲した。

しばらくは、セイバーが攻撃的に立ち回るのに対して、ルーラーは消極的に立ち回る。

セイバーの軍神の剣は、地上のあらゆるものを破壊する神秘を持つ。それに対しルーラーは三池典太と呼ばれる日本刀を持っているが、神秘のランクに大きな差がある。まともに打ち合えば押し負けるのは明らかにルーラーだ。

だからこそルーラーは隙を伺い、セイバーは隙を与えない程の剣撃を繰り返さなければならぬ。

軍神の剣がしなつて鞭のような形状になる事で、ルーラーの首筋にまで肉薄するが、ルーラーは刀身で受け流すように難なくそれを遮る。

彼は、右腕と左腕にそれぞれ宝具を持っている。

その宝具の応用として、右腕には『心眼(真)』、左腕には『心眼(偽)』のスキルに酷似した能力が備わっている。

少なくとも、ルーラーにとってはセイバーの攻撃の一つ一つは命取り。しかし、避けられない訳ではない。

セイバーにとっては、厄介な切り札を出される前に仕留めたい。しかし、肝心の攻撃が当たらない。

セイバーが優位に立っているように見えるが、一種の膠着状態に

陥っていた。

ルーラーが再度黒鍵を投げる。追尾性能を持つ黒鍵はあらぬ方向に投げられた後に、セイバーへ向かって飛んでいく。

セイバーはそれを見つけた途端、軍神の剣で薙ぎ落とす。

「……マスター。宝具を使う。離れている」

痺れを切らした。セイバーはマスターである藤丸立香にそう宣言した。

『大丈夫!? セイバー……!』

藤丸立香は不安を感じていた。しかし、セイバーは続ける。

「奴の目的は私達の撃退ではない。あくまで聖杯を叶える為の時間稼ぎだ。何をしたのは分からないが、策を弄している事は間違いない。……もしかすると、もう願いは叶い始めている可能性もある……!」

『……っ!? そうか!!』

「だとして、どうしますか? 貴方方以外は他のサーヴァントに抑えられている頃です。そして……今の俺は時間を稼ぐ事はあれど、貴方を殺さない選択肢は存在しない。……ここで消えてもらおうぞ!」

ルーラーが空中へ浮遊する。そして、その両手がそれぞれ白と黒に光り始める。

「晩年の願い。今、この場でこそ叶うときだ。……人類の救済を……この救いを享受しろ!!」

セイバーが剣を前に突き出す。その眼は確固たる意志が孕んでいる。

「救い……というのは、私にはよく分からない。だが、その言葉はマスターが一度言っていた言葉だな」

「俺はお前に救われた。一緒に過ごしてくれただけで俺の救いとなった」と言っていたが。……一緒というのも大変だ。かなり苦労する事は知っている」

「ましては人類全員に救いなど個人が求める程のものではない。……お前が潰れるだけだ。やめておけ」

「貴様に何が分かる!? 下らない妄言を吐くなセイバー!!」

「聖杯接続完了。万物に終焉を……!」

「命は壊さない。その文明を破壊する」

「ツインアーム・ビッグクラウンチ  
《双腕・零次集束》……!」

「フォトン・レイ  
《軍神の剣》!!」

光の帯が剣先に集まり、その帯は回転しながらセイバーを銃弾のような形で覆い始め、一気に正面に向かって飛んで行った。

白と黒が混ざり合って射出される。それらは組み合わさり、擬似的なブラックホールを創り出した。

しかし、二つの宝具が重なる直前。

「……令呪を持って命ずる……!!」

この戦いの切り札が出されようとしていた。

## みんなを救うだけの夢の残滓

藤丸立香は不安が拭い取れない。

何故か。

分からない。

それは本来、仲間の危機を察知する直感であり、カルデアのマスターとしてとても大切な感覚であるのだが。

そんな事は今の彼に知る由はない。

故に、戦っているセイバーにかける言葉もなかった。

宝具の撃ち合い。

それは、どんな結果を招こうと必ず周りに影響を及ぼす程の衝撃が起こる。

必死だった。足に力を入れて吹き飛ばないように耐え忍ぶ。

藤丸立香は普通の人間だ。もし吹き飛ばんでしまい、当たりどころが悪かったらそれだけで気絶してしまう程には人間なのだ。

だが、それでも願った。セイバーの勝利を。

目の前から目を離さず、自分のやれることをしようと前を向く。

だからこそ。

「……令呪を以って命ずる……!!」

何が起きたのかを理解した。

「……宝具を中止せよ、セイバー」

『ルーラーアアア!!』

神明裁決。ルーラーに託されるクラス毎に二画存在する令呪を使うことが出来るスキル。他でもない黎明の腕が殺された時にセイバー、ランサーが一画ずつ使われたもの。

その二画目に、絶対に避けられないタイミングを生み出すためだけに使われるとは――!

思わず、藤丸立香は感情のままに叫ぶ。

卑怯だ、と。

だが、頭の中ではルーラーの事を理解していた。

こいつはそういう英雄なのだ。どんなことをしてでも、叶えたい願いを持つ英霊なのだ。

『《緊急回避》 ツ!!』

カルデア制服の魔術礼装に付随しているのスキルの中に、サーヴァント一体に回避させることが出来るスキルの『緊急回避』を使用。すぐさま後退させようと試みた。

「無駄だ……! 二つの光弾が重なる時、生半可は対処では呑み込まれるだけだ! これで、俺の勝ちだ!」

『セイバー!!』

「くっ――!」

「すまない、マスター」

城が、ルーラーの暗黒物質に引き寄せられる。

全体が砕け始め、瓦礫が中心に集まっていく。

勢いよく床も崩壊し、藤丸立香はそのまま下に落ちていった。

ルーラーやセイバーの姿は見る事は出来ないが、壁すらも崩れて倒壊していつている。間違いなく自分と同じように落ちていつている

だろう。

いや、そうであつて欲しい。

セイバーがああブラックホールと化した物質に吸い込まれていった様には見えた。しかし、重力に従つて落ちた筈だ。そうに決まつてゐる。

藤丸立香は思い至つた考えを拭い取り、そう決めつけながらも落ちていく。

不意に、誰かに手を掴まれ。

そのまま土煙に覆われていった。

「あはは、はははは——！！」

狂笑。

聖者は跡地に立ちながら、ルーラーのクラスとは思えない程に悶えた。

「ここに、遂に叶えり……！ やつと、人類は救済の道を歩むんだ……！」

ルーラーが持っている聖杯によつて、晩年から望んでいた願いが届こうとしていた。

もう成就まで幾ばくもない。

ひたすらに笑つた。ただ笑つた。

だからこそ気付かない。ルーラーの宝具は、ブラックホールにこそなれど。

城の尽くを破壊する力はない。

仮にルーラーの宝具を単体で発動するとしたのなら。瓦礫なんていう規模でなく、より大きな壁や床が引き寄せられる事だろう。

そもそも、ブラックホールが消滅しているのもおかしな話だ。まるで、暗黒物質ごと吹き飛ばされて消滅したかのような、衝撃の呆気なさがある。

本来ならば、ここまでルーラーも影響なく無傷でいられる宝具ではない。

何故、城が細かく砕け散り。ましてやルーラーの宝具が消し飛んだか。

『俺はかつて、言った。ここは夢だと』

『誰もが叶えたいが、中には決して叶えられないものもある。それを少なからず満たすための世界である』

『俺は平穏を。セイバーは慈しみの人生を。ランサーは仇敵との再戦を。それぞれ、この地で叶えた事だろう』

『だが、聖人よ。心得ていたか?』

『夢とはやがて、醒めて消えるのが道理だと』

「お……お前は……!？」

『誰だったか? 殺した癖に、冷たいねえ。……お前には俺の名前、言ってなかったっけか?……んじゃあ、改めて自己紹介だな』

前世界において、人類最後の切り札。

セイバーを抱えながら、右手に光を宿した青年は告げる。

『サルバドール・アnimスファイア。すまんが苗字で呼ばれると色々重いから、サルバドールかサルさんって呼べ。オーケーか、ルーラー?』  
『うっ、マスター……』

『お前……こんなにボロボロになっちまって。……一体、誰にやられたんだ……』

「マスター。マスターのなんか赤いヤツを発する剣にやられた」



『……』

「……」

『証拠隠滅！』

「うぎゃ！」

当て身で沈んだセイバーを寝かせ、ルーラーに振り向く。

『貴様ア!! セイバーをよくも!! 許さんぞ!!』

「ふざけるな……! 貴様みたいな連中に聖杯は渡さない! 俺が人類を導く!!」

『……ふう、夢はいつか醒めるものだけ、ルーラー。夜明けが来たら、人は目覚めなきやならねえ。楽しく行こうぜ』

「ほざけ!!」

ルーラーとサルバドールの決戦。

その火蓋が遂に落とされた。

## 黎明の腕を持つ男 その一

サルバドールには残された力はない。

ギルガメツシュに自身の奥義、霊装投影を繰り出した挙句、その後の殴り合い。

スカサハ戦では、脚が疲労を訴えるまで全力で動き回って翻弄し、真名解放もない一時的に行った乖離剣エアの展開は、疲労が蓄積していた全身をさらに痛めつける結果となった。

結果的には、それがセイバーをいつのまにか救う事になっていたのだから驚きではあったが。

ルーラーにとって、サルバドールの相手こそやりづらいものはない。

サーヴァントではなく、英雄でない。

サーヴァントの調停を務めるクラスである自分には、実力行使でしか彼を止められない。

ましては、彼がどんな方法で召喚した彼らを倒したのかなど、想像が出来ない。

それ程に、ルーラーにはサルバドールの情報がない。

ルーラーのスキルである『真名看破』は、あらゆる英霊の真名を知ることが出来る。しかし、そんなものがマスターであるサルバドールには通用しない。

だが、それだけだ。

ルーラーは目の前の敵を睨みつける。

もう、お前に用はない。

消える。

『睨みつけてるヒマがあんなら、攻撃の手を緩めんじゃねえ!!』

サルバドールが挑発気味に唾を飛ばし、日本刀を掻い潜って拳を叩

きつける。たたらを踏むルーラーに追撃を掛けるべく迫るが、刀を横薙ぎされたために避ける事が出来ないと判断、咄嗟に後ろに下がった。

「なんなんだ……！ お前は……！」

サーヴァントに生身で肉薄するサルバドールに、そう吐き捨てる。

『何の変哲のない、ただのカルデアマスターなんだが。……といっても、世界を救ったぐらいしかやってねえけど』

「貴様が……!?!」

『驚いた？ こんなんでも救えるんだぜ。まあ、俺一人ならのたれ死んで終わるのがオチだがな!!』

『セイバー！ 大丈夫!?!』

「うう……。マスター、か？」

藤丸立香が、上空から赤のランサーに抱えられながら降り、セイバーに駆け寄る。

セイバーの安否を心配する藤丸立香にランサーが口を挟んだ。

「マスター。ここいらの敵が城が崩れた衝撃から立ち直り始めたようだ。」

「すまないが、俺は辺りの雑魚を掃討しよう」

『ランサー。サルさんの救援には行けない?』

「魔力はアルジュナとの戦いで、ほぼ全て使い切ってしまった。今も、現界するのがやっとでな。このままの俺では力不足だ」

「アルジュナ……。お前が以前言っていた、宿敵か……」

「そうだセイバー。……なんの因果か、こうして戦う事が出来た。俺はつくづく幸運な男だろう。……本来のマスターの方は、マスター。お前がなんとかするべきだ」

『……え？ ランサー、どういう事……』

問いを投げる間も無く、ランサーは神槍を持って走っていった。

「ええい、不敬が!! 陳腐な石扉が我の前に立つか!! 貴様らが幾ら集まろうと、我が宝物庫よりも劣らぬ事などないわ!!」

《王の財宝》ツ!!」

「……この腕、数が多いな……! 我が弓でも……いや、捉えきる。この程度で時間を取られるならば、私はあの男に勝てはしない……! 一人たりとも!!」

「何の事はない。また儂を殺せぬ。それだけの事か、それとも……。良いだろう。手加減する余裕があるのなら、後で彼奴をこの槍で刺すまで。それとだ……儂にも扉には一つ、覚えがあるぞ……?」

「けっ、あの野郎……。俺ごと吹き飛ばしやがったな。後で心臓に穿ってやる、あの元腕野郎。……まずは目の前の腕共で憂さ晴らしと行くかねえ!!」

そこで藤丸立香は見た。

味方ではなかったサーヴァント達が、それぞれの思いで共に戦ってくれている。

金色のサーヴァント。

白い服を纏った黒い肌のサーヴァント。

紅い槍を二本持つ、女性のサーヴァント。

初めてこの世界に来た時に会った、青タイトのサーヴァント。

そして、ランサー。

逸話なども知らない、けれども頼もしい彼らがただ一つ、ルーラーとサルバドールの戦いを邪魔させないように足止めをしてきている。

あつ、ランサーが黒人のサーヴァントに近づいた。

……なんか話してる。

ん? 二人が戦い始めた。

多分、見間違いだらう。完璧に協力し合う展開ではなかったのか。早速の仲間割れなんて起きてない。藤丸立香は即座にそう思い込んだ。

『……セイバー』

「どうした、マスター」

『サルさんを助けたい。頼みたい事がある』

「なんだ……!? それは!？」

『ギリギリだが……! やらせてもらおうっ……!』  
《フル・トレース・オン》  
《霊装投影開始》  
ツ

## 黎明の腕を持つ男 その二

サルバドールの体に電流のようなものが走る。その魔力の奔流はやがて、体外に稲妻のようなものが放出される。

体内と融合しているカルデアスに、世界との照合を要求。受理。

あらゆる歴史への観測を制限。

魔力供給量減衰。よって、近代過去の歴史のみを観測。

人物指定、衛宮士郎。

観測、及び情報提示。

『フル・トレース・オン  
《霊装投影開始》 ツ!! 』

基本骨子、カルデアスに情報提示を要求。

構成材質、カルデアスに一任。

憑依経験、要らず。

最小限の魔力で戦闘可能なレベルの投影を行う。

投影するのは、かつて共に戦った赤い外套の正義の味方、その原点とも言える人物。

その正義の味方は近代に生きていながら、英霊となる頃には今よりも未来であるという。しかし、近代の英雄という点で彼以外の英雄を知らない。

カルデアスにとって現代に近い時代の観測ならば神代や未来よりも少ない魔力で運用出来る。

しかし、当然英雄になる前の彼を投影するのだから、未熟である。だが、それでもいい。

後は、技量を以って目の前の敵を越えればいい話だ。

生憎、英雄となった正義の味方から、戦い方は既に叩き込まれてい

る。

『トレース・オン  
投影、開始ッ!!』

「…………ッ!?!」

ルーラーに向かつて駆けながら、かの少年の詠唱——正義の味方から借り受けた一小節のオリジナルを口ずさむ。

手に呼び起こすもの。決まっている。

その夫婦剣の名は、干将と莫耶。

陰陽を模した二つの短剣をその両手に顕現させ、ルーラーに斬りかかる。

『はあー!』

「くっ! お前は…………!?!」

『どうした!?! 雰囲気が変わったように見えるかい!?! こちとら、魔力がそんなにないから能力の一部しか投影出来てないがな!!』

「投影…………だと…………!?! まさか、他人の人格を投影したのか!?!」

『ご名答ッ!! 当てた褒美だ、死に去らせ!!』

中華の夫婦剣と日本刀がぶつかり合い、時折火花を散らす。

天草の持つている『三池典太』と、サルバドールの『干将・莫耶』。

二つとも業物でありながらも神秘性は五分であり、今までの経験が鍵を握る戦いである。

そのため、優位に立ったのは…………サルバドールである。

投影の影響により、目の色が翡翠から琥珀に変わったサルバドールは二刀の基本的な戦法、片方で受け止めてからもう片方で斬るという二刀の利点を存分に活かしていた。

ルーラーはその戦い方を悟ってから、距離を離し始める。日本刀の方が夫婦剣よりも射程距離が長いいため、一方的に攻撃出来る距離を測り出したのだ。

投擲された黒鍵に対し、サルバドールは、『干将・莫耶』をそれぞれ投げつける事で軌道を逸らすか弾く。術式によって再度狙われたとしても、すぐに投影で贗作の剣を用意、そのままもう一度弾き返した。

『うおおあああ!!』

「負けるかあ!!」

奇しくも、二人のシロウがぶつかり合う形となったこの戦い。

藤丸立香は静かに機を見る。

先程、セイバーに何の力にもなれなかった。そんな過ちは二度も繰り返したくない。

静かに、両手で持っている手に力を込める。

不意に、藤丸立香は動き出した。

ルーラーとサルバドールの剣戟は収まるところを知らず、より苛烈にエスカレートしていく。

互いにかすり傷が増えるなか、遂に勝機が光る。

ルーラーの方に。

理由は明白。サルバドールの持っていた夫婦剣の耐久が限界を迎え、呆気なく砕け散ったからである。

その隙を逃すルーラーではなく、そのまま日本刀で横薙ぎにする。それに対してサルバドールはもう一つの短剣を用いて耐えるも、その短剣にすら罅が入っていた。

投影し融合したら身体での、さらなる投影である。

どんなに正確な投影魔術でも、劣化品になるのは当然の事ではあった。

しかし、彼がまともに打ち合える方法は最早これしかなく、これですら勝利を掴むには届かない。

「もらった……!!」

『……!?!』

だが、それはサルバドールが一人で戦っていたらの話。

『うわあああああ!!』



サルバドールが身体を横に傾ける。その隙間から、藤丸立香が現れた。

藤丸立香の両手に持った軍神の剣は、ルーラーの胴体を捉え。

考えてもいなかったマスターからの奇襲は、ルーラーの胴体を刀身が貫く事で、やっと実ったマスターの勇气である。

「ぐう……!? こいつ、……」

ルーラーがそう言っつて、藤丸立香に注意を逸らした。

故の、一分の隙。

それを逃す人間は、目の前にいない。

『縮地……!』

「……っ!? しま……!?!」

『一気五打・正拳突きイ!!』

一息の間に繰り返される五連撃が、ルーラーを背後の瓦礫の山まで吹き飛ばしていった。

## 黎明の腕を持つ男 その三

『オラア!!』

ルーラーの頬に放たれた拳は命中し、そのまま後方に吹き飛んでいった。

『……やりましたね、サルさん!』

藤丸立香がサルバドールにそのような声をかけ、笑みを見せた。しかし、サルバドールはルーラーの方を見ながら警戒を解かない様子を見て、藤丸立香も訝しんだ。

『……どうしました?』

『……さあな。だが、さつきから嫌な予感がする』

サルバドールは、自身の直感には自信がある。

ルーラーとの決着はついた。しかし、いつだってそうだ。

後ろには想像も出来ない敵が潜んでいるのがこれまでの旅であった。その今までの経験がこの状況に違和感を覚えていた。

慎重に、サルバドールはルーラーに近づいていった。

「うっ……ぐあ……」

『ほら、さつきと聖杯を返せ。テメエの願いだろうと上書きしてやるからよ』

『……無駄だ。我が願いは叶えられる。もう、どうにも出来ないぞ』

『願い……? そういや、人類の救済、だったよな?……待てよ、なら立香に何かしらの変化が起きてもいいはずだ』

「……なんだと?」

『聖杯が願いを叶えない? それはおかしい。なら、ルーラーが叶うと確信する要素がないからだ。……考えろ、他に何の可能性がある?……いや、待て、そもそもこの聖杯の……特に魔力の出処も怪しいぞ。俺達が使っている聖杯は本物なのか……!?!』

「貴方……! まさか!!」

『まだ終わっていない。この世界には何かがある!!』

空に上がった聖杯。いつのまにかルーラーと切り離されていたソレは、次第に怪しく光り始める。

「なんだ……?」

呟くセイバーとは対照的に、警戒のために臨戦態勢をとる赤のランサー。

黒い弓兵と黄金のサーヴァントもただ見ているだけではなく、僅かに目を細めて、その場を動かない。

聖杯の光が不意に、黒く染まり始める。

『おい、ルーラー? もしかして、コレも人類の救済とやらに必要な行程?』

「……そんな、はずは……!」

『オーケー、取り敢えず後回しにしよう。まずは止めるか?』

サルバドールが意気込んだ瞬間。

辺りに聖杯から奔流が流れ出す。物理的な魔力の流動という形となり、それに直撃したサルバドールは押されるように飛ばされた。

『な、なんだあ……?!……ぐえっ!』

「な、なんだ?!……コレは!」

後ろで転がるサルバドールとは反対に、ルーラーは魔力の流れに包み込まれる。既に満身創痍であるルーラーに抵抗する力はない。

ルーラーはそのまま中心に持って行かれ、徐々に取り込まれ始めた。

「グツ……!!? ガアアアア……!!」

『ルーラーを吸収するつもりか!? やらせるな、

《友の名を刻んだ鎖》ツ!!』

サルバドールはルーラーの事態を理解したと同時に、英雄王から渡された鎖を走らせる。

友の名を刻んだ鎖は応えるように、ルーラーの腰や腕に巻きつき一気に引っ張り上げて引き離した。

『よつと』

気絶しているようなので、ルーラーはそのまま適当な所に置いておく。

しかし、その間にも黒き奔流が捻れ、あり得ざる形へ変貌していく。

『おいおい、こりゃ……』

目の前に現れたのは、巨大な腕。

黎明をも破壊する、邪悪の神腕は唸りをあげた。

『もしかして、今まで殺された腕の恨み……とか？　笑えねえよこの野郎。どんだけ死んでると思ってるんだ』

腕の指の先から、微小な炎弾が無数に放出される。

「マスター！」

『問題ねえ!!　全員で立香を守つといてくれ!!』

セイバーがサルバドールに叫ぶが、当人はそうやって腕に接近を始める。

一気にかたをつけようと、干将・莫耶を投影。そのまま斬り込んだ。

刹那、サルバドールが右手に持っていた剣が彼方へ飛んで行った。

目を見開きながら、サルバドールは驚愕した。

自分が今、浮いている。

目の前の腕に浮かさされているのが分かる。だが、足掻こうと暴れても全く動けずに上昇していった。

そして、目の前の小さな太陽が映る程にまで空へ上がり。

小さな太陽は。

サルバドールに向かって衝突した。

『うおおおああ!!』

一切逃げ場がない状態での、自身を燃やし尽くす一撃。

喉が潰れるぐらいの雄叫びをあげて、サルバドールは右手を前にかざした。

『《熾<sup>ロ!</sup>天覆<sup>ア</sup>う七つの円環<sup>イ</sup>》ツ!!』

咄嗟に唱えた宝具名によって、目の前に四つの花卉が咲き誇った。

展開した盾は太陽を受け止めるが、浮いた状態というのは踏み込みがつかない。

粉々に砕け散り、恒星の爆発する事によって完全に崩壊した時。

爆発の衝撃によって、サルバドールは血を撒き散らしながら遠くの森まで放物線をなぞって飛んで行ったきり、見えなくなった。

「マスタアアアア!!」

セイバーが悲痛の念を隠しもせずに叫ぶ。

その慟哭には静寂しか帰ってこなかった。

夜が更ける。悪夢は呪う。

目が覚めた。

初めて、知らない天井だ……なんて思った気がする。

カルデアの医務室だという事は分かっている。

だが、こうしてこの景色を見られるとは思わなかった。

右手を動かす。しっかり動く。

本来の自分の肌と同じ色が、桃色の健康そうな爪も、全て元通りとなっていた。

敢えて言うなら、声が掠れているぐらいだろうか。喋ろうとしても少し汚い声で響いてしまい、他の人にはなんて言ったのかよく聞かないと分かりづらいと思う。

さらには、身体が怠い。

あんな事があったからか、又はそれ自体が原因か。

消化器官はまるで中身が全て空っぽの様に感じる。空腹過ぎて、反対に食欲が湧かない。

「やあ、お目覚めかい?」

見知った……とは言わずとも、知っている顔が覗いていた。

カルデア召喚成功例第2号のサーヴァント。万能の天才その人。

いよいよ、先程までの悪夢が……いや、本当に夢の様に思える。

あんな事、私の身に起きるはずがない、と。

だが、それはあり得ない。悪夢から逃避するだけでは、私は助からなかったのだから。

遅れて、万能の人に目を合わせる。

すると、彼女……もとい、彼が話し出した。

「一応、彼のやっていた事は荒唐無稽としか言えないが、それでも事実である限りはそう捉えなければならぬ。少なくとも君はカルデアに融合していた」

「……」

無言。声を荒げて意見する事はない。

既に、彼がした事は認識している。今更驚く事はない。

「確認をさせてもらいたい。オルガマリー・アニムスファイア。今、貴女は本当に貴女なのかい？」

「……………ほっ、……………っ。……………ええ」

咳をして喉を整え、辛うじていつもの自分らしい声を捻り出す。

「……………分かった。取り敢えず、報告だ。君はレフにカルデアスに入れられ、本来ならカルデアスに分解されていたところを彼が何らかの力で君を救い、それどころか受肉するという万々歳な状況になっている。しかし、それはどういう事か……………？」

「……………」

「今、彼の身体を調べている最中だ。彼の方は精神的疲労が強く、まだ目覚めていない。調べるのには都合がいいが、その分、彼が意図して隠していた部分が曝け出されているに等しい。謝罪は目覚めた後にするつもりさ。……………だけど、君を救い出せた手掛かりは見つかった。彼の起源が関係していたよ」

むしろ、私が声を張り上げるとしたらこの後だ。

「彼の起源は《融合》。……………つまり、なんだその。……………結果はどうあれ、過程では……………君と彼……………藤丸立香君で仲良く合体（意味深）していた事になる」

「いやああああ!!」

私は今度こそ絶叫した。

やはりそうなの……………!

なんか、感覚でそれっぽい事は起きてたけども……………!

なんか、助かったのに助かった気がしない! どういうつもりか聞き出してやるわ!

ちなみにこの後、純潔はどうなっているのか、と聞いてきた変態に

蹴りを食らわせた。

彼がまだ、藤丸立香サルバドールだった頃の話。

誰かの心の中に映った、走馬灯であった。

「そういえば、君たちがカルデアスから戻った時、二人とも全裸だったけど何をしてたのかな？」

「何もしてないからー。本当にしてないからあ!!」

微笑ましい景色は、薄く滲んで消えていった。

「なんだありや……」

険しい顔をして、青いランサーは巨大な腕を見てそう呟いた。

真つ先にスカサハとランサーが率先して、狩りにも等しい露払いをしていた頃。突然地響きの様な揺れが起きたと錯覚して周りを見回してみれば、何やら強大な力を持った腕か地面から生えて来ている。

状況の変化を悟った青いランサーは戦場の中心に駆け抜け、先を阻む僅かな木々も関係なしに速度を上げていった。

ふと、後ろを見るとスカサハが付いてきている。師である彼女も察している様らしい、ランサーは思った。

そして、目的地に着くや否や状況の説明を求めてセイバーな近づいた途端。

青いランサーと同じぐらいの大きさの何かが青いランサーのすぐ横掠めた。

後ろには一本道が出来ており、先程通った木々が衝撃でほとんど形を成していない。かなり遠くまで飛ばされていった様だ。

「マスター!!」

そう叫んだセイバーによって、流石のランサーも眼の色を変えた。  
(坊主の事か……!? いや、あそこに坊主はいる。なら、アイツがやら



れたのか……!?)

顔には出さないが、青いランサーは驚愕していた。

ルーラーと対峙する前に、2対1ではあるがスカサハと拳や槍を交えたのには感嘆の声をあげていたばかりである。

最も、その後にエアで城ごと吹き飛んだのだが。

今はそんな事どうでもいい、とランサーは目の前の腕を睨みつけた。

黎明の巨腕。

彼らは元々、普通の腕だった。

変わらず特異点とも分からない場所で人知れず現れ、その身の結晶の為にあらゆるサーヴァントに狩り尽くされる存在であったのは否定出来ない。

しかし、その頃には腕に自我は存在しなかった。

だが、例外が現れた。サルバドールの精神が宿った腕という存在である。

彼が発する言葉という信号。それがやがて、個々の感性を自覚させ、自我をめばえさせるとキツカケになった。

そして、感情を持った彼らが含んだものは、怨念の類いであった。

その狂気はやがて膨大なものとなり、この世界でサルバドールの聖杯によって覚醒した。

巨腕は既にこの小さな世界を文字通り手中に収めている。

所有者が腕なのに、ルーラーの願いが叶えられる道理はない。

しかし、巨腕はその願いを否定しない。むしろ新たな閃きを与えた悪手であった。

巨腕はルーラーのその願いを曲解した。

よって、人類の救済を望んだ声は、巨腕は絶対の不死を手に入れるに至る道しるべになった。

それが目の前の邪悪な存在である。  
既にサーヴァントは敵に非ず。

サーヴァントに倒され続けた雑魚は進化し、サーヴァントに対して  
最上の耐性を手に入れた上で、彼らの前に立ちはだかった。

しかし、例外は存在する。

藤丸立香は無意識に、セイバーから借りた軍神の剣を握りしめてい  
た。

## 光の勇者、来光のしるべ その1

藤丸立香は、呆然と立ち尽くしていた。

淡い期待が何処かにあつたのだ。サルバドールなら、もしくはは。と。

巨大な敵が目の前に現れたとしても、サーヴァントとまともに打ち合い、勝利する彼なら勝てると思っていた。

そんなモノは、彼の呆気なく散ったという衝撃により崩れ去った。

「しっかりしろ、マスター！」

そんなセイバーの声は届かない。

その間にも、邪悪な巨腕は世界を覆う手を進めていく。

ルーラーを一時的に取り込んだ時、聖杯は巨腕に取り込まれた。

世界を救うにせよ、元の世界に戻るにせよ。藤丸立香は戦わなければならない。

巨腕から、光が空に走った。

その光は青空を侵食し、一面が闇となった。

巨腕が呼び寄せたのか、本来ならいるはずのない骸骨兵を始めとした敵が地面から姿を見せていく。

その内の一体が飛び出し、藤丸立香に向け剣を向ける。

未だ放心状態だった藤丸立香を助ける為に、サーヴァント達が駆けたのは当然の動きであつたが。

しかし、それよりも先に。

藤丸立香が、覚悟を決めた。

身体の向きを変える最小限の動きで凶刃を避け、手に持っていた軍神の剣をスケルトンに突き立てる。

『おおお!!』

その雄叫びは、確実に自身を奮い立たせ。

目の前の敵の胴体を断ち切った。

力なく倒れる下半身に見向きもせず、藤丸立香は号令を放つ。

それは必然的な才能である。

サルバドールと名乗る藤丸立香先駆者という人類最後のマスターがいて。

藤丸立香後に続く者という自分がいる。

過程がどうあれ、その道筋に違いはなく。

その才能は因果逆転を現すように。

彼の眼には、今は小さき希望の残火を抱いていた。

『ごめん、もう大丈夫』

その言葉は藤丸立香が発したもののか。

先程までの彼とは何かが変わっていた。

『みんなで、倒そう』

その言葉に応えるように、全てのサーヴァントが巨腕を見据える。

「あの腕は私の宝剣すら貫く事を許さん。この屈辱は万死に値するな？」

「お前がそう願うなら、俺は応えるまでだ」

「いいでしょう。我が力を貴方に」

「さて、暴れるとするかねえ……!!」

「奴ら有象無象に遅れは取らんが……さて、儂を殺せるか？」

「行こう、マスター。あの文明を破壊する」

「私も、加わってもよろしいですか？」

『……ルーラー。……力を貸してくれ』

「よろしい。我が悲願を足蹴にした報いは、身をもって知ってもらい

ましようか」

「雑種。奴にはサーヴァントの攻撃は通じん。そこな犬の槍もアレには刺さりはしても実質当たってはおらん。……いや、何時もの事であったか?」

「聞こえてんぞテメエ。……なんならテメエからやってやろうか?」

「五月蠅いぞ犬。そこの女、師というなら躡ぐらしいしておけ。なっとなつておらんではないか」

「確かに、少々大人しいな。全く、あれほど牙を研いでおけと言っていたのだがな……」

「この空の呪いの所為か、魔力が体外に放出されて霧散していく。消耗戦となると厳しいかと」

「なるほどな。これでは俺たちに打つ手はない。マスター次第といったところか」

「それならば、私たちは援護が妥当ですね」

「……英雄王。奴からの攻撃はお前の盾で防げるか?」

「私の宝物庫をなんだと思ってる。あの程度の焔を防ぐものも持ち合わせているに決まっているだろう」

「ならば、その他の者は各自で露払いですね。我が弓に懸けて、敵を近づけさせません」

「承知した」

「いいだろう」

「行くぜ」

「マスター。……私が護ろう」

セイバーはそう言って足元にあった木の棒を拾い、もう一つの軍神の剣に変化させた。

『なら、二人で固まって背中を守りあう形の消耗戦を。頑張つて倒すから、それまで耐えて!』

藤丸立香が走り出したと同時に、全サーヴァントがそれに追従す

る。

無数の敵軍勢対、藤丸立香率いるサーヴァント軍団の戦いの火蓋が切られた。

「おい、まずは坊主を送り届けるぞ！ 話はそこからだ！」

そう言ったのは青いランサー。

言い終わると同時に突如、正面から砲撃が届く。

『魔力弾……!?!』

「城にいた扉の攻撃か……!」

「扉だと……? ふん、貴様らに格を見せてやろう」

「……面白い、ならこれはどうだ？」

「ゲート・オプ  
《王》の———」

「ゲート・オプ  
《死溢るる》———」

「バビロン  
《財宝》ツ!!」

「《魔境への門》ツ!!」

その扉は後方から、数多の宝具が山なりになぞって飛来し。

その扉は上空にて門が開き、尽くを吸い込んでいく。

『両端から襲ってくる腕の集団を何とかするんだ!!』

藤丸立香の声に、二人が応える。

「ライトハンド・セーフティシャットダウン  
右腕・空間遮断———!」

「シヴァの怒りを以って、汝らの命をここで断つ———!」

「ライトハンド・ビッグクラッチ  
《右腕・零次収束》ツ!!」

「《破壊神の手翳》ツ!!」

その腕は、右腕を犠牲に全てを飲み込むルーラーの奥の手。

その腕は、問答無用の強制解脱の光。

藤丸立香より先に先陣を切るは、二人の槍兵。

「何だろぅが関係ねえ。まとめて喰らいなあ!!」

「頭上注意だ。悪く思え」

二人は異なる集団に自身の槍を放った。

「《突<sup>ゲ</sup>き穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>翔<sup>ル</sup>の槍<sup>ク</sup>》 ツ!!」

「《梵<sup>ブラフ</sup>天<sup>マース</sup>よ、我<sup>ストラ</sup>を呪<sup>クン</sup>え》 ツ!!」

その投擲は、世界をも揺るがす一撃となつて異形の軍勢を容易く蹴散らした。

「命は壊さない。その文明を破壊する——!」

『頼むぞ、セイバー!』

「《軍<sup>フォトン</sup>神<sup>レイ</sup>の劍》 ツ!!」

セイバーが宝具を展開して先行。そのすぐ後ろを藤丸立香は走り抜ける。

あらゆるものを破壊する事が出来る軍神の劍の宝具は、降り注ぐような敵の猛攻をも遮る。

後は、後ろのサーヴァントに任せるしかない。

自分は自分のやるべきことをやる。

『俺が……倒す!』

小さな世界の果て。

仰向けに倒れている青年は、未だ動かない。  
青年は目を閉じており、まるで眠るように意識を沈ませていた。

僅かに、右手が動いた。



## 光の勇者、来光のしるべ その2

その結晶に、光は収束されていく。

邪悪な巨腕の掌に収まる太陽がやがて黒に侵食されていく。

そんな変化を見せる巨腕に向かって、藤丸立香とセイバーが突撃する。

サルさんを倒した時とは違う攻撃なら、何を仕掛けて来るかは分からない。いつでも対処出来るように……！

そう考えた藤丸立香はセイバーの《フォトン・レイ軍神の剣》のすぐ後ろを走りながらも、自分のカルデア礼装の《緊急回避》を使用する準備をする為に袖に目をやる。

その黒球が放たれる。しかし、予想に反してそれは上空に飛んで行った。

直接攻撃の類ではなかったことに安堵する藤丸立香ではあったが、すぐに思考を切り替える。

こちらへの牽制ではなかった。なら、今の行動に何の意味があるんだ？

考えられる事として、まずは自分たちを追い詰める一手である事は確実。

となれば、直接的な攻撃か間接的な攻撃か。だが、黒球が前者のような直接的な魔力弾だと仮定すると、セイバーの剣には『あらゆるものを破壊出来る』特性がある。それは宝具の使用中でも付随するため、魔力弾そのものを砕いて一蹴する事が出来るだろう。

だが、これから自分がその特性を利用して、自分自身の手で軍神の剣を使って戦う事が分からない巨腕じゃない。

さらに言えば、あの大きい腕からしてみればこちらに盾の宝具があるかは分からない筈だ。防がれると分かっている攻撃を策もなしに放つか……？

なら、かなりの確率であの黒球は間接的な弱体化攻撃だろう。とな

ると、具体的な効果が恐ろしい。万が一、セイバー達と相性の悪い弱体化が起きてしまったら、マスターである自分だけでは対処出来ない！

黒球が一定の高度に到達した途端、そこで急停止した。

最初は遠いからか何の変化も感じなかったが、しばらく経った頃に最悪の結果を招いた。

セイバーの放った宝具は、巨腕に剣先が突き刺さってそれまでであった。改めて、サーヴァントの攻撃が通用しない、又は極限まで威力を軽減される奴の肉体には宝具すらも通さない。

巨腕の血脈の部分から電流らしきものがながれ、周囲に近づかせまいと、巨腕は体外からその電気のようなものを放出された。

セイバーがそれを見切り、藤丸立香を担いで少し後退する。

藤丸立香とセイバー。二人で軍神の剣を向けて睨みつける。

とにかく、これからセイバーは援護に回り、サーヴァントでないマスターの攻撃が通じるかを確かめるように動く。まだ確証こそないものの、確信はあった。

この怨念に、マスターへの恨みは含まれていないのでは……？

そんな直感を藤丸立香は感じていた。

しかし、ここで先程上空に飛んで行った黒球がその正体を現す。

気づいたのはセイバーだった。

(……雨?)

身体を打つものに気付くにはセイバーでも遅れた。

先程まで、雨が降るような環境ではなく、この世界に雨がまず殆どない。今まで過ごしてきた中で雨が降ったのは数えられるほどのない。だから、このタイミングで降るのはおかしい、そう感じた。

それに、この雨水……黒い……!?

瞬間、藤丸立香に伝えようと口を開く前に、その場に崩れ落ちた。  
『…………ツ!? セイバー!!』

そして、それはセイバーだけに起こった事ではなく。  
後ろを任せたはずの他のサーヴァントにも同じ状況が起こってしまっていた。

## 光の勇者、来光のしるべ その3

黒く透明な雨に打たれ、倒れたセイバーが剣を杖代わりにして起き上がる。

藤丸立香には何が起きたのかが、理解出来なかった。

慌てて駆け寄り、セイバーを襲おうとする雑魚敵の掃討を担う。

幸い、目の前の巨腕は攻撃頻度が低いらしい。また掌に魔力を収束させているのは分かるが、時間が必要のようだ。

しかし、セイバーが食らったのは毒なのか……？ それにしては、自分に変化はない。

後に、藤丸立香自身に毒をはじめとした耐性が付いているため、本来ならマスターにも影響があるこの雨が効かない事が幸運ではある。

そうしている内に黒い雨もすぐに止むが、セイバーの様子は依然優れない。周りの敵を撃破し始めるが、その動きに先程までの機敏さは一切なかった。

『大丈夫!? セイバー!!』

「問題ない……と、言いたい……。今の雨のようなものはマズイらしい……! 相当に消耗してしまったようだ……!」

『何で……!?!』

「う、うぐつ、……あああ!!」

目に見えて苦しみ出したセイバーの肩に触れる藤丸立香。その時、背中から隆起するものを見た。

それはセイバーの皮膚を波打たせ、ゆつくりと全貌を見せるように体外に放出される。しかし、それ自体は生々しいものではなく、比較するのはおこがましいとは思いますが、あの黄金のサーヴァントが宝剣を出す時のような光景に似ている気がした。

彼女から出てきたもの、それは結晶である。

ただし、見た事こそあるが、サーヴァントから出て来るものとしてはあり得ないもの。

『……それは、黎明の腕を倒した時に地面に転がるアレ……!?!』

「の、ようだ……！ ……これはどう見ても種火だろう。……っ、どうやらアレは種火を作る素の成分のようだ……！ 体内で強制的に生成される上に、かなりの魔力を持って行かれる……！」

『待って!? さっきの雨は広範囲で降ってた！ なら、他のみんなも……!!』

「可能性は高い……！ 幸い、私から生成された結晶は白くてまだ小さいが、魔力を持っているなら金色の種火が生成されると共に、私以上の魔力を持って行かれるぞ！」

「はあ……、チクシヨウ。槍すらマトモに持てねえってのは、つれえな……」

「どうしたセタンタ。身体が鈍いぞ？」

ケルトの師弟が互いに背を預け、そう零した。

既に2人の手には槍は握られていない。槍を現界させる魔力すら惜しいと悟った当人たちが徒手空拳に切り替えていた。

「師匠はなんで魔力奪われたのに元気なんだよ。俺よりも魔力持って行かれただろうが」

「魔力不足だろうとなんだだろうと、戦い抜かねばつまらんだろう？」

「はっ、まったくそうだなあ!! だがよ、アンタも随分と鈍くなってるぜ？」

溢れ出るスケルトンの頭蓋を蹴り抜きながら、青いランサーが受け答える。

周りをみれば、全員が似たような構図であり。赤のランサーと黒人のアーチャーが背中合わせで迎撃していたり、特に黄金のサーヴァントは魔力が奪われていると察したや否や、耐久性の高い宝剣一振りを事前に取り出し近接戦闘を行う程である。ちなみに、一番魔力を奪われたのも黄金のサーヴァントである。

「ええいおのれ、大人しく自決でもしているがいいっ!!」

悪態をつきながらも応戦するサーヴァント達。

しかし、宝具による面での攻撃が魔力不足で使用不能になった今、無理に使おうとすれば自身が消滅しかねない。

消滅覚悟の攻撃をしたところで事態の好転は難しいだろう。

黄金のサーヴァントのすぐ近くでは、負傷した右手で日本刀を振り下ろすルーラーの姿もあるが、こちらもいっばいいっばいのように中々に苦しい戦いになっている。

藤丸立香が巨腕に挑もうと近づこうとしても、セイバーに気を取られて巨腕の元に向かえない。単純にこれは甘さであるが、そのせいで突撃の奇襲要素が意味をなさなくなり、現在不利な状況に陥っている。だが、藤丸立香1人で立ち向かったところで無謀であり、結局のところ、雨が降る前に決着はつけるべきだったのだろう。

ついに、まともな動けなくなったセイバーが悪態をつきながらも、周囲から守ってくれている藤丸立香に、「自分は大丈夫であることを伝えたい」。勿論大丈夫ではないが、そちらの方がまだ勝てる要素はある。それでも、サルバドールのように無力化された後にやられなければの話だ。今はそれすら告げる事も出来ない。

徐々に、バラバラだったサーヴァント全員がセイバーの地点まで後退してきた。

そしてタイミングの悪い事に、巨腕のエネルギーが溜まってしまい、サルバドールを吹き飛ばした小規模太陽が放出された。

「皆さん、衝撃に備えてください!!」

ルーラーが黒鍵を光球に投げ付け、比較的遠いところで爆発を誘発させた。それでも、威力の高い光球は全員を巻き込んだ。

全員が被害が少なくなる様に動き、藤丸立香は動けないセイバーを庇って共に転がっていった。

瓦礫の中での擦れは擦り傷だけでなく、尖った石に刺さったり大きな石に思いつきり身体を叩きつける事もある。

城の端まで跳ねながらも、地面を背中で滑った藤丸立香は背中に受けたダメージによって動けない程度には重傷だが、藤丸立香は自分の

身体に鞭を打って上半身だけでも起き上がらせる。

近くはないが、遠くもない敵。

他のサーヴァントのみんなも衝撃を食らって吹き飛んではいたものの、未だに闘志の炎は消えない。

セイバーも迷惑をかけたとばかりに立ち上がるが、かなりフラついている。

ふと気づいた。周りに魔力の粒子が微かに見える。

特異点Fで見た、シャドウサーヴァントが消失する際に変化して霧散するもの。

つまり、至るところで……サーヴァントの近くでも見えるソレは、自分達に対抗できるチカラがない事を明確に示している。藤丸立香はそう思い、拳を強く握る。

もう。……ダメなのか。

邪悪な巨腕は収束させたものを再度黒く変色させ、上空に撃ち放った。

魔力を奪い、種火の結晶を強制的に生成させる雨。

青いランサーが駆け、黒肌のアーチャーが射るために構えるが、どちらも近くの敵に妨害される。

その黒い球は徐々に破裂せんと膨らみ。

その手前に影が飛び出した。

その青年は。

『北欧の大神』

自分によく似た。

『知恵の果实』

右手が異形となりつつも、一時は右手が本体だった。

『そんなもんはどうでもいい』

もう一人の、藤丸立香。

『我が光、我が万能は、あらゆる奇跡を凌駕する——！』

「ふん、遅いわ……戯けめ」

『《黎明のとききたれり、ウオ其は夜明けを告げる者》モツ——↓！』

サルバドールが放った万能の光は黒い球と混ざり合い、何も存在しなかったかの様に消滅し、相殺した。



『藤丸立香。……一度だけだ』

目の前の青年が呟く。

小さくともそれは、藤丸立香にはつきりと聴こえた。

『俺を使ってみろ。——マスター』

## 黎明のときたれり、其は世界を照らす者

時間は数刻前まで遡る。

と言つても、俺が死にかけてっつーか気を失つてたつていうか……とにかく、割とやばかった時さ。

気が付いた、と言つたら厳密には違う。

俺だったら気付いてみんなにも言っていると思うが、俺は黎明の腕。

サルバドールという身体を聖杯で叶え、右手の中にある意識として眠っていた方の俺だ。

分かるか？　なんていうか……右手の意識と身体全体の意識は異なつてる、みたいな。そんな状況になつていた事を思い出していただけだろうか。

つまり、今気絶してる方の俺は今まで勝手に俺を強く握りしめ、あらゆる相手に向かつてぶん殴つていたはずだ。肉体としての俺にとつてはただの右ストレートかも知れないが、本体の腕である俺にとつては頭突きに等しい。

そんなん、見てるだけで痛々しいだろ!?　腕だけの存在である俺に痛覚がないから痛みはないけど、気付いたら「あ、ちよつと凹んでるわ」とか冗談じゃねえぞ!!

そんなわけで、覚醒したのは腕である俺だけ。

多分だけど、人間の身体の方の俺が覚醒すれば、自然と俺もまた腕の中に消えていくだろう。

まずは情報収集だ。俺には今までの状況が理解出来ていないからな。ルーラーにぶつ刺されて、うぎゃー、つてなつたぐらいやもん。覚えてるトコ。

というわけで、状況を知るために辺りを見回す。うわ、動きづらっ。肉体とくつついてるから、引つ張るように動かなきゃいけない。足に鎖を付けられてる気分だわ。めっちゃストレスやん、こんなん。

……って、えっ、何アレ？ でつかい俺？ 何、俺が相手なの？  
俺の負の感情とかが膨らんであんな感じになったん？ え、なんかご  
めんなさいっ！

かなり遠いけど、空間把握はお手の物だ。目がないから、自然とこ  
ういう事が出来る。……あつ、こつからだど豆粒みたいに小さく見え  
るが、藤丸クンとセイバー、ランサー、槍ニキ……なんでギルガメツ  
シユいるん？ 王の財宝ゲート・オブ・バビロン使えないのか知らないけど、王様が直々  
に剣を握って戦つとるわ。ウケる。

はっはっは。これが我ら黎明の腕の力じゃあ!!  
無惨にやられていくがいい!!

……。

……。

……。

まあ、でも。いつか俺は言つただろ？  
別に俺が死ぬ事は苦しくないんだ。なんてつたつて復活出来るし。  
サーヴァント達の事を知っている。人理の危機も知っている。  
そんな人間がどうして、殺しに来る彼らを恨めるだろうか。

そんな馬鹿がどうして。

サーヴァント達を蹴散らしたいと願うのか。

そんな事は断じて思った事がない。ならば、あの大きい腕は種族は同じであれど、敵だ。

それに、あいつを中心に世界に翳りが見えている。それはおかしい。

黎明とは、夜明けの意味を持つ言葉。

その矛盾だけでも、俺が黎明の腕として敵対するには十分だ。

なら、どうするか。

全然分らない。

少なくとも、こんな機動力クソ雑魚の今の状況では間違はなく足手まといだ。ロクに戦えもしない。

だったら、今寝てる方の俺を起こす方が断然いい。

早速起こすか。

おーい、起きろー。

……人が見たら目を疑うような光景かもしれん。なんせ気絶した人間がひたすら自分の腕で、自分の顔をビンタしているのだから。

起きないな。仕方ない。これでどうだ!!

『ウツ』

うわっ。一瞬ゴリラみたいな顔になった。ブサイクだなあ。

うーん、やっぱり金的もダメか。なんかもう、今コイツ白目剥いちやってるし。悪化したかも知れない……たぶん。

それにしても全然起きる気配がないなあ。どうするか……。

とうか！ 今気付いた！ コイツ魔力不足じゃん！ 確か、魔力不足になると身体的にもよくないなんて事はどこかで聴いたけど……。もしかして、だから目が覚めないのか？ それにしても、なんで魔力不足に……。そこまで魔力面はシヨボくはないし、わざわざ無茶をするような事もないぞ？

ん？ 俺からなんか出てきた。……結晶？ ってか、種火じゃねえか。なんでコイツが？

よく見ると、種火の魔力の内包量が分かる。コレのせいで魔力不足になってたのか。

どうするか。『融合』を使っても種火が身体にくっ付くだけで、中に存在する魔力は取り出せないし、これだけじゃなんとも……。

うおわっ!? 何!? 爆発!?

あのでっかい奴がなんかしたのか。

爆発したために飛んだ瓦礫や何かの破片が俺の周りにも散らばっていく。

いてっ。……ん？ これって……QP!? なんで魔力リソースがこんなところに……。あっ!!

もしかして、あの城の中……!?

「宝物庫の扉を開け」だったか？ の扉達がいたのか!?

そうだっ、これなら魔力リソースと種火を同時に取り込めばイける！

ふと、考える。

この世界に来て、セイバーやランサーと過ごした時間。

ちよつと今回の大騒ぎ。

楽しい事ばかりだった気がするけど。

『随分長い夢だったが……いつか目覚めるものだ』

小さな太陽の一つ一つが青く粒子化したQPとともに身体に取り

込まれていく。周辺全ての種火を吸い取った。

『敢えていうなら、レベル50までしか上がらなかったが。それでも、十分な強化だ』

右手にいる彼が俺に道を示したのだろうか、生憎今は眠ってしまった。お礼ぐらいは伝えたかったところだがなあ。

脚に力を入れて、ロケットのように飛翔する。

前方には、魔力不足の要因となった黒い球。

それに対し、相殺するための万能の宝具を放つ。

完全に回復した俺に隙はねえ。

今の俺なら。全力を尽くして、あの巨腕を屠ろう。

心配かけてすまないな。

これは詫びだ。

後ろにいるであろう後輩に凜として告げた。

『藤丸立香、一度だけだ。——俺を使ってみる、マスター』

旅の果てと、物語の始まり。その1

『あつ……ああ……!!』

藤丸立香の嗚咽が、辺りに響く。

それを聴いて、サルバドールは苦笑しながら振り返った。

『おいおい、なんだよ？ まるで死んだ奴が生き返ったかのような顔しやがって。ギリギリ生きてたからな!』

「マスター周りに充満しているこの光はなんだ……?」

『なんだ、つて……QPだよ。扉から出てきた魔力リソースが霧状になってるだけだ。コイツと一緒に種火を身体に取り込めたお陰で、結構強くなったぜ。より強くなるために必要な素材が欲しいけど、仕方ないね』

「何か言ったか?」

『いや、なんでもないぜセイバー』

そう言つて黄金のゲートから、ギルガメッシュから借り受けた乖離剣を取り出す。

『さて、戦う前に、だ。全員ほぼ満身創痍だろ？ 立香を通してお前らに魔力渡すぞ』

『えっ、全員とは契約してませんけど……』

『ん？ 一部野良サーヴァントか？ 6人ぐらい頑張ればなんとかなるだろ。ギルはアーチャーだから単独行動がある。あいつだけ無視しとけ』

『ほう……。我手ずから剣を振れというのか？ 死にたいようだな』

『殺意が唐突過ぎて草。……たまには良いだろ？ 慢心は王の素質なのかもしれないが、斬り合いすらまともに出来ないってのはお前自身として看過出来ないと思うんだが?』

「ふん、口の減らぬ奴よ。エアをここで奪い返しても良いのだぞ?」

「やっべ、それだけは勘弁。ちやちやと終わらせたいんだから使わせてよ」

軽口を叩きながら、パスから魔力を他のサーヴァントに回す。ギルガメッシュにはサルバドールが本人の許可を得たゲートから霊薬を

取り出して渡していた。

そして、サルバドールはサーヴァント達に声高く告げる。

『これより、あいつを倒す。だが、決着は俺がつける。お前らにはその為をチカラを借り受けたい』

乖離剣を持つ右手を前に突き出す。

すると、隣で藤丸立香が軍神の剣を同じ方向に向け、サーヴァント達も自分たちの得物を巨腕に向けた。

横に並んだ英雄達。それは夢を見たもの。

一斉に向けられた刃は、この悪夢に反旗を翻す一筋の希望である。

『いいか。聖杯を奪取したのちに全員退避しろ。退避したと同時に、エアに俺の宝具を使った最大解放の威力をぶつける！ それまで、アイツを雑魚諸共ボコボコにしてやるか!!』

『はいー!』

藤丸立香が大声で応えた。

それでこそ俺の後輩だな、とサルバドールははにかみながら前を見据えた。

巨腕を総大将に、あらゆる種類の敵がこちらに迫ってくる。

——それがどうした。こちらは一人一人が一騎当千、又は伝説の英雄達。魔力が潤沢な今、数を揃えた程度で英雄達がやられる訳がない。

これから始まるのは、藤丸立香にとっては最高の晴れ舞台。

『俺の最期の戦い、見せてやろうじゃねえの!』

そして、サルバドールにとって最後の見せ場である。



旅を果てと、物語の始まり。その2

『行くぞおー!』

サルバドールの号令が響き、それを合図としたサーヴァント達は、各々敵に向かっていった。

サルバドールと藤丸立香を残して。

正確には、藤丸立香も突撃しようとはしていた。

しかし、『行くぞお!』と言っておきながら全く微動だにしないサルバドールを見て疑問に思い、徐々に足が止まっていったのだ。

『あの……行かないんですか?』

『……………立香』

『ごめん、ちよっとお腹痛い。魔力の取り込み過ぎかも』

『ええっ?! 何言ってるんですか貴方!! 数分前までカツコいい事言ってた男の台詞じゃないでしょう!?!……それに、ただでさえ裸一貫の貴方がふぎけはじめたらこの作品がギャグとしてしか成り立たなく……』

『待て、悪かった。……冗談だからそれ以上はアカン。十分、分かったから』

『とにかく、その剣……エアでしたっけ? それで城を粉碎した時みたいに解放すれば……』

『それは無理だ。これは元々アイツの所有物で、宝具だ。サーヴァントの技であれ武器であれ、あのでっかい腕にはそれだけで耐性がかかるならこの剣も同様だ。確実に倒せるとは言えん。たとえ対界宝具でもな』

『……………そんない!』

『だから、ぶち当てるために今からちよっと細工をしなくっちゃあならない。だからこそ、あの英雄王直々にコレを俺は持たされたのさ。』

と言うわけですまない、しばらく集中するからその間守ってくれる？』

『僕がですか!? ……っ！ 早く終わらせてくださいよ!』

そう言つて、藤丸立香は軍神の剣を構えた、

『分かつてるさ。さて、———』

万を超える軍勢は、今も聖杯によつて量産され続けている。

しかし、そのほとんどを宝剣を射出する事で消し飛ばすのはギルガメッシュ。それが収納されている宝物庫には、人類の叡智であつたりあらゆる発明や作品の原典を保有する。

そして、この中で巨腕の攻撃に耐え得るであろう人物もこのギルガメッシュである。実際は攻撃に合わせて宝物庫から武器や最高の盾をタイミングよく取り出しているだけなのだが、次点で抑える役目には赤のランサー、カルナの黄金の鎧になるので体を張って頑張つてもらうしか無くなつてしまう。他に盾を持つサーヴァントがいないために、必然的にそこに収まった。

黒い雨に攻撃手段を変更されても、ギルガメッシュが狙い撃ちで発動する前に破壊するため、巨腕からしてみれば厄介である事この上ない。

なればこそ、先に潰そうと兵力を回し。

「《突<sup>ゲ</sup>き穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>翔<sup>ル</sup>の槍<sup>ク</sup>!!」

ケルトの師弟二人に妨げられる。

二つの投擲された槍は対軍宝具となり、一帯の雑魚の尽くを貫いた。

朱槍の宝具による衝撃を受け流しながら、聖人は赤のランサーに声をかける。

「さて、貴方のおかげで無理をさせていた右腕が治りました。我儘を受け入れてくれてありがとうございます」

「問題ない。それに、そろそろ鎧を捨てる頃合いだ」

「ごちらも魔力があるのなら、いつでも……と言ったところでしようか。では、お返しします」

そうルーラーが言うと共に黄金の鎧が消滅し、赤のランサーの手に神槍が握られた。

「神々の業の慈悲を知れ。インドラよ、刮目しろ。絶滅とは是此の一刺し」

赤のランサーの詠唱に危機を感じたのか、あらゆる方向から弓矢や弾に包まれるランサー。しかし、その全てがアーチャーによつて弾かれた。

「邪魔はさせない」

自分を守る宿敵の姿に、ふつ、と零しながら、その真名を告げる。

「灼き尽くせ、《ヴァアサヴァイ・シヤククテイ日輪よ、死に随え》！」

そして、もう一人。

「万物に終焉を——」。

「《ツインアーム・ピツククランチ双腕・零次集束》ツ!!」

神をも殺す焔と。

全てを潰す暗黒物質が放たれた。

やがて、自分達は現界し続けることは困難になる。そんな確信を持ちながら、セイバーは柄の方を天に掲げる。

それは決して、敵にやられると云うことではない。

いわば、元の鞘に戻る。そうやって還ってしまうのうな感覚だろうと思いつつも、現界している間、必ずマスター達の前に敵は寄越さない。

その想いが、遙か上空から降ってくる光を呼び寄せた。

「発射まで二秒」

「ティアードロップ・フォトンレイ《涙の星、軍神の剣》ツ!!」

戦場の中心に、大きな光の柱が出来上がった。

『まだですか……!?!』

『後、一分……!!』

『はぁ!……それ、もう4回目ですけど!』

## 旅の果てと、物語の始まり。その3

藤丸立香は夢を見た。

白昼夢。

先程までサルバドールの隣で必死に剣を振っていたのだから、現実感のないこの場所が夢だと確信するのに時間はかからなかった。

暗い世界だった。

周りに何かあるのかも知れない。手を伸ばすがただ空を切るのみ。

誰も、何も、いない世界。

酷く、つまらない世界だった。

目の前に光が灯る。その光の中から、一つの情景が見てとれた。

それは、幼い少年が墓の前にいる光景。

少年は目を見開き、驚きを隠さないままに墓に刻まれた文字をなぞる。

微かに口が開いているまま固まっている少年に対し、父親が告げる。

これはお前の兄だ、と。

父親は、兄が早くして死んでしまった事。その墓がそれである事。そして。

目の前の少年に、兄と同じ名前を付けた事を告げた。

その時の少年は何を思ったか。

きつと碌でもない事だろう、と誰かの声が藤丸立香の心に響く。

少年は確かに嗤っていた。

光が消えてゆき、別の光が後ろから輝いた。  
藤丸立香はおもむろに振り向く。

別の少年だった。リビングに入ると父親と母親に笑顔で迎えられた少年は、微笑ながら家族の輪に入っていた。

制服のままの少年はスマホを取り出し、ゲームを起動する。

普通の人間としての生活を送っていた。

友人と学校に向かう途中、車に轢かれるまでは。

意識すら朦朧としている少年は、スマホから電話をかけようとするが指に力が入らない。友人が既に救急車を呼ぶために電話をかけている事すら気付かず少年はスマホを握りしめる。

やがて、手から零れ落ちた。

落ちる直前に誤まって画面に触れたせいか、ゲーム画面に切り替わる。

その少年に死への恐怖はなかった。

何故か、既に経験した気がしたから。

代わりにあったのは落胆。

また俺は死ぬのか。自身に問いかける少年。

画面を覗く。

ああ、せめて。

俺もこのゲームの様に、華々しく生きたかった。

そう言っつて、その少年は光に消えていった。

上の方にまた光が現れる。

憐憫を想う獣と、完璧を謳う人形。

互いに、人ならざるものが相対し、人形は切り札を切る。

我が人格に意味は無し。

絶えず変容せし体に、ひと時の在り様を。

人の生き様を真似るしか能のない俺が、唯一見せられる英雄性。

「アルヴウァ  
ツー！」

目の前の敵を倒す道を切り開くため。この命は惜しまない。

その鋼鉄の意思で貫いた宝具は、最後の敵の在り方を損ない。自分は呆気なく消滅した。

女の人が叫んだ。その直後に目の前にいる盾を持つ少女の名を怒鳴る様に叫ぶ。

同じく涙を流しながら、少女は盾を強く握り突貫した。

「我が消滅を以って、人理焼却も消滅する。だが……最後の勝ちまで  
は譲れない……！ 始めよう、カルデアのマスター。お前の価値を、  
私の手で焼却する」

「そうだな。お互い、勝利などは無かった。お前は負け、俺は良くて自  
爆による相討ち。今も自分の体が残っているのが不思議でならない  
が……。さあ、幕引きと行こう。僅かな意地をも持っていけよ、ゲー  
ティア！」

自身の神殿が崩落していく様を尻目に。

少女達の背中が見えなくなったのを確認し。

人王ゲーティアは指輪を正面に掲げ。

サルバドールは歪な剣を前に構えた。

「ここまでか……。いや、ここからだ……！」

最期の一撃がサルバドールの胸を貫く。

吐血しながらも、乖離剣を杖にして尚立ち上がる。

何かを呟いたのを、藤丸立香は見た。

その眼は決して屈する事なく、勝つ為に前を見続ける。

その景色を乗せた光は消滅し、この世界の一部となって消えていった。

その後、彼と敵の間でどんな戦いがあつたのかは分からない。しかし藤丸立香は分かった気がした。

目の前に、男の背中が現れた。

彼こそ、世界を救った英雄なのだと。直感で理解した。

『貴方は凄い』

「凄くなんかかない。沢山の人、英雄が……みんなが助けてくれた。これからも多分、頼りきりになってしまいうだろう。でも俺にはそれしか生き方を知らない」

『貴方は英雄だ』

「英雄なんかじゃない。ただの人間と欺く、人間ですらない何かだ。そんな存在でさえ、たった一人の涙を拭う事が出来ない」

『貴方は救われるべきだ』

「その必要はない。俺は既に満たされている。これ以上は野暮というものさ。これ以上の幸運を、俺は持てない」

『それでも』

「ああ……それでも。世界を救ったんだ。もし生まれ変わっても、俺のこの生き方は変えられない」

少年と呼ばれた男は地面に突き刺さった乖離剣を握る。

「きつと、あの時は全てが奇跡だったんだろう。それに甘えているのかも知れない。それでも俺は戦う為の力を手に取る」

サルバドルが想起するは、最後の決戦。

あり得ない事を、あり得ないままに引き起こした。

サルバドルだけの宝具。



「我が真なる宝具。その名は天邪鬼が如く……」

「サルバドール・ダリ誰にも分からない」

サルバドールが引き抜くとともに世界が光り輝いた。

元の世界に戻ってきて安堵する藤丸立香だが、周りの様子がおかしい。

サーヴァントが一人もいない。黄金のサーヴァントですら姿を消した。

まるで……。そう言おうとして、後ろを振り返る。

変わらぬサルバドールの姿。

そして、その右腕に抱えているのは。

『よう、待たせたな』

聖槍ロンゴミニアドのように長くなり、九つの螺旋を描く乖離剣だった。

## 英雄である為に腕を狩る男の夢のような話

九つの螺旋のそれぞれが破壊力を生む一つ一つの武器である印象を、藤丸立香は素人ながら抱いた。

さらに言えば、一瞬で消えたサーヴァント達とのパスはまだ繋がっているのだが。

パスの先はあの槍とも言える乖離剣の中に存在していた。

「最後の決戦の時には、形までは変わらなかったんだけど……。でも、あの時と変わらない感覚で助かった」

そういう彼は、雰囲気が変わっている気がした。

どこことなく悟ったような表情を浮かべている。

『みんなはどこに……？ それにその剣は……？』

「言うなら、俺の神話礼装、かな？ 安心してくれ、みんな此処にいる」

サルバドールは藤丸立香に背を向けながら続ける。

「これがあの英雄王が俺にこの剣を託すに値する証だ。赤い模様の全てが、あらゆる世界の英雄と呼ばれる名前を示している。地球上の文字ではないからなんて書いてあるかは知らんけど、なんとなく分かるんだ。これは英雄の物語の全てだ、って」

イマイチ要領が掴めず呆然とする藤丸立香に、サルバドールは遂に苦笑した。

「だから、安心してくれ。今の俺はこの世全ての英雄譚だ」

そう言って振り返るサルバドールの隣に、気付けば誰かがいた。

『え？』

驚きのあまり硬直する藤丸立香を他所にサルバドールはエアを起動させ、第三回転軸のみが回転し始めた。

「槍の英雄よ」

徐々に空に上昇しながら、エアを投げる構えを見せるサルバドール。

「グー・フリーク」

告げた名は宝具の真名解放の引き金となり、投擲されたエアは光を纏う。一瞬で朱い槍に変化したエアが、敵の軍勢の全てを貫く紅き棘を放出する。

間違いない。青いタイツのランサーが持っていた朱槍と同じ宝具。形こそ少し異なるが、同じだ。

サルバドールが着地したと同時に、藤丸立香は更に驚かされる。

「思った以上に動きやすいな。自分の体じゃねえみてえだ。……実際、そうなんだから当たり前か」

目の前にいるのはサルバドールじゃないと気づく。

青のランサーその人の人格はおろか、外見すら変わっていた。

『ランサー……？』

そう呼びかけた途端、サルバドールの姿に戻る。

ついでに、服も草で不器用に編まれた腰ミノだけに戻った。

「んん？……前にコレやった時はサーヴァントそのものになるなんて事はなかったが……。この力が本来の俺の姿、なのかな？」

『一体、貴方は……？』

「あー、そうだな。説明したいのは山々なんだが……昔にコレを使っただのが結構死ぬ直前でなあ。……もしかしなくても制限時間が過ぎたら多分俺は死ぬ。だから、その前にさっさと聖杯を確保、お前の帰る手段を確立させなきゃならんのだが……待っててもいいけど俺について来るか？」

『行きます。今は、俺が貴方のマスターですから』

「言うねえ。まあ、まさか他のみんなまでもがエアと融合するなんて思わなかったから、俺たちしか残ってない。その分、雑魚が残っているが……戦力差としてはこちらに分がある。なんてつたつてこつちは英雄を背負ってんだからなあ……！　さて、手早く行こうか……ッ！」

『はー！』

「んじゃあ、今いる奴らだけでも消しとこうかあ!!」

エアが再び起動したが、第三回転軸ではなく、第一回転軸。つまりは先端のみ回転を始めた。

「剣の英霊よ、集え」

赤の暴風が収束し、先端部が紅く輝く。

先程の様に、サーヴァントが現れるのかと思う藤丸立香だが、その様子は見当たらない。

そのままサルバドールは横に薙いだ。

「剣の英雄達よ、断ち切れ」

斬る。この言葉の概念が放射されたかのような感覚を覚える。

それほどまでに、視界に映った敵全てが両断されている景色を見たならば、そう思うのも無理はないだろう。

居合の構えすら無かった。詠唱を一小節挟んだだけで彼は横に得物を薙いだだけだ。それも、ゆっくりとなぞっただけにも見える程である。

たったそれだけで、敵戦力の半分以上を持って行った。

それでも巨腕が崩れなかったのは、対英雄の耐性故に。相当に厄介な性質を持っているが、こちらもこちらで規格外だ。

「さて、道は拓けた。どうした？ 来るんだろう？」

『もちろん、一緒に進む』

「いい返事じゃないか。行くぞっ！」

藤丸立香は軍神の剣を。サルバドールはエアを両手で持ち上げるようにしたまま駆け出した。

『うおおおおおああ!!』

お互いに当たりさえすれば必殺の武器となっている為に、技量や経験が足りずとも雑魚を薙ぎ払う事は容易であるが、その数が問題であった。

しかし、その点は全てサルバドールが事あるごとにエアを通じて宝具を解放していく事で打開に成功する。

稀に、エアを通してでしか宝具を解放できない為か、エアの部位が回転するまでに発動直前のラグが発生する。そのサルバドールの小さな隙だけは弱点に気付いた藤丸立香が護り続け、確実な真名解放によって周りの敵を蹴散らしながら進んでいく。

巨腕の攻撃すらも、サルバドールが完全に防ぐか発射する前に対処するために、まるで歯が立たないようだった。

だが、決してこちらの優位という事にはならない。

先程から、サルバドールの口や鼻から血が垂れて止まらないのを確認出来ているだけでなく、明らかに走り方や戦い方がぎこちなくなってきた。微細な変化ではあるあったが、藤丸立香は観察眼に秀でていた。彼の身体が単純に追いつけていないのが原因だ。

宝具というのは、英雄の逸話が昇華したもの。

そんなものを使い分けながら連続使用するのだ。身体の限界が来るのは当然の話だ。

それでも彼は、サルバドールは笑う。

嬉しいと言わんばかりの晴れやかな顔を見せて、目の前の障害を屠る。

藤丸立香はその背中を見る。

ならば、彼に劣る訳にはいかない、と己を鼓舞して。

歯を食いしばって、軍神の剣を叩きつける。

ああ、嬉しい。嬉しいなあ。

思えば、初めてかも知れない。

こうして。

誰かと共に戦うのは。  
ずっと護り続けてきた。ずっと頼り続けてきた。  
がむしやらに頑張つて、最高の結末を求めた。  
でも、今なら。泣かせてしまったあの人の気持ちが分かる。  
一緒に、歩みたい。  
共に、進んでいたい。  
貴女はそう、思っていてくれたのか。

「だからあ……！ 無茶はこれつきりだ！ 生きて、お前にまた会えるなら！ 今度は間違えない！！ 引きずつてでも同じ道を行つてやるからよ！ 覚悟しろよお！！なんせ俺は……」

『これからが俺の旅なんだ！！ お前なんか足止めを食らつてるようじゃダメなんだ！！ だから、容易く超えてみせる！！ 俺は……ッ！！』

『『人類最後のマスターだあ——！！』』

「殺<sup>ア</sup>の英<sup>サ</sup>霊<sup>シ</sup>よ、集<sup>ン</sup>えッ！！」

遂に巨腕にたどり着いたサルバドールは骨が響くぐらいに叫び、第六回転軸が回転する。

『邪魔はさせない！！』

「真名解放オツ！！殺<sup>サ</sup>の英<sup>ザ</sup>雄<sup>ン</sup>達<sup>ト</sup>よ、闇<sup>ア</sup>に潜<sup>シ</sup>め——！！」

藤丸の後ろにいた青年が突如、消失する。

それを知つて尚、藤丸立香は足を止める事はなく。

あらゆる妨害を紙一重で切り抜ける。

紙一重、というのは達人の域という事ではなく。当然ながら、回避は出来るものの疲労によってそこまで動くことが出来なくなっていることを指す。藤丸立香はただの人間、英雄の兆候こそあれ今は雛鳥に等しいのだ。

限界まで腕に近づく。それは変わらない。

少しでも切り抜ける為に身体をフル稼働させる。少しでも、どこかの身体の部位を休ませれば、死ぬ。

だから今は醜く、生き汚く、足掻くしかない。

自分に綺麗な戦いは出来ない。執念を以ってこのエネミーの波に抗う。

「俺を忘れてんなよオラァン!!」

瞬間、巨腕の目の前に現れたサルバドールが、左手でその腕の奥まで抉った。

気配遮断。全てのアサシンの保有スキルでありながら、乗算してサルバドールに付与されたそれは、気配だけでなくその存在をも陰に隠す。

基本的に近接以外が英雄耐性の為にまともなダメージを与えられないのに対し、近付けば念力擬きを使用してやられた時の二の舞になるのは想像に難くない。

であれば、使用させなければいい。

気配遮断をする事は事前に藤丸立香に伝えた訳ではない。

しかし、剣戟の間の僅かに目を合わせた時。

藤丸立香には、これから何をするか察したのだろう。その上で、しばらく一人で戦う状況でも歯を食いしばって耐えきったのだ。

「流石、だな」

そう零したサルバドールは第一回転軸を回転させながら藤丸立香を回収。

セイバーのサーヴァントのスキル『縮地』を用いて距離を一気に離れた。

自身を抱えたのが女性だった事で動揺する藤丸立香だが、すぐにサルバドールが元に戻ったために、仲間であると安堵した。

「聖杯は奪取した。早速だが『聖杯に願う。マスターを元の場所に還

せ』

『……!? サルさん!!?』

サルバドールの行動に、藤丸立香は驚愕した。

『待ってください！ なんで俺を逃すんですか!?!』

「……急なのはすまん。だが、お前はもう十分だ。正直、世話になり過ぎて感謝しかないんだが、元々、俺が勝手に呼びつけたんだ。先に行っててくれ」

『アイツはまだ生きてる！ まだ戦わないと……!』

「大丈夫さ、お前がいなくなれば俺の抱えている憂いはなくなる。俺が全霊を以って奴を倒そう」

『なんで……?』

力のない藤丸の問いかけに、サルバドールは笑う。

「ありがとう。お前がいてくれて助かった」

『そんな……。まだ何も……。出来て……』

「気にすんなくて……。代わりに、よく聞け」

「これから俺が見せるのは、お前の一つの可能性……その果てだ。俺と同じ道に行く事になるかは分からない。だが、世界を救う意思は等しく美しいものだ」

その青年は、少年に言う。

「君の旅路に栄光を。先導者の証を。未来の遺産を置いていく。刮目せよ、これこそ俺が歩んだ軌跡を描く英雄譚である!!」

九ツ螺旋乖離剣を天に掲げる。



「劍<sup>セ</sup>の英靈<sup>イ</sup>よ、集え<sup>バ</sup>」

先端から。

「弓<sup>ア</sup>の英靈<sup>イ</sup>よ、集え<sup>チャ</sup>」

徐々に動き出し。

「槍<sup>ラ</sup>の英靈<sup>イ</sup>よ、集え<sup>サ</sup>」

紅く光り始め。

「騎<sup>ラ</sup>の英靈<sup>イ</sup>よ、集え<sup>ダ</sup>」

やがて。

「術<sup>キ</sup>の英靈<sup>ス</sup>よ、集え<sup>タ</sup>」

全てが廻り。

「殺<sup>ア</sup>の英靈<sup>サ</sup>よ、集え<sup>シ</sup>」

全てが紅く輝き。

「狂<sup>バ</sup>の英靈<sup>サ</sup>よ、集え<sup>カ</sup>」

世界が揺れ始めた。

「特<sup>エ</sup>異<sup>ク</sup>なる英靈<sup>ス</sup>よ、集え<sup>ト</sup>」

乖離劍と融合したものだ。それは、英雄の座であり。

「聖杯マに導かれし魔術師よ、掲げよタ」

この世全ての英雄譚である。

攻撃などサルバドールに届くはずもない。今この状況で近付けば、どんなものだろう破壊することが出来る空間に放り出される事になる。

これは不幸にも転生した人間の、慟哭。

されど、その身はサーヴァントでなく、マスターでもなく。

「待つのは飽きた。そろそろ、自分の道を決める時だ」

正しく、英雄だった。

『誰かが語り継ぐは英雄のものがたり』

世界が、砕けた。

Epilogue その後の話。  
サルバドールが遺したモノ

俺は、あの時。

もう一人の背中を見た。

薄れていく意識の中で、それだけは覚えている。

彼から受け取ったもの。見えないものではあるが、確かにそこにある何かを自分は受け取っていた。

だから。

藤丸立香は結論から言えば、夢から醒めるように特異点Fに戻った。

先に起きていた所長に呆然としていた事を怒鳴られてしまったが、それまでは今までの事が白昼夢の様なものだったと理解する事ではいっばいいっぱいだった。

もう、ほとんど覚えてはいない。

辛うじて憶えているものと言えば、誰かを名乗る藤丸立香という自分であって自分ではない存在。

聖杯を使つて、自分を返してくれたその人の背中。

それと、何より考えたのは。

向こうの藤丸立香が見せた、救いの残滓。

ふと、思い出した彼との会話に、気になる言葉があった。

クー・フリーンには悪いけど、大聖杯とやらへ突入する前にやらな

きやいけない事がある。

もう少しだけ準備があると告げて待ってもらい、管制室に連絡をとる。

『ロマニさん、聴こえる?』

「どうしたんだい、藤丸くん? 物品の転送なら相談に乗れるよ」

『その前に、こちらのメンバーに知られたくない事がありまして。聞かれない様に出来ませんか……?』

「……現時点ではマシユ、所長にも聞こえないように設定されているよ。でも、場合によっては後で話す必要も出てくるだろう。それとも、後ろめたい何かがあるのかい?」

『……もしかすると、この特異点で所長が死ぬ可能性があります。』

「……もしくは、もう……手遅れの可能性が』

「なんだって!?!」

『戯事かも知れません。……まるで本当に起きるような悪夢を見ました。昔からこういう悪い予感はあるんです。絶望しながら死んでいく所長を見てしまったんです……!』

「落ち着くんだ藤丸くん!」

当然、でまかせで吐いた嘘だ。

彼に聞いていなければ、所長が危ないなんて誰が知れる。自分には所長を救う方法なんてない。

「まだ決まった訳じゃない。こちらも動向は細かくチェックしているし、所長がそんなっ……いや、死に急ぐような人でもないハズだし……」

渋るのは分かっていた。だが、話を聞いた時は細かい事は教えてくれなかったし、話してくれたとしても憶えていない。

ならば。

所長が危ないと知って尚よく考えれば、この考えには誰もが気づくはずだ。もしかすると、なんて思えばそうとしか思えなくなるぐらいには。

「ロマニさん。あの爆発に一番近かった人って……誰ですか？」

特異点Fから無事に帰還出来た後、思索に更けながら藤丸立香はカールデアの廊下を歩いていった。

あの後、ダヴィンチちゃんと名乗る女性(?)が介入、オルガマリー所長の状態に気付いたロマニ達管制室の方々が対応策を練り始め、ダヴィンチちゃんに「特製タマシイスイートル」という胡散臭くて訳の分からない物を渡された。

結果だけ言えば、精神体をデータ化して保存する云々。一応所長は助かったという認識でよかつたらしい。

だが、これでよかつたのか。

ブドウ糖の飴を袋から取り出し、口の中に放り込む。

確証はないが、何かの道を踏み間違えたかのようなそんな感覚が体の中で今も駆け巡っている。

でも、彼も自分と同様に助けている。

いや、これでいいんだ。

なんにせよ、所長が危ないという話を聞いただけで自分は黙っていられなかつたんだ。その行動に後悔はない。むしろ自分自身を誇るべきだろう。

うん。

だから、レフから遠ざける際に胸を揉みしだいてしまったのも事故だ。

しょうがない。うん。

なんか喘ぎ声が漏れてた気がするけど何も無い。何も無いんだ。

マシユはその時にゴミを見るような目をしていただけ……。

俺は無実だ。

そう自分に言い聞かせながらいると、白衣を着た青年が歩いてきた。

『あつ、ロマンさん』

「あだ名なら呼び捨てでいいよ。藤丸くんの方は眠れないのかい？」

そういえば、夜だったか。

レイシフトで飛んでいる時とカルデア内は時間が微妙に異なるのと、そもそも興奮が勝って眠れない。これは事実だ。

「そうですね、昨日の今日って感じで。……これから頑張らないとですぬ」

「無茶なことを言つてごめん。カルデアは人手不足だから、裏方だけでも十分嬉しいんだけど……」

『あつ、そうだ』

「？」

ロマンに目を合わせて、にこやかに告げる。

「実は：俺も藤丸立香って呼ばれるよりは、あだ名で呼ばれたい派なんですよ」

『そうなんだ。どんなあだ名なんだい？』

思い浮かべるは、彼の名前。彼と同じように藤丸立香が何人もいるとするなら、もう一つの呼び名は必要だ。

どうせなら、俺らしい名前がいい。

「俺の名前は——」

翌日、微小の特異点が発生。後に「フリークエスト」と呼ばれる様になるその場所の存在を聞きつけ、黎明の腕と戦う事になるのは別の話。

ついでに言えばこれから先、藤丸立香がサルバドールに会う事はな  
かったという。

人理修復の旅は続く。

藤丸立香編、完。

## 終わりは突然に。前編

ふと、昔の事を思い出した。

あの頃は良かった。

オルガマリー所長を愛称のオルガと呼び、俺もまたサルバドールと呼ばれたあの日々。

密かにデートとしてレイシフトし、砂浜で追いかけてっこしたり。

オルガの仕事を手伝ったり。

疲れたオルガを無理やり寝かせようとしたら、同じ部屋でウツカリ寝てしまったり。

バレンタインにオルガからクッキーを貰ったり。

あの時は、とても楽しかった。

……………あー……………。

ん？

……………おいまで、これ本当に俺の走馬灯か？

名前の呼び方以外が全て捏造されてんぞ、どういう事だ。

黙ってれば、訳の分からん思い出の有る事無い事吹き込まれてんぞ。

レイシフトなんざ職権乱用で行ける訳ないし。

大体は、オルガの邪魔をして怒られてたし。

寝かしつける時は大体当て身して気絶させてたし。

クッキーは、怨念と呪いを込めて俺にプレゼント<sup>投げつけて</sup>くれたぞ。

大体……………！

「そんな天使のようなオルガがいる訳ネエダロオがああああ!!」



そう言いながらかけてあった毛布をぶん投げ、飛び起きた。

「……………ん？……………これはアレか？ 見慣れた天井だな、とか言う奴？」

その割には、何処だったかイマイチ覚えてない。

そもそもの違和感に気づく。

「天井がある……………？ 森の中じゃなくて？」

何があったのか。

俺はかつていた、人理保障『機関』カルデアに『帰還』してしまったあ……………なんつって。

……………やばい、気まずい。

取り敢えず考えた末の結論を先に話すなら、ひとつだけ心当たりがある。

聖杯への願い事。

確か、内容が間違っていないければ「マスターを元の場所に帰す」とかなんとか言っただけ願ったはずだ、俺は。

もしかすると俺も聖杯にマスターとして認識され、その上で俺を巻き込む形で願いが叶えられた……………という事だろうか。

いやいや、そんな事……………。

……………普通にありえそうだな。

ガバガバ過ぎやしないだろうか？ こちらとしては既にセイバーやランサーとは魔力のパスとかが切れてた様な気がしたのだが。

……………うーん、誰かが俺をマスターだと思っていたとか？ どういう経緯で俺にも適用されたのかが分からないのが少し怖い。

しかしそれでも、生きて帰って来れたというのは嬉しい。

この嬉しさを噛み締め、みんなの元に行こう。

……………その前に、ちよつと流石にこの服装はマズイ。

腰に草やらなんやらを巻いているだけでほとんど全裸だ。

この状態で会おうものなら、オルガからガンドで眉間を撃ち抜かれるだろう。

この腰に巻いた草の塊をまとめ、ゴミ箱に叩き込んだ後にクロ―ゼットのの中にあるはずのカルデア制服が……………ない。

……あれ？ 新種のイジメ？

……おかしいな、確かに此処に置いてあるはずなんだが。

「ヤベエって！流石に全裸でカルデア徘徊は色々つまズイ。マスターとしてとかじゃなく、それ以前に人として……………！ 何かないか……………!？」

くそつ、草の塊をまた腰にぶら下げてたまるか。こちとらまともに服を着れると期待してのコレだ。少々悪質過ぎちやいねえか!？」

「というか、物自体が全くない……………!?! 整理されてるのはまだいいが、物品全てなくなってるなんて完全に度が超えてるぞ！ まるで、何処かに引っ越しちまうみてえに……………つ!?!」

まさか、人理修復の任務が終わった事でカルデアが役割を全うしたのか!？」

それなら考えられる。ゲートイアのヤツのは決着は済んで、細かい書類の後始末さえ終わってしまえば後はカルデアの存在意義は以前と比べて薄くなってしまう。もしそうになったら、魔術なんたらとか聖堂なんちやらが唾付けてくるつてのを以前聞いた覚えがあるぞ！

「下手すりゃ、此処には誰もいねえつて事じゃねえか!! それはマズイぞ、服探してる場合じゃねえ!!」

すぐにでも、移動して情報を集めねえと……………! 帰ってきて、即死亡とか笑えねえ!!

電気は通じるのか、自室と思われる部屋の扉に近づけばすぐに開いた。そのままダッシュで管制室方面に向かう。

むしろ、誰もいないよりかは、見つかって裸で居るところを笑われた方がまだマシだ!

誰かいてくれ……！

「……っ!? こちらスピード2! 前方から未確認変態を発見! 排除する!!」

黒い服に身を包んだ、明らかにテロリストっぽい奴と遭遇。

……取り敢えず。

「誰が変態じゃアアアア!!!」

色々と言いたい事があったが、真つ先に思い浮かんだのは自身の保身に走る言葉でした。

俺は変態じゃない。全裸で走ってるだけなんだ!

カルデア襲撃により、虚数潜航艇シャドウ・ボーダーにてカルデアメンバーが脱出するまで。

あと二時間。

## 終わりは突然に。 後編

なんか、明らかにおかしい。

倒した兵士の無線を奪い取ると、明らかにカルデアスタッフではない人間が、次々にやられていく会話が聞こえてきた。

多分、やられている方は兵士のお仲間かな？

だとすると、第三勢力がこちらに来ている事になる。

中々に面倒な事態が起きているが、カルデアのみんなはどうなっているのか。殺されていないだろうか

とにかく情報が足りない。引き続き管制室方面に走る。

今戦闘を行ってわかった事だが、霊装投影が出来なくなっている。カルデアに異常が起きた可能性が高い。何が起きているかを知るには、カルデアスに行くのが得策だろう。

「……つたく、面倒な事になってんなあ」

どちやつ、と音を立てて崩れる者に尻目に、俺は依然変わらず颯爽と後にする。

もう何回目だよ……！

ガスマスクに嘴をくっ付けた様な集団がわらわらと目の前に現れ、邪魔するついでに殺しにかかって来た。先程のテロリスト擬きとは違う、明確な殺意を持って。

10体ぐらいは既に倒した。魔術なんぞ無くても、この体はかの英雄達から受け継いだ技術や戦い方を記憶している。武器など不要、真の英雄はなんとやらつてな。

最悪、授かったという名目で使用可能な『友の名を賜りし鎖』を使えば切り抜けられるが、コイツら程度の敵に鎖を使うほどの価値はない。100体ぐらい数を揃えて出直すんだな。

しかし、気掛かりなのはやはりオルガやマシユ、ダヴィンチちゃんや生きているはずのロマンだ。

特にロマン。ゲーティア戦でわざわざ俺が霊装投影からの自爆宝

具を使ったんだ。代わりに居なくなつた俺からしてみれば、「死んじやつた、ごめんね」では済まさん。その時は2度目の死をプレゼントしてくれる。

……出来るなら、早く会いたい。

歯軋りする自分を抑え、全速力で突っ切つていった。

ダヴィンチちゃんが貫手で貫かれた。

所長が私に向かって叫び、私をコンテナの中に入らせました。

あの神父の様な人は何者なのだろうか。そんな疑問もはつきりとせずに気味が悪くなったのを感じました。

残っていたホームズさんがコンテナを操つたのか、私と所長、D r. ロマン、ゴールドさん、そして少なくなつてしまったカルデアスタッフとともに南極を滑って行きます。

その後、ダヴィンチちゃんか小さくなつて現れたのには驚きましたけど。

「レオナルド、いつの間にそんなものを造つてたんだい……」

D r. ロマンがダヴィンチちゃんに向かって呆れるように言いました。

D r. ロマンは先輩が命と引き換えに引き起こした宝具のイレギュラー使用によって、受肉した後のサーヴァントとしての力を完全に無くしてしまいました。ですが、今でも肝心な時にはとても頼りになる人です。

「その辺りの話をしたいとは思っていたのだがね。今は生憎時間が無い。ダヴィンチ氏は操縦に専念してもらわなければ」

ホームズさんは何かを思案するように腰掛けながら、ダヴィンチちゃんに促します。

ダヴィンチちゃんは操縦のためか、スリープモードの様になって動かなくなりました。

「大丈夫なのかね、このコンテナは!? まだ死にたくないぞ!」

「大丈夫です、ゴールドルフさん。少なくとも万能の天才と言われたダ

ヴインチが一枚噛んでいる機械です。襲撃を見越しての策なら、ホームズと共謀する事であらゆる苦難において容易く乗り越えられる程の智慧となります。今は不安になるでしょうが、辛抱です」

未だ不信感が残っているらしいゴールドルフ・ムジーク・ユクドミレニアこと、ゴールドさん。

そして、それに対応したのがオルガマリー所長でした。

「マシユ、今のうちに休息を。ダヴィンチやホームズが操縦を担っているのなら、他のサーヴァントを呼べない現状で戦うことが出来るのは貴女だけよ。警戒は私達の方ですから、有事の際までは大人しくしていなさい。いいわね」

「は、はい!!」

そう言つて、所長は私に気にかけてくれました。なので、備えるために休む事にしました。

昔と比べて一番変わったのは彼女です。

ヒステリックと呼ばれるものは鳴りを潜め、代わりにしつかりとした性格に変わっていききました。周りの視野が広く、何かと気にかけてくれるいい上司と言えるようになったのではないのでしょうか。

変わった理由も、なんとなくですが分かります。

大切な人の為なら頑張れる。所長は、そういう人ですから。

「少しいいかね」

ホームズさんが、口を開きました。

それに全員が注目します。

「いや、大きな事ではないが……少々気になる事があつてね。……ゴールドルフ氏。貴方に伺いたい」

「な、なんだね……!?!」

「ゴールドルフ氏がカルデアス周辺で危機に直面していた時、近くのマイクに電源がついていたために我々は救助に乗り出した。しかし、実際に動いたのは所長である彼女とマシユ、ロマン、そしてダヴィンチ氏の四人であり、私はここで待機していた」

「それがどうかしたのかね!？」

「問題はその後だ。貴方はその後、我々ではなく他の誰かに助けられていた。その人物について聞きたい」

「それは僕も聞きたいことです。敵の障害があつたのは確かだが、何故か貴方の周りにいた敵の一部が既に倒れていたのが分からない。しかも、倒れた一人は追いつきにでもあつたかの様に身ぐるみを剥がされていた。どんな人物に会つたかを教えて頂きたい」

「……儂にも分からん！ あの小僧、儂とカルデアの装置を見ただけですぐに移動しようとするし、さらには拳一つで敵を蹴散らすような小僧だぞ!! 知り合いにそんな奴はおらん!……それに……」

「それに?」

「あの男は味方ではない。ただの変態だ」

「は?」

所長の方から聞こえた声でした。

「なんで、あんなヤツのイチモツを見なければならぬんだ!」

思い出したのか、怒りが再燃したと思えばすぐに疲れた顔をし始めてしまったゴールドさん。ホントによく分からない人に会つたらしい。

私にもよく分かりません。

「アイツだったら、やりかねないわ」

俯きがちに言った所長の言葉を否定する人はいなかつたです。

しかし、その時は気付きませんでした。

このシャドウボーダーに向かつて、走って追従して来ている仮面をつけた敵がいる事を。

## Another Order      そして旅は続く

ゴルドとホームズが話す事は、違う視点からの同じ話を統合したものであった、

ゴルドは実際の体験を元に。

ホームズはマッシュ達が救出に向かった後、待機中に聞こえてきたスピーカーを通して。

それは、二人が怪しい変態の話を展開する数時間前のこと。

カルデアスのある管制室前。

その時、私兵が全滅したゴルドは第三勢力に追い詰められていた。

(コイツら……思い出した……。殺戮<sup>オプリチニキ</sup>猟兵だ。……こんなところで私は殺されてしまうのか……！)

自分の身を守るのは己のみ。

今までの人生の運の悪さを嘆きながらも必死に足掻く。

その言葉にマッシュやオルガマリーが反応し、救援をしに向かったが。

二人よりも、その言葉に応えた人間がそこにいた。

「まだ私は誰にも認められていない、誰からも愛されたことがない――

――」

「なら、俺が認めてやる。俺が愛して……はやれないな、流石に。男だし。その趣味はないし。まずは退く事だ、殺す事しか知らない傀儡共」

オプリチニキの集団が、一瞬にして蹴散らされる。

その男は異形であった。

オプリチニキを瞬殺する力を見せながらも、その体躯は筋肉質でありながら細く締まっている。

特に右腕は、肘から先が神秘の腕を移植したかの様に常人の肉体と



はかけ離れたものを持っていた。

それでありながら。

「へ、変態だあああ!？」

「誰が変態だあああ!？ どう見ても『おお……！我が恩人……！』って感謝するところだろうが！ もっと敬え、俺を!!」

その男、サルバドールは未だに全裸であった。

「なんなんだお前は!？ お前も敵なのか!？」

「あー?……んー味方ではないかもしれないが、少なくとも敵ではないって感じかな？ そんな事より、人探しをされていてね。この所長さんを探しているんだが心当たりはないか?」

「私を知るわけないだろう！ 奴らの待機場所は設けていたが、この騒ぎなら十中八九奴らは逃げ出している！ この私を置いてな!」

「……ふーん、あつそ。とりあえずはここにいるんだな?……ふつ、そうか」

「貴様は何処から来たんだ!？ カルデアに貴様みたいな奴がいる報告は受けておらんぞ?! 私達の軍隊にも所属していない筈だ!」

「それは……すつごい言いづらい事情があつてなあ……。まあ、細かいことはいいんだよオッサン」

「私オッサン!? 小僧にオッサンって呼ばれた!? このゴルドルフ・ムジーク……」

「長いッ！ 三文字まで!」

「せめて名乗らせて!？」

サルバドールはゴルドを無視して、カルデアスを見やる。

以前とはかけ離れた、かつて自分の分身とも言えた機械。

これからはカルデアスからの恩恵は受けられないと悟る。英雄の模倣も出来なくなるだろう。

それでもサルバドールには、今まで英雄達から受け取ったモノがある。ならば、前に進もう。

そう思つて考えを振り切り、ゴルドに向き直る。

「俺はこれから生きてるみんなを助けに行く。オッサンはここで待っていてくれ」

「な、なんだと!? この私を助けに来たのではないのか!？」

「優先順位はあるだろ。それに、この雑魚どもが全滅した事が周囲に知られない限り、かえってここが安全な場所になる。俺は今からどっちかって言うのと危険な方向に行くからな。オッサンは足手纏いだ」

「頼む、お前しか助けてくれる人間はおらんだ!!」

「……いるさ。俺が行くのは、ピンチでどうしようもない事態に陥っていた時のための切り札だから。あいつらならきつと死なないとは思うけど、もしものときのために俺はいる。……過保護かもしれないけど。……それに、オッサンの叫び声の中に聞き覚えのあるフレーズがあつてね。あいつらならきつと逃げる直前だろうとここへ助けに来るさ。……もしくは俺が戻ってくるが、来れないのはほぼ負傷のせいと見ていいだろうよ」

「何故、そこまで信用できるんだ……?？」

呟くようにゴールドから出た言葉に、サルバドールは返す。

「事あいつらに限って、信用出来なかった事がないからさ」

「……おい！ クサイ台詞を吐いてそのまま行くな！ 服を着ろ！」

「お、ありがとう。助かるわオッサン。オラ、早く脱げ」

「誰が私のモノを貸すといった!? そのオプリチニキのモノを着ればいいだろうが!!」

「あーそう言う事ね。……じゃあ失礼して……」

これがゴルドルフ・ムジーク・ユクドミレニアがカルデアの面々に

救出される数分前の出来事である。

その後。

管制室を離れダヴィンチちゃんの工房に寄ったサルバドールは、工房内での探索によつて一つの解を導き出していた。

いつも通りの工房内。いくらお世話になつたか分からないくらいにはよく来た場所でもあるために、大体の芸術作品の配置は覚えている。

だからこそ、サルバドールが感じた不審な点は、彼にとつて分かりやすいモノだった。

（ダヴィンチちゃんの工房の芸術作品は微妙に動いているだけで特に変化はない。おそらくこの騒ぎの影響で揺れた所為だろうが……それとは別に、普段と変わらな過ぎる。ダヴィンチちゃんなら今回の騒動に備えて何かしらの策を打っているはずだ）

彼が感じたのは、ダヴィンチちゃんが何もしていないはずがないという認識。

例えば、カルデアに置いておけられないモノを念の為に持つていくための発明品。又は、瞬間的に退避することの出来る発明品。

そのどちらかはあつてもおかしくない。

事実、ダヴィンチは前者の通りに、『英雄の座』のデータをトランク型ケースに入れる事で持ち運べる様にしていたと後に分かつたが。

（それらがここに無いという事はダヴィンチちゃんが実は緊急時の事を何も考えてない馬鹿だったか、もしくは脱出の目処が今既に立つて移動しているか、のどちらかだ。……この場合なら断然後者だな。ダヴィンチちゃんふざけてる時はふざけるけど決して馬鹿じゃないし。だつて英雄だし、万能だし）

かつて、工房の奥にしまつておいたあらゆる発明家サーヴァント合作で仕上げた発明品を引っ張り出しながら、かつての仲間の元へ捜索に向かつた。

「……—というか、コンテナから脱出なんて想定外でしたが」  
「ふむ。とは言え、13名もの尊い人命だ。……後は任せてもいいかね、コヤンスカヤ君？」

「ええ。業務時間外ですがサービスいたします。こちらにもプライドがあるので」

ダヴィンチの心臓を貫手で貫いた神父、言峰綺礼はコヤンスカヤと呼ばれる女性に声を掛け、コヤンスカヤもそれに応えるようにライフルを持ち上げた。

二人の目的はカルデアの襲撃。ゴルド諸共、破壊活動及び殺害をする第三勢力として猛威を振るい、カルデアの体制は完全に崩壊したと言っただろう。

中心的なメンバーはコンテナから冰山を滑るように逃げられたが、頭脳の役割をカルデアでになっていたキヤスターのダヴィンチを始末している。彼らに反抗の力はないだろうと、追い討ちを掛けようとした瞬間である。

「むっ……い！」

「っ!？」

爆発が起きた。

その大きな音は、カルデア内部から起こったようだ。

「……むっ、まだ反乱分子がいたのかね？」

「キヤスターとは別に、もう一体のサーヴァントを残していたカルデアの事です。我々の妨害策を講じていてもおかしくありませんが……」

コヤンスカヤはそう言いながら、言葉尻をすぼめた。

妨害策にしては、大雑把過ぎる。大きな音がしたからと言って、直接的に邪魔になったとは言い難い。何かの前兆か、はたまた何かあると見せかけたフェイクか。

悩む事もなく、コヤンスカヤはライフルを構えた。

少なくとも、この程度の妨害なら取るに足らない。そう判断しての行動だった。

ライフルのスコープを覗いたコヤンスカヤは、思わず声を漏らした。

「はっ。」

スコープの先には、カルデアの生き残りが避難したコンテナ。そして、それをバイクで追いかける殺戮猟兵オブリチニキが見えていた。

殺戮猟兵オブリチニキ。それに変装した青年、サルバドールは現在進行形でコンテナをバイクで追いかけていた。

サルバドール自体、何故コンテナの中にカルデアメンバーが居るのは正直把握していない。ただ、なんとなくではあるが、このタイミングでコンテナを落とすならば、それはきつと人間の運搬であると推察したに過ぎない。

というか、「えっ、アレで脱出してくれない？」と、完全に乗り遅れているためかなり焦っているのが現状である。

カルデアの壁を突っ切る為に破壊した為に、大きな破壊音を出したのもサルバドールである。

もう、アクセル全開であった。

彼が乗っているバイクは、エジソンやテスラを始めとした発明系サーヴァントがこぞって改造したモンスターマシン。

このまま行けば確実に追いつくスペックを誇る。

だが、危険を察知して右方に咄嗟に避ける。すると、先程いた場所に何かを通り過ぎ、前方のコンテナに直撃した。

「うおお!？」

流石に面を食らったサルバドールは後方に目をやる。しかし、カルデアが随分と遠くになっているために、カルデアからの狙撃とは分かっていても敵の正体までは把握出来ない。

誰がやったのか。そう思う間も無く、前方のコンテナからその表面の壁が剥がれ落ちていく。

培った運転スキルで難なく障害物となった破片を避けたサルバドールが見たのは、前方を走る大型の車両。

「ええええ!?!」

コンテナの中からトラックが出てきたあ!?

トラックが雪面を降りていくのに対し、加速をかけて追いかけるサルバドール。

困惑と同時に、焦りを見せるサルバドール。

彼の頭の中にはある疑問がこびりついて離れない。

なぜ、コンテナから出てきたのは車なのか。

傾斜を下るだけが目的ならばタイヤではなくスキー板のようなものをつけるべきだし、海に脱出するならば水陸両用車の形を構築するべきなのにそのような外見ではなかった。素人目からしても、普通にこの冰山から脱出するようにはどうしても思えないのだ。

では、彼らはどうやって脱出するのか。

モンスターマシンの上に立って、トラックに向かって跳躍する。

嫌な予感がする。ここでこのトラックに接触しないとまずい。そんな結論がサルバドールの頭に駆け巡った。

そのトラック、シャドウボーダーの虚数空間への潜航。サルバドールの跳躍。そしてカルデアからの狙撃によつてバイクを爆破させたのは、ほぼ同時にの出来事だった。

「うおおあああ!?!」

バイクの爆発は小さなものではなかった。カルデアの室内で80キロは出る発明品であり、機体に貯蔵されていたエネルギーもジェット機レベルの規模であった。それ故に、ロマンや所長に激しく怒られ

た上に嚴重に管理されてしまうほどには。

それ程の加速を持つ乗り物であったからこそ、今回は最適なものだったと言える。

結果的に、サルバドールは間に合ったのだから。

「エ……《友の名を賜りし鎖》……！ あつ、危なかつたあ！ 引つかかってくれて危機一髪つてところだったツ……！ にしても、あのままだったら完全に置いていかれるどころか、敵の妨害でやられるところだったぜ……」

かつてギルガメツシユから貰い受けた、神秘だけが上乗せされた普通の鎖。自分の意思のみで自在に操れるその鎖によって、かろうじてしがみついた事が出来た。

あのバイクの爆発によって態勢がかなり崩れていた為の、やぶれかぶれに鎖を振り回したに過ぎない稚拙な考えではあったが。

そのままシャドウボーダーをよじ登ると、体から空気が抜けたかのように倒れた。

「あく疲れた！ ひんやりしたトラックがゴリゴリしてるけど気持ちいいなあ！ やつと静かに休められる！」

カルデアに訳がわからない内に戻ってきてしまったサルバドールは、今までリラックスして休む事なく動き続けてきた所為で疲労困憊であった。

「まあ、休ませてくれる事なんてないよね」

「そうだな」

刃がしなり、サルバドールの首にかかる。

それから逃れる為に後ろに転がるように飛び上がった。

「シャドウボーダーの存在を確立させた際に出没した異物。原因はお前だな」

「異物って……俺がここに居る事だよな？ よく分からんが、邪魔者になってしまったなら申し訳ない。この車の中に入れてくれれば異物扱いではなくなると思うが」

「異物ではなくなるだろうが、不審である事に変わりはない。それに……」

当然現れたサーヴァントから繰り出される袈裟斬りをやや大袈裟に避ける。

「その異形の右手。怪しさだけで言えば問答無用で切り捨てられるだろうな」

「……やっぱり分かる？ 抑えてる訳じゃないから、服の上からでも十分に分かるか」

「何者だ。お前は敵か？」

サルバドールはオブリチニキのマスクと帽子を掴んで、問いに答える。

「それは君達が決める事だ、新顔さん。俺は最早、何者でもない」

「なっ……!!? そんな、その姿は……!!?」

そのサーヴァントは顔を見て驚愕に顔を染めた。サルバドールは布地の中から右腕も露出させる。

「そちらの対応を聞こうか、セイバー。……いや、アルテラと呼んだ方がいいか？」

「マスター……! まさか藤丸立香という名前は——!」

「かつてはその名前で良かったんだがな。ある宝具のおかげで、名前諸共消え去ってしまったんだ。一回な。だから、今は正しくない。代わりと言ってはなんだが、別に使ってた名前があるからそっちなら通じるかな？」

「念話で伝えてくれ。サルバドール・アニメスファイアが死ねずにこのこ帰ってきた、てな」

正直、みんなに会うのは怖い。

無事に帰る。それを裏切って自分自身を取り残したのだ。

散々泣かれるだろう。沢山怒られるだろう。軽蔑さえされるだろう。



う。

それでも。

真っ先に帰ってきて思い浮かんだのは、カルデアにいたメンバーの事だったんだ。

それに……。

待たせてしまった女性もいる。

でももし、許されたなら。共にまた冒険を繰り広げる事が出来たら。

その時は、思い出話に花を咲かせる事にしよう。

俺はもう、藤丸立香という存在ではない。だから、これからは以前会った並行世界の自分の選ぶ道とより乖離した世界になるだろう。

それがいい事かは分からない。別の結末になる事は間違いないだろう。それでも俺は進むだろう。

さて、彼らに今までの事を話すならどんな題名にしようか。

中々、上手いのが思いつかないな。

少しダサイかも知れないが、取り敢えず題名をつけるなら。

『英雄育成の為に狩られる腕の裏話』だ。

さて。話すなら、俺は何回死んだかを思い出さないとな。

完。